

第Ⅳ章

マッカ巡礼と観光の弁証法

HAJJ 2023

From HANEDA airport 14 nights Makkah , 4 nights Madinah 2023 June 18

21 Days 1,050,000 JPY



Group D

Date	Itinerary	Including	Not including
June 18	Please gather at HANEDA airport at 20:00	✓ International Air ticket	Travel insurance
June 19	01:00 : Depart from HANEDA airport to Doha 06:30 : Arrive in Doha 15:45 : Depart from Doha to Jeddah 18:20 : Arrive in Jeddah airport , move to Makkah	✓ Fuel surcharge ✓ Accommodation in Makkah and Madinah	PCR tests if requested Vaccinations
June 19～	Makkah stay 6 nights	✓ Transportation inside Saudi Arabia ✓ Meals	Airport taxes Qurbani (Hadi)
June 25～	Mina & Arafah stay (Hajj Manasik period) 6 nights	✓ Sightseeing in Madinah and Makkah ✓ Ithram clothes for Men	Transportation inside Japan Any personal expenses
July 1～	Makkah stay 2 nights	✓ Hajj Manasik Class	
July 3	Move from Makkah to Madinah by bus		
July 3～	Madinah stay 4 nights		
July 7	04:40 : Depart from Madinah to Doha 06:55 : Arrive in Doha		
July 8	02:05 : Fly from Doha to Narita 18:35 : Arrive in NARITA airport		




前章の末尾では、デジタル社会の反フロンティアに存立する行為現象のひとつに宗教体験があることに触れた。宗教は、モダニティの時代よりはるか以前から観光的行為と密接な結びつきをもっていた。本章では、ムスリムにとっての「地上の楽園」観光と一体化した今日のマッカ大巡礼（ハッジ）のあり方を、サヤン氏（仮名）という日本在住インドネシア人ムスリム女性が2023年に実行した事例にもとづき記述する。序章第4節で言及したように、このムスリムの巡礼＝観光は、20世紀前半にはじまり欧米社会から諸社会へと裾野を広げた楽園観光とは別種の、グローバルに浸透しているもうひとつの楽園観光といえる。本章では、これを現代の周縁的な楽園観光のひとつとみなして検討する。

第1節では、語の表記に関わる留意点やキーワードの含意に触れたのち、ひとりのムスリム女性に焦点化する民族誌的研究という本章の方法的枠組みについて述べる。第2節では、日本で暮らすムスリムに焦点を当て現代のマッカ巡礼を主題化する本章の理論的枠組みについて整理する。第3節では、イスラームの教義に照らし、マッカ巡礼の起源と概要を確認する。本章の肝である第4節では、サヤン氏の行ったハッジについて記述する。そして第5節では、若干の民族誌的事実を補足しつつ現代のマッカ巡礼の特徴をあらためて整理し、本章の表題に「弁証法」をもちいた所以に触れて議論を総括する。なお、本章は、3編に分割した拙論（吉田 2025, 2026c, 2026d）を統合し略述・修正したものである。

第1節 マッカ巡礼の人類学的研究

本節では、議論の出発に際して確認すべき諸点と本研究の方法的枠組みについて述べ、全体の議論の導入とする。まずは、語の表記に関わる点からである。

本章では、アラビア語とインドネシア語の語句を、おもにインドネシア人ムスリムの話者から聞き取った発音をカタカナで表記し、そこに適宜アルファベット表記を付すことにする。アラビア文字表記は省略する。アラビア語のアルファベット表記では、『岩波イスラーム辞典』（大塚・小杉他（編）2002）を適宜参照する。ただし、当該辞典のアルファベット表記は現在のサウディアラビア現地におけるそれとずれることもある。また、この辞典や他の辞典のカタカナ表記が話者——アラビア語に堪能な者もいる——から聞き取った発音とずれることもある。複数の話者の発音の間にずれがあることもある。そうした場合、主要な語については、たとえば「アッラー／アウロー」「ウムラ／ウムロ」のように、もっぱら左側に文献由来、右側にインドネシア人話者由来のカタカナ表記を記すことにする。ただし、話者由来の語を複数記すこともあり、この点で本章の表記は厳密なものではない。

こうした語の表記や音のずれの背景にはアラビア語の特性がある。おもな点に触れる。アラビア語は、口語的方言語（アーンミーヤ）や、ペルシア語・トルコ系諸語等の語彙を含み、社会言語学的には二重言語的特徴をもつ。アラビア文字は語頭・語中・語尾でかたちが変わる。その大半は子音のみを表し、これに母音記号を補って読むが、学習用テキストなどをのぞけば母音記号は通常表

記されない。子音・母音は多数あり、高低の音調や抑揚をつけて発音し文をつくる。名詞には限定・非限定の区別と格変化があり、これが語の役割・意味・発音の確定に寄与する一方、語形は複雑に変化する（池田・竹田（編）1981: 3-8; 大塚・小杉他（編）2002: 7-15, 76-77; 川本・山田（編）2004: 8-19; 小杉麻 2006; 新妻 2022: 11-27; 水谷 2010b, 2018: 11-21）。

たとえば、イスラームの唯一神を指す語 *Allāh* は、文脈により *Allāhu* や *Allāhi* などに変化する¹。アザーン（*adzān*; 毎日の礼拝の呼びかけ）や礼拝の成句に登場する「神はもっとも偉大なり」（*Allāhu akbar*）という慣用句では、「アウローフ」と聞き取れる発音および語形となる。このやや文語（正則アラビア語）的な表現は、口語的表現では *Allāh akbar* となり、「アウロー」と聞き取れる音・語形となる（cf. 竹田 2006）。日本では *Allāh* を「アッラー」と一般に表記するが、個々の文章や会話文には微妙に異なる語形や発音が現出する。また、アラブ世界内外の地域間で語の発音は微妙に異なることもある。

アッラー／アウローについてはさらに触れるべき点がある。アラビア語でもインドネシア語でも、*Allāh* は一神教の神一般をも指示する（cf. 小杉 2006b: 28; 大塚 1989: 302, 333）。それゆえ、インドネシア人ムスリムは²、キリスト教の神と区別してアラビア語風に語尾の *h* を強く「アウロー」と発音する傾向がある。本研究では、教義に関する記述の文脈ではアッラー、インドネシア人話者に関する記述の文脈ではアウローと、おもに表記する。

ムスリムは、預言者ムハンマドを実名のみで呼ぶことは礼を失すると考え、通常「預言者」（*nabi*）や「使徒」（*rasūl*）と呼ぶ。大半の先行研究は「ムハンマド」の表記を採用するが、これは、研究対象たる人々の認識や理解に即してこれを理解しようとする人類学の基本スタンス（後述）や倫理的観点に照らせば、問題含みであると私は考える。ただし、イスラームにおいては、イブラーヒーム（アブラハム）もイーサー（イエス）も預言者であり使徒である。ムスリムにとって最高の預言者は最後の預言者ムハンマドであり、単に預言者といえば彼を指すが（アルジール 2010: 23-27; 大塚・小杉他（編）2002: 438, 1028-1029; 小杉 2006a, 2006c; Berkey 2023(2010): 20-23）、「預言者」や「使徒」といった単体表記だけでは記述にあいまいさを生むおそれもある。そこで、以下では、話者たちがときにもちいる「預言者ムハンマド」（*Nabi Muhammad*, *Nabi Muhammad SAW*）という表記をもっぱら採用し、文脈から明確と判断しうる場合は「預言者」と略記する。

次に、本研究では、イスラームの礼拝所をアラビア語に即してマスジド（*masjid*）と表記する。この語は、イベリア半島に入ったアラブ人らのムスリムによって訛ったかたちで発音され、これがスペイン語の *mesquita* となり、西欧諸語に取り込まれ、英語圏では *mosque* となったと考えられる。ただ、このスペイン語の *mesquita* にはムスリムにたいする侮蔑のニュアンスが込められていた可

1 *Allāh* の語は、一般的な神格を表す *ilāh* に定冠詞 *al* がついて生まれたものとされ、ユダヤ教やキリスト教の唯一神も指し示す語であったと考えられる。なお、*Allāh* は当然ながら単数形のみであるが、*ilāh* には複数形もある。しかし、イスラーム成立後、ムスリムにとって *Allāh* は、他の諸神を認めない、絶対的の唯一神を意味する語へと変貌した。大塚は、信仰告白やアザーン等にある「アッラーフのほかには神はなく…」（*lā 'ilāha 'illallāhu* …）という成句はアッラーを単純に「神」と訳す場合の不都合さを明示していると指摘する（大塚 1989: 300-303, 2015(2000): 33, 39-40; 小杉 2002: 69, 2006b; 水谷 2023: 24-25）。

2 インドネシア共和国の2023年の総人口は約2億8千万人、その約87%がムスリムであり（<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/indonesia/data.html>）、スンナ派が多数派である。インドネシアでは、13世紀以降、軍事征服を伴わないかたちでイスラームが諸地域に浸透していったこともあって、イスラームとムスリムのあり方は多様である。ヘフナーはこれを「多中心的多様性」（*pluricentric diversity*）と表現する。その多様性の統合に向けた模索は、独立後にもちこされ、現在も進行中である（今永 1992: 84-87; 大塚・小杉他（編）2002: 185; 倉沢 2006: 14-15; 小林 2007, 2008, 2014a; 中村光 1991; 深見 1991: 65; Burhanudin & van Dijk (eds.) 2013; Clarence-Smith 2023(2010); Feillard & van Doorn-Haeder 2013; Hefner 2016b, 2023a(2010): 593; Ichwan 2013; Lindsey (eds.) 2012; Menchik 2017(2016); Nakamura 2012(1983); Ricklefs 2007, 2012; van Bruinessen 2011, 2013b, 2013c; Wasserstein 2023(2010): 196-198, 200, 201-202）。

能性がある。日本ムスリム協会は、「モスク」は欧米語であり、「クルアーン」には「マスジド」の語が使用されていることや、「モスク」がアラビア語で「貧しい」を意味するミスキーンに由来する中世キリスト教徒の語用である可能性に触れ、2012年から礼拝所をマスジドと呼ぶことにしている（羽田 2016(1994): 15-16; 水谷 2023: 226-233）。こうした点に鑑み、本研究は「マスジド」の表記をもちいる。

ほかに、序章脚注9では、マッカとマディーナの2都市を略称で表記することにあらかじめ触れておいた。以上が、語の表記に関する諸点である。

次に、章の表題にある「マッカ巡礼」の含意を画定しておく。マッカへの巡礼としては、ヒジュラ暦第12月——巡礼月（Dhū al-Hijjah）と呼ばれる——の8日～12日を中心に実行されるハッジ／ハッジ（hajj）と³、第12月以外の時期に随時行うことのできるウムラ／ウムロ（ʿumra）の2つがある。後者はハッジの省略型といえ、日程も短く済むものの、「五行」として括られるムスリムの義務には当たらない（第3節）（大塚 2015(2000): 44; 日本イスラム協会・嶋田・板垣・佐藤（監修）2002(1982): 279-282; Bianchi 2004: 39-40）。本研究では、先行研究にならい、ウムラ／ウムロを「小巡礼」、ハッジを「大巡礼」とも表記する。一般に、「マッカ巡礼」はハッジを指すことがおおい（大塚 2004a: 93-94, 2015(2000): 33-44; 大塚・小杉他（編）2002: 487, 661, 380）。本章の主要な記述対象もこのハッジである。ただ、ウムロを「小ハッジ」ということもあり、小巡礼もマッカ巡礼ではある。また、大巡礼について理解する上では、小巡礼に適宜目配りして両者の共通性や連続性と差異とを確認する方がよい。大巡礼のみならず小巡礼の際にマディーナを訪れる巡礼者もいる（Alsini, Ekiz & Hussain 2019: 95）。こうした点から、本研究では「マッカ巡礼」を大巡礼と小巡礼をともに含む、広い意味でもちいることにする⁴。

次に、後述の議論に登場する「パッケージ観光」の概念を画定しておく。玉村は、『パッケージ観光論』において、パッケージ・ツアーを「旅行会社が事前に作成し広告その他の方法により募集して行う旅行であり、日本では『旅行業法』で「主催旅行」と呼ばれている」とする（玉村 2003: 3）。しかし、現行の旅行業法（令和7年改正）には「主催旅行」という語はない（<https://laws.e-gov.go.jp/law/327AC0100000239>）。これは、「企画旅行」とりわけ一般に募集型企画旅行と呼ばれるものに当たると考えられる。旅行会社は、顧客の依頼にもとづいて旅行計画を作成しこれを販売する場合もあれば、あらかじめ目的地・旅行代金・日程・含まれるサービス——運送・宿泊・その他。旅行業法では「運送等サービス」とも略記される——等の情報や条件を明記した旅行計画を作成して、これを顧客に提示し販売する場合もある。一般にパッケージ・ツアーは後者の募集型企画旅行を指す。

ただし、本研究は、玉村の議論や旅行業法の趣旨とは異なり、旅行会社ではなく観光者という主

³ ヒジュラ暦は、ヒジュラ（移住／聖遷）後の638年に第2代カリフにより制定され、イスラーム国家公式の暦となり、今日世界のイスラーム社会の公的暦となっている。なお、ヒジュラ暦では前日の日没から1日がはじまり、新月から次の新月までの29～30日が1カ月である。グレゴリ暦とヒジュラ暦とは、日・月・年いずれのレベルにおいてもずれることになる（大塚・小杉他（編）2002: 808-809; 水谷 2010a: 41）。

⁴ マスジドや預言者・聖者の廟に参詣ないし墓参する行為を、巡礼に含めることもある。しかし、これらの行為を指すアラビア語はズィヤーラ（ziyāra; 参詣）である。たとえば、おおくの巡礼者はマディーナにある「預言者マスジド」（al-Masjid al-Nabawi）——預言者ムハンマドが建てたマスジドであるとともに、生前の預言者の住居の所在地でもあり、死後の埋葬地でもあり、生前の預言者が日々礼拝を行い、説教をし、おおくの啓示を受けた場所でもある——を、大巡礼の際に訪問するが、この行為はズィヤーラであって、巡礼の一環ではない。ズィヤーラという語は「クルアーン」に登場しないこともあり、「参詣」と「巡礼」は分けて考えておく方が適切である（大塚・小杉他（編）2002: 487, 525-526, 1029; Bianchi 2004: 40; Buitelaar & Mols 2017(2015): 4; Buitelaar, Stephan-Emmrich & Thimm 2022b(2021): 2; Rahimi & Eshaghi 2019b: 3-14, 38; cf. 日本イスラム協会・嶋田・板垣・佐藤（監修）2002(1982): 268-269, 282; Malikov 2019; Millie & Mayo 2019）。

体とその行為現象たる観光に着目する（序章第1節・第Ⅲ章第1節）。そこで、おもに「パッケージ観光」という表記を採用することにし、これを、事前に旅行会社によって企画されたパッケージ型の観光商品に応募した顧客（観光者）により実践される行為現象である、と定義する。提供されるサービスの内容は、その商品により多様であって、フライト、宿泊、現地での移動（輸送）、各種の情報、さらにはビザ取得、食事、現地でのオプション・ツアーなどを含みうる。昨今は、主要サービスをすべて盛り込んだフルパッケージ型の観光商品よりも、それらの一部を追加したり抜いたりできるパッケージ商品の方がおおい。また、現地の中小のエージェント——レンタカー業者やガイドなど——が介在して諸サービスのオプションが組み上がっている商品もおおい。ただ、いわゆるバラ売りタイプではなく、旅行会社が事前に一定の諸サービスをパッケージ化してまとめた観光商品を顧客が購入し、これを消費・実行する観光の形態は、パッケージ観光とみなす。顧客がかなり自由に自身の観光行為をアレンジできる今日のあり方は、第Ⅲ章第2節で触れたポストフォーディズム体制の賜物である。また、日本では、インバウンド観光の需要増を背景に、着地型観光の促進が模索されている現状もある。現代は、20世紀後半のフルパッケージ型の大衆観光全盛時代から脱パッケージ化への流れが強まる過程の中にあり、マッカ巡礼にもこの点は看取される（第5節）。ただ、本研究の記述の中心軸となる2023年の日本発マッカ大巡礼は、フルパッケージタイプとみなしうるものであった。

＊

次に、本章の理論的・方法的枠組みについて述べる。本章では、①人類学的な民族誌研究のスタイルを採用し、②観光論の立場から、③マッカ巡礼の今日的あり方を、④ひとりの日本在住インドネシア人ムスリム女性が2023年に実行したハッジに照準を合わせ、理解しようとする。以下、本節では①と、④の一部を先行して取り上げ説明する。残る点についての説明は、第2節にまわすことにする。

まずは上記①からである。これについては序章第1節であらかじめ論じているが、本章の議論対象に即して若干の補足をしておきたい。

大塚は、イスラーム学との対比を念頭に、人類学的イスラーム研究について次のように語った。イスラームにはさまざまな形態がある。そうした「諸イスラーム」(islāms)は、時空を超越した普遍的な「イスラーム」(Islām)原理から由来したものというよりも、ムスリム各自がムスリムや非ムスリムと日々つきあう過程の中で歴史的・社会的に構築されてきたものとみなす方が、経験科学の立場からはより理解しやすい、と(大塚 1989: viii)。また、別著では、おなじイスラームを信仰していても、時代や地域により、またおなじ時代・地域であっても階層・世代・ジェンダーなどの差異により、ムスリムの生活のあり方はさまざまであり、その差異に関心を払うことが「人類学」のひとつの特徴である、とも述べた(大塚 2015(2000): 32)。普遍的な大文字のイスラームの探究——たとえば「事実、客観的にイスラームは1つなのであります」と述べる井筒の立場はその代表例であろう(井筒 1991: 32)——よりも、時代や地域によって多様な諸ムスリムや小文字の諸イスラームの理解を志向し、これを積み重ねていくことが人類学的なイスラーム研究であると、大塚は考えた⁵。本章は、こうした意味での人類学的マッカ巡礼の理解を追究する。

⁵ こうしたイスラームの多様性を重視する視点は、21世紀のイスラーム研究においてより支配的になっている (cf. Asad 2012(1986); el-Zein 2012(1977); Kreinath 2012: 1-9)。イルウィンは、イスラーム文明は諸イスラーム文明の集合体であって、決してひとつのイスラーム文明があるのではないと述べ、1800年時点でのイスラーム世界はそうした諸イスラーム文明の

ところで、この大塚の指摘の延長線上には、それぞれのムスリム個人によってイスラームの具体的なあり方は異なるとみなすよりミクロな観点から、特定の人に焦点を当てる民族誌的研究を定位できるであろう。クラパンザーノの実験的民族誌は、その種の先駆的な試みのひとつといえる。近年のオートエスノグラフィへの着目も、こうした研究と軌を一にする。本研究は、大塚も主要な理論的立脚点とした、理解社会学・解釈人類学・現象学的社会学などの理論的立場に立って、ひとりのムスリムに焦点化した民族誌のスタイルを採用する（序章第1節）（cf. アイケルマン 1988(1981); 井本 2013; 大塚 1988: 405–408, 1989: 8–29, 2000: 2–21; 北村 2022; 楠見 2024: 146–151; クラパンザーノ 1991(1980); 西川 2024a; 西川・ファビオ他（編）2024; Geertz 1971(1968); Marsden & Retsikas 2013(2012)）。

その場合、本研究は、イスラーム研究とくにその巡礼研究ではジェンダー論の視点が十分でなかった点に鑑み、ひとりのムスリム女性（ムスリマ）に焦点を当てた民族誌的研究を志向する。ムスリマは、人類学を含むイスラーム研究において周縁化されたポジションにあった（Buitelaar, Stephan-Emmrich & Thimm 2022b(2021): 4; cf. 鴨川・服部（編）2025; 小林 2020; 中田 2020; Arnez & Budianta (eds.) 2024; Hefner 2023c(2010): 28–30）。

ひとりのムスリマ——サヤン氏（2023年時点で40代後半）であり、プロフィールは第4節第1項で記述する——に焦点を当てるといっても、当人の行為や理解のあり方は、その周囲のムスリムや非ムスリムとの相互主観的な相互作用の中にある。本章の事例に即していえば、インドネシア人や日本人の友人たち、日本人の夫や子ら家族、インドネシア在住の家族、対面であれオンラインであれ、当人にイスラームの知識を教示し質問に答えてくれる先生たち——男性の場合「ウスタツ」(Ustadz)、女性の場合「ウスタジャ」(Ustadjah) という、アラビア語／ペルシア語起源の「先生」を意味する敬称で呼ばれることがおおい——とのコミュニケーションや交流の中で、当人の認識や解釈は構築され変容していく（cf. Hoesterey 2015; Marsden & Retsikas 2013(2012): 6–9）。本章では、ひとりのムスリマを取り巻く人々が織りなす社会的相互作用のひとつの結節点として、彼女のマッカ大巡礼という社会的行為とそれにたいする彼女の思いを理解しようとする。望ましいのは、この種の民族誌的研究を複数重ね合わせ、周縁的で多様なムスリムの理解に資する「厚い記述」を蓄積していくことである。本章は、さしあたりその出発点をなす。

以上、本章のもっぱら方法的枠組みに関わる①と④について述べた。④については、日本在住ムスリム——彼らもまた周縁的なポジションを占める存在といえる——を対象とすることについて述べるべき点があるが、これは②③と合わせ、第2節で取り上げる。

本章の記述は、とくに文献への言及がなければ、2023年のハッジ出発以前にはじまる数十回におよぶサヤン氏（および夫）へのインタビューと、SNSを介した百回近い補足的聞き取り、サヤン氏の了解を得て確認させていただいた書類・画像データ等の資料、そしてサヤン氏以外の日本在住インドネシア人ムスリムからの聞き取りにもとづく。以下で掲載する写真も、断り書き等がないかぎり、サヤン氏にご提供いただいたものである。

第2節 不連続性・観光論・移住者への着目

本節では、前節で示した本章の議論枠組み①～④のうちの残る諸点、つまり②観光論の立場か

一団の中にあつたとする（Irwin 2023(2010): 3, 16）。イスラームをひとつとみなすイスラーム研究の視点自体、それ以降のイスラーム化の史的産物の一環かもしれない。

ら、③マッカ巡礼の今日的あり方を、④日本在住インドネシア人ムスリマの大巡礼に照準を合わせ、理解する、という3点について説明する。以下では、これらがたがいに連関し合っていることに留意しつつ、③②④の順で議論を進め、そこから計5つの論点を指摘する。そして第1節で触れた点も含め、本研究の議論枠組みと主題をあらためて整理しておく。

(1) 現代マッカ巡礼に見る不連続性

本項では、マッカ巡礼の今日的あり方を論じる、ということに関して2点を指摘する。

本章は、2023年にひとりのムスリマが実行した大巡礼の民族誌的記述（第4節）を核とし、これを先行研究の記述に照らしつつ、2010年代から2026年6月時点までを中心とした21世紀のマッカ巡礼のあり方を把握しようとするものである。では、なぜ今日の巡礼なのか。これには2つの理由がある。ひとつは、ポストコロナ期のマッカ巡礼を記述した民族誌的研究が管見のかぎりまだ存在しないことである。これが本節の第1の論点である。

もうひとつの理由は、本研究が、マッカ巡礼を取り上げてきた先行研究とはいささか異なる理論的関心をもつことである。先行研究の大半は、イスラーム学や宗教学の立場から、マッカ巡礼がイスラームの教義上いかなる意義をもつのかを主題化してきた。その種の議論がイスラーム世界の文化的多様性や歴史的变化を等閑視してきたわけではないが（ex. 今永 1992; 後藤 2021(1991); 坂本 2000; 水谷 2010a, 2010c）、主眼がマッカ巡礼の教義上の位置づけにあれば、時代をこえた巡礼の連続性が一義的な主題となり、不連続性や変化への着目は二義的な論点になる。しかし、私は、マッカ巡礼はある部分でおおきく変化したからこそ、その連続性を保持しえたと考える。マッカ巡礼の変わった部分と変わらなかった部分はたがいに支え合う関係にあったとみなす観点から、連続性に着目する視野の背後に退いているマッカ巡礼の不連続性や変化つまりは差異性にむしろ着目したいのである（cf. Jamal, Raj & Griffin (eds.) 2019a; Rahimi & Eshaghi (eds.) 2019a）。

イスラーム成立以降、マッカ巡礼の宗教面での主要構成要素、具体的には、祈りの成句、儀礼的所作、儀礼行為の順序・日程・過程、遵守すべき規範、タブーなどは、ほとんど変わっていないと考えられる。巡礼の舞台も、マッカ中心部にある聖マスジド（al-Masjid al-Haram）——先行研究は「聖モスク」と表記する——とくにカアバ（Ka'ba）がその中心であり⁶、大巡礼の場合はマッカ郊外の荒野がもうひとつの舞台となることに変化はなかった。巡礼にかぎらず、イスラームの儀礼行為は、経典「クルアーン」（al-Qur'ān）や、ハディース（hadīth, hadīth nawabī）つまり預言者ムハンマドの言行スンナ（sunna）の伝承記録にもとづいており⁷、そこから逸脱することはなかった。「クルアーン」第24章56節・第59章7節などにあるように、ムスリムが預言者ムハンマドにしたがう

6 カアバはアラビア語で立方体を意味する。伝承によると、天上には天使たちがその周りをまわる館があり、アッラーはアダムとハワ（イヴ）に、それとおなじものを地上に建設しその周りをまわることを命じた。これがカアバの起源である。ヌーフ（ノア）の時代の大洪水によりその場所は失われたが、イブラーヒームがその位置をアッラーから知らされ、子イスマーイールとともにカアバを建立した。カアバを擁するマッカは、イスラーム成立のはるか以前から人々の巡礼地であったと考えられる（エスポジト 2009(2002): 53; 大塚・小杉他（編）2002: 236–237; 小杉 2006c: 33–34, 37; 水谷 2010a: 30–34, 44; Rahimi & Eshaghi 2019b: 38; Wheeler 2019: 49–50, 54–56）。

7 「クルアーン」——原義は「読まれる／誦まれるもの」である——は、意味も言葉もすべてアッラーから預言者ムハンマドに下されたものである。それゆえ、これを読んだり朗誦したりすることは信仰行為になる。一方、ハディース（伝承）は、意味はアッラーから下されたが言葉は預言者ムハンマドに由来する、とされる。当初「クルアーン」の内容は暗記され、朗誦されて広められ、預言者の死後20年ほどで、高弟たちの合意のもと全体がまとめられた。シャリーア（sharī'a）——「イスラーム法」といわれるが、近代西洋的「法」とのずれには注意すべきである（Hallaq 2023(2010)）——は、「クルアーン」と預言者ムハンマドの言行スンナとを法源とする（井筒 1991: 33–37; 大塚 1989: 48–52; 大塚・小杉他（編）2002: 338–344, 466, 661, 766; 桐原 2022: 24–25; 小杉麻 2024: 30–31, 37, 77–80; 小杉 2002: 19–23; 佐藤次 2009: 26–29; Emon 2016; Hefner 2016a, 2016b; Salim 2008）。

ことはアッラーの命である。ハディースについては、預言者ムハンマドの言葉をどう判断するかがハディース学として発展していくが、18世紀以降とくに20世紀後半のイスラーム主義の強化・復興（イスラーム化）の中で、預言者ムハンマドの時代のあり方に原点回帰することがより重視されるようになった（大塚 2004b: 11–17; 大塚・小杉他（編）2002: 338, 550, 661, 768–769, 982; 小杉 2002: 23–26, 122–123, 167–171; 森 2014: 42; Clarence-Smith 2023 (2010): 240; Hefner 2023a (2010), 2023c (2010): 2–4; F. Robinson 2023 (2010): 1）。マッカ巡礼は、「クルアーン」や預言者ムハンマドの言行を忠実に守って実行されてきた。

もっとも、そうした連続性や共通性に着目する理解枠組みは、第1節で言及した普遍的な大文字のイスラームに関心を寄せる立場にもとづくものといえる。であれば、小文字の複数のイスラームやムスリムに関心を寄せる立場に立った議論もあってよい。それは、巡礼という社会的行為現象が有する宗教以外の諸相にも目配りし、巡礼の多様性や個別性そして不連続性をも捉えようとすることを意味する。先に、マッカ巡礼はある部分でおおきく変化したからこそ連続性を保ってきたと考えられる、と述べた。では、マッカ巡礼の連続性を背後で支える、時代に沿った対応や変化にはいかなるものがあつたであろうか。

たとえば、遠方から来る巡礼者の移動手段は、「クルアーン」第22章27節にある徒歩やラクダから、船舶や列車や自動車そして飛行機へと変遷した（大塚・小杉他（編）2002: 470, 490; Bianchi 2016; Feener 2023 (2010); Tagliacozzo 2016）。いまや大巡礼は、多数の国際臨時便、大巡礼期間のみ稼働するジェット空港臨時ターミナル、バス・タクシーの巡礼者向け集中投入に支えられる（水谷 2010a: 206–211）。聖マスジド周辺は、立体交差の高架とトンネルが複雑に交わり、外資系の五つ星ホテルを含む宿泊施設や商業施設が密集する地域となった。野町はこれを「効率一点張りの交通網と高層ホテルの林立する佇まい」と表現する（野町 2002: 119, 120）。マッカ中心部は、世界中から来る巡礼者を受け入れる聖都・巡礼地たるがゆえに、サウディアラビア政府によって先端技術を導入した機能空間へと変貌してきた。ウトモらは、「ハッジはおそらくより世俗的になっており、巡礼者の精神的幸福よりもむしろ物理的幸福に焦点を当てるものとなってきた」とし、ハッジ巡礼者の経験は50年前と顕著に異なっていると指摘する（Utomo, Scott & Jin 2019: 55）。

植民地時代以降、巡礼と巡礼地は近代的な技術革新の投入を受けてきた。聖マスジドは時代とともに大型化し、いまは礼拝スペースの床冷却も完備されてより快適になった⁸。女性の巡礼者も増加し⁹、高齢者や身体障害者への配慮も厚みを増した。マッカを統治する政体や国家も、時代とともに移り変わった。ムスリム人口増と中間層の増大は、巡礼者数の増加を惹起した。1950年代までほぼ10万人までに収まっていたサウディアラビア国外からの大巡礼者数は、その後飛躍的に増加した¹⁰。ムスリムであれば自由に行えたマッカ巡礼は、サウディアラビア政府による巡礼ビザなしで

8 聖マスジドの拡張過程については野町や森の記述を参照する。20世紀後半以降の大規模工事は4期にわたる。①1955～1973年に、4つのミナレットが増設され、天井が新設され、床が人工石と大理石になり、サアイ廊（第3節参照）に屋根が付され聖マスジドに接続された。②1982～1988年に、礼拝エリアと新棟・新門が増設された。③1988～2005年に、多数の入場門・大理石柱・床冷暖房・空調設備・エスカレーター・排水設備が設置された。④2011年から、聖マスジド全体の敷地を5倍に広げる工事がはじまり、収容人数は77万人から300万人になった。国王や国家は、聖都の守護者としてその不断の改良を行う責務を負う（野町 2002: 110–115; 森 2015 (2007): 143; Alsini, Ekiz & Hussain 2019: 93）。

9 1960年代はじめ、大巡礼者に占める女性の割合は30%ほどであったが、1990年代には45%ほどになった。ただ、男女の割合については国や地域の差がある。ビアンチやリュッキングによれば、インドネシア人の大小巡礼者の中に占める女性の割合は他国に比べ高い傾向にある（Bianchi 2004: 68–69, 119, 2017 (2015): 74–77; Buitelaar, Stephan-Emmrich & Thimm 2022b (2021): 5, 9; Hefner 2016a: 23–24, 2016b; Lücking 2022 (2021): 93）。

10 2006年の大巡礼者数は238万人、うち国外巡礼者は165万人、国内巡礼者は72万人とされる。当時の小巡礼者は年間600万人規模とされる。また、水谷によれば、統計にカウントされない、砂漠を歩いてエジプトなどから来る大巡礼者が今日

は実行できなくなった。2019年からは観光ビザ発給も開始され、国際空港のあるジェッダ・首都リヤド・マディーナなどは非ムスリムの外国人観光者にも開放された。現状マッカ中心部に非ムスリム観光者は入れないが、脱石油時代を見越した国を挙げての観光産業強化は進行中である。現代のマッカ巡礼は、こうしたグローバルなムスリム社会の変化と政府の政策更新の中にある。それは、詳細は省くが、受け入れ側のサウディアラビアだけでなく、送り出し側の国々についてもいえることである（武藤 2015b(2007); 森 2014; 吉田信 2024; Alsini, Ekiz & Hussain 2019; Bianchi 2004: 49–58, 68–69; Buitelaar, Stephan-Emmrich & Thimm 2022b(2021): 7–8; Hefner (eds.) 2023b(2010); Ichwan 2008; Rahimi & Eshaghi 2019b: 1, 15–24)。

もっとも、こうした変化の実態を通時的に把握することには限界がある。過去に遡行すればするほど、事実確認は困難になる。10年ほど前から巡礼者が気軽に写真を撮って SNS などにアップできるようになったが¹¹、以前は聖地での写真撮影は禁じられていた。写真がない過去の巡礼地や巡礼のあり方は、数すくない絵や文章により把握するしかない。そこで、本章は、2023年時点の現状をまず民族誌として記述することに主眼におき、ある程度確実性をもって確認できる2010年代～2020年代の変化を中心に、21世紀のマッカ巡礼の連続性と不連続性を把握することに主題を限定する。現代社会は加速度的な変化の中にある（ヴィリリオ 2001(1977)）。増えつづける巡礼者の受け入れ管理体制の強化はまさにその一端である。加えて、コロナ禍中にはグローバルな移動と行動の制限があった¹²。いまでも大巡礼は、コロナ禍中に巡礼待機者となったおおくの人々を抱える中で営まれている。この2010～2020年代に絞ったとしても、教義上変わらぬマッカ巡礼の中にさまざまな変化を見出し、連続性と不連続性の支え合いを具体的に描くことはできるであろう。こうした点から、本研究はこの時代に議論の射程を絞る。以上が本節の第2の論点である。

いったん論点を整理しておこう。①本研究は、先行研究のまだ存在しない、ポストコロナ期の2023年の大巡礼の民族誌的記述を主軸とし、2010～2020年代を中心とした21世紀のマッカ巡礼のあり方を把握しようとする。②時代の限定は、過去に遡行すればするほど事実確認が困難なためである。この時代に絞ったとしても、マッカ巡礼の宗教以外の諸相にも目配りしながら連続性と不連続性の支え合いを確認することは可能であろう。

(2) 巡礼と観光の境界を取り払う

本項では、観光論の立場に立つということに関して2点を指摘する。まずは議論の前提から述べ

100万人以上いる。このビザなし・無許可の巡礼者は、金銭的余裕がなく、宿泊施設も利用せず、監視の目を避けるため、適切な休息もとらない傾向がある。2024年の大巡礼では、酷暑の中1301名の死者が出たが、その8割以上はこの「非正規」の巡礼者であったとされる。1921年の大巡礼者は5万7千人、2012年は320万人とされ、この90年で56倍増えたことになる。サウディアラビア政府の発表する数字を含め、各種の数字をそのまま鵜呑みにすることはできないが、この間の世界のムスリム人口の増加率（約9倍）をはるかに上回るペースで大巡礼者が増加したことは確実である（店田 2021: 3; 野町 2002: 121; 水谷 2010a: 1, 211; 武藤 2015a(2007): 299; Bianchi 2004: 11)。

¹¹ 巡礼者の家族や友人は、巡礼者が現地からリアルタイムで送る自撮りの画像・動画そして音声を受け取り、巡礼者とやり取りすることで、ホームにいながらマッカ巡礼を追体験できるようになった（Buitelaar, Stephan-Emmrich & Thimm 2022b(2021): 10; Caidi, Beazley & Marquez 2018）。デジタルツールは、巡礼者を取り巻く人間関係のネットワークに、拡張された視聴覚的巡礼体験を提供している。

¹² 2020年3月、コロナ禍を受け、聖マスジドは史上はじめて夜間に閉鎖された。その後、サウディアラビア政府は規模を縮小し巡礼者を受け入れていった。同年の大巡礼は国内居住者1000人に限定され、10月以降小巡礼の受け入れが再開された。2021年の大巡礼は国内居住者6万人のみに限定された。ワクチン接種が世界的に進み、渡航制限も緩和された2022年は、85万人までの外国人巡礼者に巡礼ビザが発給され、国内外から合わせて100万人が大巡礼に参加した。2023年は、コロナワクチン接種証明が発給の条件であったが、巡礼行為中のマスク着用義務もなく、受け入れ人数枠はコロナ禍前にほぼ戻った。

る。本研究は、グローバル化やグローカル化、消費社会化、情報社会化とくにデジタル化、再帰的近代化、管理社会化、リスク社会化、液状化、モビリティの高まり、などの諸メカニズムの交差の中に位置づけ、現代観光を主題化する（第III章第2節・第3節参照）。その中において本章は、現代の観光と密接に交差する巡礼を、人・情報・モノ・マネーが人類史上かつてない速度・広がり・流動性をもって行き交い複雑に絡み合うその過程の中に位置づけ把握しようとする（Buitelaar, Stephan-Emmrich & Thimm (eds.) 2022a(2021); Schielke & Debevec (eds.) 2016(2012)）。

この点に関して参考になるのはコーエンの議論である。彼は、それぞれの主体にとっての観光経験が異なる意味をもちうるとし、それは「気晴らし」や「リクリエーション」のモードから現地の人々の生や価値観に共感し一体化しようとする「体験」や「実存」のモードまで幅がある、と理念型化した。前者のモードは観光者自身の生き方や価値観からは疎遠な経験であり、後者のモードは観光者自身の生き方や価値観の根幹にインパクトを与えるような経験である（Cohen 2005b(1996/1979)）。先行研究のおおくは、観光を、楽しみや娯楽、余暇（レジャー）、消費、移動、あるいは「観る」といった点に即して把握してきたが、当事者の相互主観的な認識や理解に照らすならば、現代の観光を、「観る」ことを主目的としたものに限定せず——たとえば、岐阜の長良川鵜飼の「まっくらうかい」のように、視覚障害者は観光者（ゲスト）のみならずホストにもなりうる——、レジャーや消費行為にも限定せず、移住などの長期の滞在との間に明確に境界線を引かず、また移動を必須としないヴァーチャルツーリズムやコーエンがいう実存モードをも含みうる、複雑な全体とみなすべきである、と私は考える。

観光をこのように捉えれば、世俗的な観光と宗教活動としての巡礼との境界はあいまいなものとなる（Badone & Roseman 2004b; 2-3; Rahbari 2022(2021): 76; Smith 1992: 4; Tuner & Turner 2011(1978): 20; cf. Graburn 2004: 136-137; Jamal, Raj & Griffin 2019b）。たとえば、巡礼者の中には、飲食・買い物・日帰り観光などを巡礼中に楽しむ者もいれば、そうした世俗的快楽には眼もくれずに宗教的行為に集中する者もあり、この宗教的行為への集中にこの上ない楽しみや至福を感じる信仰心篤い者もいる（第4節）。他方で、気晴らしの観光行為において宗教的といってよい体験やコーエンのいう実存モードを体験する観光者もいる（吉田 2019: 96-97）。当事者の認識や理解に即して当人の社会的行為の意味を把握することを重視するならば、俗なる旅＝観光と聖なる旅＝巡礼とをアプリオリに区別する必要はない。また、マッカ巡礼を提供する旅行業者が世俗的なレジャー要素を加えることで顧客を増やしてきたという経緯もある（Oktora & Achyar 2014; Utomo, Scott & Jin 2019: 55）。本章では、こうした点に照らし、巡礼と観光の境界を取り払い、マッカ巡礼をいわば拡張した概念としての観光のひとつとみなす¹³。これが本節の第3の論点である。

加えて、本章が観光論の立場を採用する別の理由がある。それは、サウディアラビア国外に在住するムスリムは、旅行会社やエージェントの販売するパッケージ観光商品を利用しなければ事実上マッカ巡礼を果たしえない、という点である。大巡礼においては、約5日間、全巡礼者がマッカとその周辺に結集し、儀礼過程の中でおなじ日時に移動するため、一望監視的な巡礼者管理なくしては大混乱や事故が発生するリスクが高い。また、そうした混乱や事故の発生を受けて、サウディアラビア政府は対策を強化してきた（Acar 2019）。こうして、いまや海外からの大巡礼者（小巡礼者も）は、ビザ取得とフライト・宿泊施設などの事前予約なしにマッカ巡礼に旅立つことができな

13 バドローネとローズマンの編書は、人類学的なボトムアップの視点から巡礼と観光を分離できない現状を各地の民族誌的事例に即して描く（Badone & Roseman (eds.) 2004a）。ただし、そこでマッカ巡礼は取り上げられていない。フレイや土井の研究も、拡張した観光論の視点から巡礼を捉え直す試みといえる（土井 2015, 2024; Frey 2004）。

い。しかも、政府は、先述した巡礼者の増加を受け、出発国別に発給する大巡礼ビザを当該国のムスリム人口の0.1%に制限している——ただし、この正規の割り当て数以外に上乗せを得る可能性もある——¹⁴ (野町 2002: 121; 森 2006: 15; Bianchi 2004: 11, 51–52)。各国から来る巡礼者が宿泊する宿泊施設の割り振りも政府が管理し、2023年大巡礼までは出発直前に旅行会社を通して通知する体制を取っていた。300万人以上の巡礼者が一挙にマッカ周辺に結集する——これに非正規巡礼者が合流し、国内外からの労働者も結集する——大巡礼のリスク管理には、発給ビザの制限とパッケージ観光化の組み合わせは合理的な方法である。本章が観光論の視点を採用するのは、世界各地から高速かつ長距離の移動をしてマッカに参集する巡礼者の現行管理体制がおもにパッケージ観光の形態を取っているからである。古代から連綿とつづく大巡礼の参加者は、古代ではありえなかった規模にまで膨れ上がり、予想できない途方もないリスクを抱えるものとなった。ムスリムの人口増を上回るペースで増大した巡礼者を受け入れるべく政府が管理体制を整えたことにより、大巡礼参加者は膨れ上がったともいえる。ここには、リスクの低減に向けた合理化がリスクの増大という非合理化を生ぜしめるというアイロニカルな関係性を看取することもできる。ともあれ、2023年時点で、海外発の大巡礼はパッケージ観光を主要な形態としており、こうした実態の理解には観光論の視点を導入することが有効である。これが本節の第4の論点である。

ここまでをまとめよう。③現代社会は、人・情報・モノ・マネーなどがグローバルかつグローバルに行き交い、デジタル化・液化化・リスク化といった諸メカニズムが交差する複雑な過程の中にある。観光も巡礼もその中にある。そして、当事者の相互主観的な理解の把握を重視するならば、世俗的な観光と宗教的な巡礼とをア priori に区別する必要はない。④サウディアラビアの外に在住するムスリムは、法令を遵守するかぎり、旅行会社の販売するパッケージ型観光商品を利用しなければ大小のマッカ巡礼に事実上参加できない。とくに大巡礼に関しては、数百万人の巡礼者がマッカ周辺に結集することもある。発給ビザ数の上限設定を伴うパッケージ観光化こそ、合理的なリスク管理の方法となっている。こうした点に鑑みても、マッカ巡礼の実態の把握に観光論の視点は有効である。

(3) 日本在住ムスリムの逆境と順境

本項では、日本在住インドネシア人ムスリムの大巡礼を取り上げることにに関して1点を指摘する。

これまで私は、人類学的観光論の更新をはかる一環として、インドネシアのバリ島の日本人移住者に関する民族誌的研究を積み重ねてきた (第V章参照)。観光と移住とは区別しがたいところがある。それは、現代人のホームとアウェイが溶け合ってきているからである。現代社会の液化化は、移住者という存在とその生において顕著である。本章では、こうした移住者の生への問題関心をもって、彼らのマッカ巡礼を主題化しようとする。

第V章では、それぞれの事情によりバリに移住した日本人が、「日本人としてバリに生きる」というアンビヴァレントな生を自ら選択し生活する状況に着目する。本章では、それぞれの事情により日本に移住したインドネシア人が¹⁵、「ムスリムとして日本に生きる」というアンビヴァレントな

¹⁴ この大巡礼者数割り当て枠は、サウディアラビア主導の下に1969年に創設されたイスラーム諸国会議 (OIC; 2011年からの名称は Organization of Islamic Cooperation) において1988年から採用され、各国との調整の下に運営されている。巡礼者数の制限にたいするムスリムやイスラーム諸国の不満はあり、イランはこの割り当て枠に反対して1988年から1990年までハッジをボイコットしていた (森 2014: 45; Bianchi 2004: 4–5, 51–53)。

¹⁵ 2025年6月時点の在留インドネシア人総数は230,689人であり (<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0004019020>)、過去5

生を自ら選択し生活する状況に着目する。そのアンビヴァレンスは、ムスリムにとっての日本での生活が順境と逆境の両面をもつという点に集約される。そして、この順境と逆境の諸契機の結び合いが、人生至高の念願といえるマッカ大巡礼への日本からの旅立ちを彼らにうながす¹⁶。これが本節の第5の論点である。

まずは逆境について確認していこう。日本は、移住したムスリムたちのホームとは異なり、彼らにとっての当たり前前の宗教生活が当たり前のようにできる社会環境にはない。嶺崎が編集した論集は、この逆境の諸相を描述している（嶺崎（編）2024a; cf. 奥島（編）2009）。

たとえば、礼拝に関わる諸事がある。イスラーム圏では毎日5回の礼拝を呼びかけるアザーンがマスジドから聞こえる。しかし、日本では、都市の一部などに点在するマスジドも、近隣に配慮し音出しを抑制している。アザーンの聞こえない環境は、イスラーム圏から日本に移住したばかりのムスリムにとってある種の空虚感を日々感じる契機となりうる。ただし、それでもマスジドはムスリムの生の拠点である。ゆえに、ムスリム移民たちは、安定した滞在資格や生活基盤が整う前から、寄付を募り合って各地でマスジドを建設してきた（安達 2026: 6-9; 桜井 2003: 20-21, 103-135; 店田 2015; 樋口直 2007a: 17）。当初、日本におけるマスジド建設やムスリムの紐帯形成の主要な担い手となったのは南アジア系（パキスタン、バングラデシュ、スリランカなど）あるいはトルコ系のムスリムであったが、近年はインドネシア人ムスリムの数が飛躍的に増加し、2020年代には全国で30以上とも40以上ともいわれるマスジドがインドネシア人を中心した担い手たちによって建設・運営されている。

日本で職業や学業に従事する者の場合、職場や学校周辺にマスジドがなくても、周囲の理解があれば礼拝場所は与えられるかもしれない。だが、ムスリム留学生がいる大学でも礼拝場所がないところが大半である。礼拝前、ムスリムは、きれいな水（水道水でよい）をもちいたウドゥー（udū'）と呼ばれる浄めの手続きをする。このときには足首以下も洗う。しかし、日本の一般的な洗面所は足洗いを想定したつくりになっていない。さらに、成人男性は金曜午後にマスジドで集団礼拝を行うことが望ましいが（大塚・小杉他（編）2002: 12-13, 199, 324-325, 417-418）、近くにマスジドがない者、マスジドが遠いので移動の時間が確保できない者、介護士など仕事の性格から毎回の礼拝時間の確保が難しい者らはおおい¹⁷（浅井・箕浦 2020: 175-130; 細谷 2024: 219）。

年間で約4倍に増加している。在留者の大半はムスリムである。ただし、日本の国勢調査は宗教統計や移民統計を取っておらず、正確な在住インドネシア人ムスリム人口は不明である（伊藤弘 2024; 岡井 2018: 182; 桜井 2003: 29-46, 92-95; 店田 2015: 2; 樋口直 2007a: 13; 嶺崎 2024b: 5）。なお、職業従事者でおおいは技能実習生——本章では以下、「実習生」と略記する——である（cf. 野中 2025: 203-205）。

¹⁶ 日本の東海地方の地方都市に住むひとりのインドネシア人ムスリマについて論じる本章と、インドネシアのバリ島のローカルな観光地に住む複数の日本人について論じる第V章とは、正確な対称関係をなしてはいない。議論の対称性という点では、複数の日本在住バリ人ヒンドゥー教徒を本章で取り上げるべきかもしれない。ただ、こと宗教生活に関するかぎり、日本で暮らすバリ人ヒンドゥー教徒はインドネシア人ムスリムが直面するような困難や逆境にあるとは思えない、という点は指摘しておく。バリ人は、バリのヒンドゥーと日本の仏教とはよく似ているという認識ももっている。本章では、ムスリムの生活の中心にある宗教規範の維持が日本では困難であることに照らし、日本のムスリム移住者の生のアンビヴァレンスに焦点を当て、これをバリの日本人移住者と対比しようとする。このように、本研究では、第IV章と第V章にアシンメトリカルな対応関係を設定している。

¹⁷ ただし、ムスリムに理解のある職場もある。ひとつ例を挙げる。ある20代のインドネシア人実習生は、職場から夕方の残業をもとめられたが、断っていた。敬虔なムスリムである彼は、残業手当よりも毎日の日没後の礼拝をなすべき時間帯の中で行うことを優先したかったのである。上司から何度も残業をお願いされた彼は、礼拝を優先したいという理由を率直に上司に伝えた。会社は、定刻ではなく1年を通じて変わっていく日没の時間に沿って、彼が約10分の礼拝のための休憩を取ることを認め、彼は残業をするようになった。会社は、その年に収益が上がったことから、従業員の慰労会として、地元で評価の高いシティホテルでパーティーを開いた。ビュッフェ形式のそのパーティーでは、通常のメニューやアルコールが並ぶコーナーとは別のコーナーに豪華なハラールのメニューとドリンクが提供され、ムスリムの従業員たちは感激した。夕方の礼拝休憩の取得とハラールビュッフェの話聞いた他の職場で働く友人たちは、うらやましがったという。彼

日本に暮らすムスリムは、とりわけ食——給食や学校行事での飲食、乳幼児食、病院食を含む——に苦勞する (ex. クレシ 2024; 佐藤兼 2024; 細谷 2024; ムクリサフ 2024)。よく知られているように、豚食はムスリムにとってハラーム (harām; 禁止) である¹⁸。「クルアーン」で豚は不浄なものとされ、豚食の禁止も複数箇所では明言されるなど、強い負のイメージを付与されている。ただし、豚にかぎらず、イスラームの正しい方法で屠畜されていない肉はハラームであり、日本のスーパーマーケットやコンビニエンスストアで売られる肉類の大半はハラームである。また、日本で売られる食品・食材の中には、明確な表示はないが、禁じられた肉類の成分を含むものがある、とムスリムたちは認識している。たとえば、私が知る日本在住インドネシア人ムスリムの主婦のおおくは、「乳化剤」「ショートニング」「ゼラチン」などの表示があるものは購入せず、口にしない。それらは、豚由来の成分やハラール (halāl) でない牛由来の成分などを含む可能性があるからである。植物性由来であれば問題なく、魚も問題ないが、寿司の場合は酢の成分に気をつけるべき点があるので、大手回転寿司チェーンの中でもここならよい、あそこは避けた方がよい、といった情報もある。これらの知識は、親しい友人の間で、口コミや SNS でのやり取りによって共有される。おおくの主婦たちは、肉類については、ハラール認証印付きの冷凍輸入肉——オーストラリアやブラジル在住のムスリム移民が生産する鶏肉が中心である——を近所のスーパー等で購入するか、大都市にあるハラール食材店でまとめ買いをするか、インターネットで購入するか、する。給食の代わりに子どもにもたせる弁当にも、当然ハラール食材をつかう。インドネシア人ムスリムたちのこうした食の戒律遵守は、イスラーム化の中で次第に厳格になってきたと考えられる¹⁹ (エスポジト 2009(2002): 184–187; 大塚・小杉他 (編) 2002: 412, 717, 847; 桐原 2022: 25–64; クレシ 2024: 42; 塩尻・池田 2004: 105–110; 樋口直 2007b: 122–123, 131; Arnez & Budianta (eds.) 2024; Hefner 2024: 2; Ichwan 2013: 71–73; <https://www.muslim.or.jp/about-halal/>)。

付言すると、私が知る日本在住インドネシア人ムスリムの主婦たちは、みりんがアルコールを含有することも知っているが、みりんのアルコールは調理の過程で飛ぶのでこれは問題ないとするイスラーム知識人／先生 (ウスタットやウスタジャ) の解釈を受け入れる者もいれば、もともとアルコールを含有しているから使用すべきでないとする別の先生の解釈を受け入れる者もいる。このように、ハラームとされる食材をめぐるのは、解釈および実践に幅や差異があるところもある (佐藤兼 2024: 19; ムクリサフ 2024: 89)。

ここで、この解釈と実践の幅という点に関して、イスラームの法学派による差異に言及しておきたい。インドネシアのムスリムの大半がスンナ派であることは脚注 2 で触れた。スンナ派には 4 大

に上司と率直に話をするを勧めたのはサヤン氏であった。実直な彼の性格を知るサヤン氏は、きちんとした会社であれば、こうした人物にこそ信頼を寄せると考えたのである。ほかに、自ら会社に掛け合い、礼拝スペースを設置してもらったインドネシア人エンジニアもいる。

¹⁸ イスラームでは、生活のあらゆる事柄が 5 つの規定のいずれかに当てはまる。すなわち、①義務 (fard, wājib)、②推奨 (sunna, mandūb)、③許容 (mubāh)、④忌避 (makrūh)、⑤禁止 (harām) である。①は、怠ってはならない事柄である。日々の礼拝やハッジなどの五行 (第 3 節第 1 項) はこれに当たる。②は、行うことが推奨されるが、行わなくても咎められない、つまり罪にならない事柄である。③は、合法であるが、事柄の有無は等価なものである。④は、行わないことが推奨されるが、行っても咎められない事柄である。⑤は、行うことが禁止され、行えば罪になる事柄である。たとえば姦通や窃盗 (sariqa)、清浄でない状態での礼拝、飲酒とくに酩酊がこれに当たる。なお、ハラームの反対語はハラール (halāl) である (大塚・小杉他 (編) 2002: 550, 570, 784–785, 833, 907–908, 941, 978, 1075; 尾崎 (鈴木) 2006: 79; 桐原 2022: 29–30; 小杉 2002: 124)。

¹⁹ ヘフナーは、1990 年代末以降のインドネシアの民主化、その後のイスラーム化や保守化・原理主義化、その後の揺り戻しといった、2000 年代～2010 年代の錯綜した諸動向を、単純化せず複合的なまま捉えることが重要であると、近年の著書の中で強調している (Hefner 2024: 3–6, 314, 321–322; cf. Crouch 2012; Nakamura 2012(1983); Parsons 2012; Ricklefs 2007, 2012; Salim 2008; Schielke 2015: 3, 53, 57; van Bruinessen (eds.) 2013a)。

法学派がある。すなわち、①ハナフィー (Hanafi)、②マリーク／マリーキー (Mālikī)、③シャーフイー (Shafī'ī)、④ハンバル／ハンバリー (Hanbalī)、である (大塚・小杉他 (編) 2002: 152–153, 487; 佐藤次 2009: 55–58; 末近 2006: 121–122; Vogel 2023 (2010); Zaman 2023a (2010): 589–591, 599, 2023b (2010): 336–343)。インドネシアにおける多数派は③である (Hefner 2023a (2010): 609, 612, 2023d (2010): 510)。日本在住インドネシア人ムスリムの大半は、この学派にもとづく知識や儀礼の所作を学んでいる。サヤン氏もそうである。以下、サヤン氏が参加したイスラームの勉強会で見聞した、学派の差異と日本在住インドネシア人ムスリムの宗教的逆境に関わるエピソードを記す。

まず、この勉強会について簡単に触れる。サヤン氏は、週末を中心に、対面またはウェブ上で開催される複数のイスラーム勉強会に参加している。この勉強会はインドネシア語でプガジアン (pengajian) (ウェブ上のものはプガジアン・オンライン)、アラビア語ではシラトゥラフミ (silaturahmi) と呼ばれる (プリヤディ & プラムディオノ 2009: 134)。親睦の機会という性格が比較的濃厚なもの、イスラームの勉強の機会となる集まりはこの語で呼ばれる。プガジアンには、男女共同、男性限定、女性限定のものがある。サヤン氏の場合、参加するウェブ上プガジアンはすべて女性限定のもの (ただし大半は男性が先生) であり、たまに参加する日本在住シリア人の先生主催のものをのぞき、先生はみなインドネシア人である。男女共同の場合、私が参与観察した対面およびウェブ上のプガジアンでは、女性の発言力は男性と変わらない²⁰ (cf. 服部 2025; 服部 & マスララ 2025)。

さて、サヤン氏は、あるインドネシア在住のウスタットが発信するウェブ上プガジアン——参加者の9割程度は日本在住インドネシア人ムスリムである——において、以下のような質疑応答を視聴した。あるインドネシア人女性は、日本のラッシュアワーの通勤電車では、見知らぬ男性と手先などの肌が当たってしまうことがある、また、オフィスでの工作中、化粧崩れを何度も直す必要が出てくる、そうした場合、礼拝前のウドゥー (浄めの手続き) の水を何度も繰り返し取らなければならないとたいへんである、どうしたらいいのだろうか、という趣旨の質問をした。これにたいして、ウスタット (彼の所属学派は未確認である) は、シャーフイー派よりもハンバリー派の考え方でいけば、そうした意識的でない他者との触れ合いや化粧直しなどがあっても、あらかじめウドゥーを取っていればそのウドゥーは有効であって取り直す必要はないと考えられる、日本で暮らす場合、ことウドゥーに関しては、シャーフイー派よりもハンバリー派の考え方が合っているであろう、と述べたという。イスラームに関する一定の知識がある者は、シャーフイー派は比較的厳格な考え方をする一方、ハンバリー派はそこまで厳格ではない、ということを理解している。このプガジアンでは、ウドゥーの失効に関する考え方の差異や幅がウスタットの助言において提示され、参加者にも (再) 確認されたのである。

また、サヤン氏は、また別の機会に別のインドネシア在住ウスタットのウェブ上プガジアンにおいて、日本在住インドネシア人女性とウスタットの間での以下のようなやり取りを視聴した。女性は、日本で働いていると、礼拝の時間をインドネシアのようにきちんと守って日々実践することは難しい、たとえば、職場の休憩時間が午後の礼拝の時間帯に設けられていても、礼拝時間帯の期限までわずかな時間しか残されていないことがある、そうした場合、ごく短い時間で、オフィスの椅

20 私が東海地方でこうした集まりがあることを知ったのは1990年代半ばである。その当時は、名古屋市とその周辺地域に住するインドネシア人ムスリムが、月に1回程度週末に各家を順番に集会の場として集まり、持ち寄ったインドネシア料理を食べ、その前後に集団で礼拝をする、というものであった。2000年代以降、こうしたグループは愛知県のみならず、岐阜県、静岡県、三重県でも形成され、定期的にプガジアンが開催されている。

子に座ったまま、礼拝をすることが私はあるが、それではだめなのだろうか、という趣旨の質問をした。ウスタットは、それだけではよくない、と回答した（なお、椅子に座って礼拝を行うというのは、長距離の乗り物内での移動中など、ある限定された状況においては許容される方法である）。たとえば帰宅後、あるいは翌日が休日であれば翌日の当該礼拝の時間帯で、前日やり残した——インドネシア人話者はしばしばこれを「負債／借り」(hutang) の、と表現する——礼拝をやり直すべきである、とウスタットは述べた。このウスタットは、シャーフイー派に属し、厳格な立場に立って、ムスリムとしてあるべき礼拝のあり方について助言したのである。

ムスリムの生活習慣を踏まえないかたちで構築された日本の社会に生きていれば、日々の生活の細部における自身の行為の妥当性や、許容、忌避、禁止を分ける境界線の判断に戸惑うことはしばしば起きる。それは、テキストやネットの情報ではいわば空白となって残された部分であろう。人々は、知識欲のみならず、生活上の必要にも迫られて、ウスタット／ウスタジャに質問をし、自身の日本での生き方の微修正をはかる。彼らにとって、インドネシア人ウスタット／ウスタジャに直接フランクに質問できる対面およびウェブ上のプラグジアンは、日本で暮らす上で必要不可欠の役割を果たしている。ウェブでは、地方に在住していても、自身がつながりたいと思う、東京や大阪そしてインドネシアやアラブ在住のウスタット／ウスタジャと直接やり取りできる。

日本在住インドネシア人ムスリムの中には、夜勤などがあっても、週末に開催されるウェブや対面でのプラグジアンに熱心に参加する者もあり、中には自身がウスタットを務める者もいる。ただ、一方では、そうした勉強会にあまり参加しようとしなない者もいる。

また、日本で暮らすムスリムの中には、日本で生活する上での細かな知識をあまり知らない者やこれに無頓着にみえる者もいる。誘惑に負け、飲酒や豚食などの禁止行為をしばしばする者もいると聞く。経済事情や労働・生活環境などにより、ハラール食材を容易に購入できない者もいる。この場合、ハラール食材を食べる／食べざるをえないことは「許容」される（塩尻・池田 2004: 108）。日本在住ムスリムの大半は、それぞれの生活環境の中でできるだけムスリムとしてまっとうな生活を営もうと努めている。ただ、そうした生活志向はそれなりのコストを伴う。そのこともあり、自らが望むムスリムらしい生活を送れず、忸怩たる思いを抱いて日本で暮らす者は、若い世代を中心におおい。これが、彼女／彼らの本国帰還の背景や動機になることもある（工藤 2008: 102–103; 樋口直 2007c）。

職場など周囲にインドネシア人がおらず、やや孤立したかたちで日本での生活を送る者もいる。ただし、彼らにとっては、あるいは彼らにとってこそ、Wi-Fi 環境があれば実質無料で、本国の家族や友人とつながり、ウスタットやウスタジャともつながり、近くに在住するインドネシア人ともつながり、ときに対面で集まることを可能にするスマートフォンは、日本で生きる上で不可欠なものとなっている（浅井・箕浦 2020: 186–193; Anderson 2023 (2010)）。対面でのプラグジアンも、SNS 等によって告知され運営されている。

一方、比較的恵まれた生活環境にあってイスラームに意識的な人々は、ハラール食材を積極的に購入して食生活を整えるとともに、デジタルツールをもちいて各種の知識を友人や知識人から吸収し、またこれを発信し教え合い、よりムスリムらしく日本の中で生きようとしている。後藤は、21 世紀の今日、ムスリム知識人は大衆として存在するようになったという（後藤 2021 (1991): 219）。デジタル社会のさまざまなツールは、市井に生きる一般のムスリムに新たな言説空間ないし公共空間を拓き、彼らの知識欲や自己規律化をいっそう刺激し鼓舞している（cf. 八木 2011: 181–206）。日本のインドネシア人ムスリムたちは、スマートフォンとそこにインストールしたアプリケーションとくに SNS と会議アプリを駆使し、たがいに情報を交換し合い、ウェブ上および対面での学びの

機会をもつ。彼らは、イスラームの規範や慣習が社会の中で当たり前のように共有されず、ムスリムとして正しい日常生活を送る上でさまざまな困難を抱えた日本という逆境を、デジタルツールを駆使して得られる情報と人間関係をいわば盾と矛にしつつ乗り切ろうとしている。

ムスリムにとっての逆境の程度は、それぞれのライフスタイルや環境によってさまざまである。個人間で、家族の中でも、考え方の差異やずれはある。ムスリムへの差別・偏見・無理解——とくに家の外でヒジャブ (hijab) を着用する女性は、ムスリムであることが可視化される——は、ほとんどの日本在住ムスリムが経験していると考えられるが、多様性の尊重がより重視されるようになる中で、以前よりは生きやすくなったと感じたり、欧米よりも日本はイスラームフォビアがすくなく他者の宗教に不干涉であるため暮らしやすいと考えたりする日本在住ムスリムもいる (五十嵐 2025; 石岡 2024; 乾 2021; 工藤 2008, 2024; クレシ 2024; 佐藤兼 2024: 34; 沈&フーリエ 2024; ボルア ロゴ 2009; 嶺崎 2024b: 7)。

*

さて、日本での生活は、ムスリムにとってメリットもまたある。私が知るインドネシア人ムスリムからは、本国とは異なり、日本にはパートなどの短時間労働が多数あり、大学生や主婦が比較的気軽に働き収入が得られる、という声を聞く。コンビニエンスストア、ハラル食材店、飲食店、製造業の工場、介護施設、保育園などで、仕事に従事する者がいる。また、SNS で自身がつくるおかずやお菓子を写真入りで紹介し、宅配便と振込を介して販売し、小ビジネスを展開する主婦もいる。2020年代前半において月5万円前後の収入があるとすれば、これはジャカルタの大卒者の月収に近い額になる (地方ではより低いが、企業・職種・地位によってはより高い額となる)。こうした経済的な豊かさの享受は、彼らにとって日本での暮らしが心地よく感じられる局面のひとつである。ほかにも、安定した社会インフラ、医療²¹・教育・社会保障・福利厚生等の制度、安くても品質がよく信頼できる商品、物品購入に際してのさまざまな顧客サービスや保証など、日常生活を送る上で、本国のインドネシアよりも日本の方が暮らしやすいと感じられる局面はある。それは、ある程度日本の生活に適応した外国籍の人々が大なり小なり感じるところかもしれない。ともあれ、日本在住のインドネシア人ムスリムのおおくは、先述した宗教的な逆境とともに、日本での暮らしの順境も感じながら、日本で暮らしている。

むろん、彼らの日本での暮らしにたいするトータルな評価や好悪は、それぞれ異なる。たとえば、夜勤を含む厳しい仕事と上司の大声での叱責に耐え、できるだけ生活費を切り詰めて本国の家族に仕送りをし——10万円の月給の9割近くを仕送りし、残りを食費に充てる実習生もいる——、親や兄弟姉妹の生活を支える者にとって、日本での生活は、自らが望むような宗教的・文化的な豊かさもゆとりも感じられない、一時的に我慢に我慢を重ねるべき試練の時期であろう。また、定期的な仕送りの義務なしに、インドネシア人配偶者や子どもと暮らす者にとって、日本での生活は、ある程度蓄財をしつつ家族でときにレジャーにも行けるかけがえのない人生のひとつといえるであろう。また、日本人と結婚し日本で暮らす者にとって、日本での生活は、他と比較などできない固有の生の選択かもしれない。インドネシア人ムスリムが日本で暮らすようになったきっかけや理

21 あるインドネシア人ムスリマは、夫が日本で実習生として働く中、子どもを連れてあとから来日した。数カ月後、彼女には癌が見つかった。彼女はインドネシアに帰って治療することも考えたが、周囲に相談する中で、日本で手術をして治療することを選択した。日本の医療技術の方が信頼できると考えたからである。そもそも比較的初期に癌が見つかったのは、健康診断など日本の福利厚生がしっかりしているからであり、むしろ早く見つけることができたことを、彼女はアッローに感謝した。

由そして現状はさまざまであり、それらをひと括りに語ることは決してできない。

ただ、ひとつ確実にいえることがある。日本は本国インドネシアよりもマッカ巡礼に行きやすい、という点である。重要な点は、日本の方が効率的に稼いで蓄財できることよりも、インドネシアから大巡礼に行くことがきわめて難しいことにある。大巡礼という宗教義務の履行に関するかぎり、インドネシアと日本とで逆境と順境は反転するのである。

前項では、巡礼者の増加を受け、サウディアラビア政府が各国で発給する大巡礼ビザ数を当該国のムスリム人口の0.1%に制限していることに触れた。日本の場合、2023年時点での大巡礼受け入れ枠は230人であったと聞く。店田によれば、2019年12月末時点の日本のムスリム人口は約23万人（うち外国人18万3千人、日本人4万6千人）であり（店田 2021: 3）、受け入れ枠はその0.1%に当たる。サヤン氏が2023年に利用した旅行会社のこの年の巡礼ツアー参加者は156名と、日本発大巡礼者の大半を占めた。日本の場合、この時点まで巡礼希望者数が受け入れ（日本から見れば送り出し）枠を超過することはなかった。一方、世界最大のムスリム人口を抱えるインドネシアの場合、21世紀に入って需要と供給に深刻なアンバランスをきたしており、コロナ禍中の受け入れ停止による待機組の存在もあって2020年代はさらにその深刻さに拍車がかかっている。申し込みをしてもいつ大巡礼に行けるかはわからないのである²²。また、一度大巡礼に行けば、次まで最低5年待つというルールもある。そこで、インドネシアでは、いつ行けるかわからない大巡礼の前にまず小巡礼に行こうとする動きが2010年代から顕著になっている。インドネシアからでも小巡礼は待たずに出発できるからである。これは、現代インドネシアで増加する中間層ムスリムに観察される、新たな社会現象とあってよい（cf. Hefner 2024: 1）。ビアンチは、その背景に、過剰ともいえる数の巡礼者を大巡礼の時期に受け入れ、死亡事故等が発生すれば批判を受け、対処を講じなければならない一方、巡礼者受け入れ枠の拡充を他国からもとめられるサウディアラビア政府の、大巡礼時の混雑緩和と小巡礼への分散を目指す思惑がある、と指摘する（荒木 2018, 2022; Bianchi 2004: 11, 72–74; Lücking 2022 (2021): 93）。彼らは、小巡礼に行けば大巡礼に行かなくてもよいと思っているわけではない。大巡礼に行けるめどが立たない現実を前に、せめてまず小巡礼に行って聖マスジドで礼拝をしたい²³、そして将来のハッジの予行演習としたい、と考えているのである²⁴。

本国発マッカ大巡礼の実現不確定性は、日本在住インドネシア人に確実に影響を及ぼしている。意志ある者は、インドネシアからはいつ行けるかわからない、日本からは待機なしで申し込んだらすぐ行ける——この点は、合衆国出発の大巡礼も同様である（Arjana & Aslan 2019: 117–119）——、ゆえに蓄財し機会をうかがって、日本から積極的に大巡礼に旅立とうとする。日本発大巡礼ツアー参加者の中には、20代の比較的若いインドネシア人（男女とも）がすくなくからずいる。日本発で

22 荒木によれば、インドネシア発の大巡礼者数は1990年代後半から20万人程度に増加し、2000年ころから順番待ち——申し込みの際に少額を支払い、全額を支払った者から巡礼に行く——がはじまった。コロナ禍後、2022年と2023年の受け入れ枠はそれぞれ10万人と22万1千人であったが、これは受け入れ枠0であった2020年～2021年の待機者を含めて設定された数字である。現在は「30年待ち、40年待ち」といわれる（荒木 2018: 82, 84, 2022: 71, 74–75; Bianchi 2004: 5, 2017 (2015); Lücking 2020, 2022 (2021): 93, 107）。

23 預言者ムハンマドが、聖マスジドの礼拝には10万倍の価値があり、預言者マスジドでの礼拝には1000倍の価値があると述べた、と伝えられている（森 2015 (2007): 142, 144）。これらのマスジドでの礼拝は、サヤン氏のハッジツアーでも励行されていた（第4節）。

24 大巡礼以外の時期に実行する小巡礼は、日本発・インドネシア発ともに約10日間のパッケージ観光であり、2023年時点の料金は35万円程度である。なお、日本在住インドネシア人の中にはインドネシアから本国在住の家族とともに小巡礼に行く者もある。たとえば、サヤン氏のある友人は、2024年8月にインドネシアからキョウダイ揃って7人で小巡礼に行った。仕事で同行できない日本人の夫が全額（約250万円）を支払った。ツアーはエジプトやモロッコの古代遺跡や博物館を周遊してマッカに入る旅程であり、インドネシア人ガイド兼先生が詳しく丁寧に説明をしてくれたのでよかった、とその友人は語ったという。

は3週間程度、インドネシア発では4～5週間程度が標準プランであるが、2023年時点ではツアー料金はどちらも100万円強と、費用の差はほとんどなかった。ツアー料金はコロナ禍前の2019年から7割近く値上がりし、翌2024年はさらに値上がりしたが、これも両国ほぼおなじである。2010年代後半まで、日本発ハッジツアーを取り扱うおもな旅行会社は南アジア系の複数の会社であった。インドネシア人もこれらの旅行会社を利用してハッジを実行していた。しかし、事前予約したはずのホテルに泊まれないというトラブルがあり、当該の旅行会社がサウディアラビア政府から巡礼ツアー販売を止められたといった情報がインドネシア人の間で共有され、その前後に日本の大手旅行会社が日本発マッカ大小巡礼ツアーの販売に参入した。サヤン氏は、この旅行会社の販売したツアーで大巡礼に参加した（脚注41）。

以上をまとめよう。⑤本章では、それぞれの事情により日本に移住したインドネシア人ムスリムが日本で生きる上での順境と逆境に着目する。逆境は、礼拝義務や食の規範遵守などの点で、ムスリムにとって当たり前の生活が当たり前に営めない点である。順境は、経済・医療・教育・社会保障・福利厚生などの面で本国より安定した生活を享受できる点である。彼らの日本での暮らしにたいするトータルな評価や好悪は各人によりさまざまであるが、彼らはいずれも、宗教的な逆境と経済・社会的な順境とのはざまを、デジタルツールを介して得る情報と人間関係に支えられつつ生きている。また、巡礼者の需給関係に深刻なアンバランスをきたし、いつマッカに行けるかわからない状況にある彼らの本国は、こと大巡礼という宗教義務の履行に関しては逆境にあるが、日本はマッカにすぐ旅立てる順境にある。このことをよく知る彼らは、日本から大巡礼を実行しようとする。

彼らにとって日本の生活は、本国とは異なるかたちで順境と逆境の諸契機が折り重なったものである。ムスリムとして日々の規律や規範をしっかりと遵守して生活することは、日本ではなかなか難しい。だからこそ、彼らは、その日常生活における宗教的逆境をばねに、本国ではある程度の経済力があっても実現が困難になっている、マッカ大巡礼というもっとも実行困難な宗教義務でありムスリムにとっての至高の念願を実行しようとする。

(4) 本章の理論的・方法的枠組みの総括

ここで第1節・第2節の議論を総括し、本章の理論的・方法的枠組みをまとめておく。

本章では、マッカ巡礼を社会的行為またはその集積体たる社会現象として総合的に捉え、時代や地域による差異や多様性に目配りしつつ、ミクロかつボトムアップの視点から、ある時空間上にあるマッカ巡礼の具体例を記述する。このミクロな視点を突き詰めれば、個人に照準を定める民族誌は成立しうる。本章では、サヤン氏というひとりのムスリム女性に焦点を当て、彼女が2023年に実行した大巡礼を、彼女を取り巻く人々が織りなす相互主観的な相互作用のひとつの結節点と位置づけ、その民族誌的記述を行う。第1節では、こうした方法的枠組みと、語の表記に関する留意点やキーワードの含意を明確にした。

本章が2023年の大巡礼に焦点を当てる理由は2つある。ひとつは、ポストコロナ期のマッカ巡礼を記述した民族誌的研究が管見のかぎり存在しないことである。もうひとつは、大半の先行研究が論じてきたマッカ巡礼の時代をこえた連続性のみならず、不連続性つまりは変化にも着目し、これを記述すべきと考えられることである。小文字の複数のイスラームとムスリムに関心を寄せる人類学の立場に立てば、マッカ巡礼の変わらなかった部分と変わった部分の支え合いを論じることは重要な論点になる。ただし、過去に遡行すればするほど事実確認は困難になる。本章では、2023年の大巡礼の記述を主軸とし、2010～2020年代を中心とした21世紀のマッカ巡礼のあり方を把握

することに、さしあたり主題を限定する。

現代の観光は、人・情報・モノ・マネーが人類史上かつてない速度・広がり・流動性をもって行き交い複雑に絡み合う過程の中にある。これは巡礼も同様である。そもそも、現代の観光と巡礼は、また観光と移住も、かならずしも明確に区別できない。加えて、サウディアラビアの外に在住するムスリムは、旅行会社の販売するパッケージタイプの観光商品を利用しなければ、事実上大小マッカ巡礼を果たしえないという点もある。とりわけ数百万人の巡礼者が一挙にマッカ周辺に結集する大巡礼では、出発国毎の発給ビザ制限とパッケージ観光の組み合わせは合理的なリスク管理・対処の方法である。こうした点に照らしても、観光論の視点はマッカ巡礼の理解に有効である。

本章では、ひとりの日本在住インドネシア人ムスリム女性に照準を合わせる。現代人のホームとアウェイは溶け合っている。日本に移住し生活するインドネシア人ムスリムの生はさまぎまであるが、ここでは彼らが選択した生が「ムスリムとして日本に生きる」というアンビヴァレンスを抱えていることに着目する。そのアンビヴァレンスは、日本での生活がムスリムにとって順境と逆境の両面をもつことに集約される。逆境は、礼拝義務や食の規範遵守などの点で、ムスリムにとって当たり前の日々の生活が当たり前前に営めない点である。順境は、経済・医療・教育・社会保障・福利厚生などの面で安定した生活を享受できる点に加え、日本が大巡礼にすぐに旅立てる社会環境にある点である。このもっとも実行困難な宗教義務の履行に関するかぎり、日本は望外の順境にあり、本国インドネシアは反転しておおいなる逆境にある。これら順境と逆境の諸契機の結び合いが、彼らに、人生至高の念願であるマッカ大巡礼への日本からの旅立ちをうながすのである。

以上、2つの節を通じて本章の主題と枠組みを論じた。では巡礼の記述に入っていこう。

第3節 マッカ巡礼の概要と起源

本節では、教義レベルのマッカ巡礼について概観しておく。第1項では、ムスリムにとってマッカへの大小巡礼がいかなるものと理解されているのかを、彼らが学修するイスラームの教義・戒律・慣習・認識などに触れつつ確認する。第2項では、文献研究にもとづき、その起源・原型となった預言者ムハンマドの実行した巡礼を「別離の巡礼」を中心に記述する。第3項では、若干の補足を加えながら本節の要点をまとめる。なお、本節は、重厚な蓄積のあるイスラーム研究のわずかな部分を参照したものにはすぎない。

(1) 信仰の六柱・勤行の五柱

イスラームでは重要な事柄を「柱」(ルクン)と表現する。まずは、イスラームの教義の柱である六信五行／五行六信あるいは信仰の六柱・勤行の五柱について概観する(大塚 2015(2000); 小杉 2006d, 2006e; 佐藤次 2009: 29–32; 水谷 2010a: 22, 212–213, 2016: 41–45; Buitelaar & Mols 2017(2015): 3)。

信仰の六柱は、ムスリムがその実在を固く信じる6つを指す。すなわち、①アッラー／アウロー、②天使、③「クルアーン」に代表される啓典つまりアッラーの啓示を集約した書物、④預言者、⑤来世、⑥予定つまり運命、である。

アッラー／アウロー、「クルアーン」、預言者ムハンマドについては、第1節で触れた。イスラームにおいて、アッラーは見えないが、その言葉を聞くことはできる。その言葉を直接聞き、人々に伝えたのが預言者ムハンマドである。彼は、最後に地上に現れた最高の預言者であり使徒であり、「クルアーン」第33章40節にあるように「預言者たちの封印」である。最初の預言者はアードムで

あり、イブラーヒーム（アブラハム）は最初に一神教を唱えた預言者である。アラブ人は、イブラーヒームとその女奴隷であったハージャール（Hajar）との間に生まれた子イスマーイールを祖先とする（アルジール 2010: 23-24; 大塚 2015(2000): 37; 大塚・小杉他（編）2002: 28-30, 756, 1027-1029; 小杉 2002, 2006a; サウジアラビア王国イスラーム諸事・布教・伝道省 ヒジュラ暦1440: 872; 森 2024: 49-53）。

ムスリムたることに自覚的な者は、アッラーが預言者ムハンマドを介して与えた啓示を記した「クルアーン」を学ぶ。「クルアーン」第26章195節には「明白なるアラビアの言葉によって」とあり、アッラーの啓示そして啓典はアラビア語によるもの以外にはない。日本語やインドネシア語に訳された「クルアーン」は、いわば注釈書ないし俗書にすぎない（大塚 2015(2000): 36; 大塚・小杉他（編）2002: 340; サウジアラビア王国イスラーム諸事・布教・伝道省 ヒジュラ暦1440: xiii-xiv, 774; 佐藤次 2009: 29）。啓典や教義およびその解釈などを学ぶ上で、俗なる言語は重要な手段ないし回路ではあるが、イスラームを学びたい者はアラビア語に習熟しなくてはならない。アラビア語を母語としないインドネシア人ムスリムは、イスラームにおけるアラビア語の根源的重要性を十分認識しており、日々の生活においてもアラビア語の一節や一語をもちいることを好む。

ムスリムたちは、アッローが創造した世界に生きている／生かされていると折に触れ感じており、この世のすべてを創造したアッローに感謝の念を伝えつつ、ときに個人的な祈願（doā）をも織り込みながら、1日5回の礼拝サラート（salāt）を日々行う²⁵。

この世はいつか終末を迎える。そのときアッラーが最後の審判を下す。現世での善行と、悪行つまりは罪の数量的差が正確に計測され、来世が地獄行きとなるか天国行きとなるかが決まる。ただし、地獄で十分悔い改め、アッラーへの帰依を誓約すれば、天国に迎えられる可能性はある²⁶。インドネシア人ムスリムがパハラ（pahala）と呼ぶ、礼拝や善行をなしたときにアッラーから与えられるプラスのポイントないしプレゼントは、当人の右肩にいる天使が、罪や悪行によるマイナスのポイントは、左肩にいる天使がそれぞれ記録している。たとえば、サラートやザカート（zakāt; 貧者への喜捨）などの「五行」はムスリムの義務なので、これを実行しないことはマイナスになり、実行すればプラスになる。義務であるサラートに加えて任意の諸礼拝を行ったり、任意の寄付や慈善（sadaqa）を行ったり、あるいは義務である断食月以外の時期に任意の断食を行ったりすることも、プラスになる。たとえば、サヤン氏の親しい友人の中には、週に2日任意の断食を実践しつづけている者がいる。ただし、こうした任意の善行や慈善を実行しなくても、マイナスのポイントはつかない。イスラームに関する学修も、プラスにはなるが、しないからといってマイナスにはならない（大塚・小杉他（編）2002: 661; 水谷 2010d: 18-20）。

私が知るインドネシア人ムスリムたちは、仮に悪行ないし罪を犯した場合は、これを悔いてアッローに許しを乞う——たとえば任意の礼拝を行うことを通して——ことで、慈悲深いアッローがこれを許してくれるかもしれない、ただし本当に許されたかどうかは最後の審判までわからない、と認識している。また、自身が知らずに犯してしまった過ち——たとえば、日本では知らずに豚の成

25 本研究では、アッラー／アッローに帰依し祈りをささげる場合を「礼拝」、願掛けをする場合を「祈願」と記す。ここでいう「祈願」と「礼拝」については、拙論——ただし、「礼拝」を「祈禱」と表記している——を参照する（吉田 2000, 2005a: 176-196）。

26 天国は、アッラーを信じて帰依する者が来世において住まう場所であり、地獄は不信者への報いとしてアッラーが設けた、来世において住まう場所である。天国には、楽園（janna）をはじめ、さまざまな呼称がある。この天上の楽園は、樹木、庭園、果実があり、川や泉がある。そうした楽園の園は地上にもある。そのひとつが、マディーナにある預言者マスジドの内部である（アルジャウズィーヤ 2010: 99-103, 144-153; 大塚・小杉他（編）2002: 1035; 水谷 2010d: 18-26, 2023: 243-251）。

分を口にすることは起こりうる——であれば、マイナス評価には加算されない、とも考えている。ムスリムがプラスマイナスの計算づくの生活を送っているわけでは決してないが、彼らの生活の中にこのような評価ポイントのおおまかな計算が重要な意義をもっているということは指摘できる。たとえば、第2節第3項で触れたプガジアンに人々が参加し準備や運営にも積極的に協力する背景には、ムスリム共同体のためという点に加え、自身がパハラを得られるためという点もある。

人間の運命はアッラー／アウローによってあらかじめ定められている。しかし、何をやっても自分の運命は変わらないというある種の投げやりな考え方は、私が知るインドネシア人ムスリムの生き方の基盤ではない。ただ、その一方で、思ったようにうまくいかない場合に、それは仕方がない、アウローが決めたことだから、という一種の諦観はある。彼らはできる範囲で善行をなし、パハラを得ようとつとめる。ただ、自助努力の必要性・重要性をあまり意識しない傾向もあるように感じられる。おそらく、それゆえ、現代のウスタットら知識人は、ウェブまたは対面のプガジャン・講話・勉強会などにおいて、しばしば人間の自助努力の重要性を説く。自身の運命や行くべき来世はアウローに委ねられているという前提の上に、この世で人間がなすべき努力もまたある、と助言するのである。

次に、勤行の五柱はムスリムに課せられた5つの義務 (fard, wājib) たる行為である。第1は、信仰告白シャハーダ (shahāda) である。「アッラーフのほかには神はなく、ムハンマドはアッラーの使徒である」とアラビア語で唱える／宣言するのである。ムスリムは折に触れこの成句を口にし、自身の信仰を再確認し強固にする (大塚・小杉他 (編) 2002: 128-129, 455; 小杉 2006b)。この成句は、サウディアラビアの国旗にも記されている。

第2は、先に触れた1日5回のサラートである。この礼拝は、預言者ムハンマドが「昇天の旅」——天使ジブリエル (ガブリエル) に伴われ、ひと夜でマッカとイェルサレムを往復した「夜の旅」の際に、イェルサレムで七層の天に昇りアッラーのもっとも偉大な徴を見た——を経験したときに命じられたものと伝えられている (小杉 2002: 80-87)。サラートでは、ラクア／ロカ (rak'a) と呼ばれるひとまとまりの礼拝行為を、日の出前には2回、正午過ぎには4回、午後には4回、日没後には3回、夜には4回行う。ただし、とても大事な仕事の最中で手が離せない場合、81キロメートル以上の距離を移動していて時間が足りない場合など、ある条件下においては、特定の礼拝を隣接する別の時間帯の礼拝につづけて——別の時間帯で行う旨の意思表示をしてから——行ったり、3～4ラクア／ロカの礼拝を2ラクア／ロカの短縮形——カスル／コソル (Qasr) という——で行ったりすることは許される²⁷。なお、世界中のムスリムは、毎日の礼拝をカアバの方に向かって行うが、これはイスラーム成立当初からの規範ではない。ヒジュラ後もしばらく、預言者ムハンマドは、マディーナのユダヤ教徒の慣習にならい、イェルサレムの神殿の方向つまり北に向かって礼拝を行っていた。しかし、624年2月ころ、礼拝の方向つまりキブラ (qibla) を変えるよう命じる啓示を受け、預言者はカアバのある南の方向にキブラを変更した。キブラ変更の啓示を預言者が受けた場所は、現在キブラタイン・マスジド (Masjid al-Qiblatayn; 2つのキブラのマスジド) のあるところである。この変更により、カアバとその所在地マッカはイスラーム最重要の聖地となった (大塚 2015(2000): 32-46; 大塚・小杉他 (編) 2002: 307, 417-418; 小杉 2002: 118-121; 佐藤次 2009: 14)。

第3は、先述した貧者への喜捨ザカートである。第4は、ヒジュラ暦第9月 (Ramadān) に行う

²⁷ こうした連続形や短縮形の礼拝を行うことが難しい場合は、翌日の礼拝の際に前日の「負債」分の礼拝を行うこともある (第2節第3項)。

断食サウム (ṣaum) ——断食はヒジュラの翌年からこの月に実施する形態になった (Berkey 2023(2010): 25) ——である。そして第5は、ヒジュラ暦第12月の8日～12日を中心に行うハッジである。なお、小巡礼は五行に入らず義務でもない。また、「クルアーン」第3章97節に記載があるように、大巡礼の義務は可能な者が実行すればよい (足立 2025; 大塚 2015(2000): 32-46; 大塚・小杉他 (編) 2002: 395-396, 487-489; 小杉 2006d: 42-43; サウジアラビア王国イスラーム諸事・布教・伝道省 ヒジュラ暦1440: 118; 日本イスラム協会・嶋田・板垣・佐藤 (監修) 2002(1982): 213; 森 2006, 2024: 56-59)。

以上、六信五行について概観した。後藤は、イスラームは単に「宗教」であるだけでなく、人々の日々の生活、社会、国の政治なども規定する思想や規範の総体であり²⁸、その規範はかならずしも明確なかたちをとるわけではなく、規範を守らない人への共通の罰があるわけでもなく、さまざまな場でさまざまなかたちをとってあらわれ、またときに姿を見せずに人や社会を規制するものである、と述べる (後藤 2021(1991): 20-21)。後藤の指摘は、フーコーの生権力論をほうふつとさせる (cf. 大澤 2019; 檜垣 (編) 2011; フーコー 1977(1975), 1986(1976), 2006(1994); 吉田 2020: 107-109, 2022a(2018): 18, 2023: 9, 166-169)。イスラームは、人を生かす思想や規範の総体といえるのかもしれない。

(2) マッカ巡礼の基本的特徴と原型

ここでは、大巡礼・小巡礼の概要を、おもに文献資料に依拠しつつ記述する。第4節で現代に生きるひとりのムスリムが実行したハッジの具体的あり方を記述する前に、時代・地域・個人によって変わらないマッカ巡礼の基本的特徴と、その基本形態の起源となった預言者の行った巡礼について、確認しておくのである。

まず、ムスリムのハッジにたいする強い思い入れに触れておく。水谷は、ハッジを実行する当事者は、信仰上の義務感に縛られてというよりも、強い信仰心に発する巡礼への思慕や情熱に駆られてこれを実行する、と述べる。この点は、私もインドネシア人ムスリムとりわけハッジ経験者から感じ取った点である。また、ハッジを実行する者はおおくの徳やメリットを得るとも考えられている。過去に犯したさまざまな罪を赦され、生まれたばかりの赤子のような存在に立ち戻る、天国に行ける——とりわけ大巡礼中に亡くなった者は天国行きが約束されている——、あるいは天使に出迎えられる、などと預言者が述べたと伝承されている。そのこともあって、種々の困難をのりこえハッジという最大の義務を果たした者は高く評価され、男性がハーッジュ／ハーッジー／ハジュ (hajji)、女性がハーッジャ／ハジャ (hajjah) などの敬称で呼ばれることがある。ムスリムは、ハッジ実行に向けた強い思いをばねに巡礼を敢行し、自身の巡礼成就をアウローに深く感謝し、その成就にアウローの意思を看取する²⁹ (大塚・小杉他 (編) 2002: 488, 491; 小杉 2006d: 43; 水谷 2010a: 13,

²⁸ イスラームは単なる「宗教」ではないとする後藤の指摘は、ユダヤ教にも当てはまる。両者とも、世俗と宗教を弁別する近代西欧キリスト教社会の観点からは適切に捉えがたい特徴をもつ。ニューズナーらは、イスラームとユダヤ教の対照性に目配りしつつも、「世界のあらゆる宗教の中で、イスラームとユダヤ教ほど一致点がおおく相互の理解と和解の展望をもったふたつの宗教は存在しない」と結論づける (Neusner, Sonn & Brockopp 2000: vii, 234)。信仰の基盤にある神の言葉、それを伝えた預言者、毎日複数回の礼拝義務、食の戒律、断食、偶像崇拜禁止の徹底、礼拝施設の非位階性、啓示にもとづく法による社会体制など、「経典の民」(ahl al-kitāb) の中でも、イスラームとユダヤ教との類似性は顕著である (市川 2015a: 4, 2015b: 101-105, 2019: 18, 19, 54-84; エスポジト 2009(2002): 127-129; 大塚・小杉他 (編) 2002: 353; 大治 2025: 84-86; スタインバーク 2012(1998/1947); 鶴見 2025: 73-75; ラブキン 2024(2024): 5-13; Berkey 2023(2010): 20)。

²⁹ ブイテラールらは、今日の巡礼者は一度のハッジによって当人が犯した罪の一切を清算しうるとは考えない、完璧な人間はおらず、巡礼後に過ちを犯す可能性はある、その場合はまた巡礼に行って修復すべきであると考え、という (Buitelaar, Stephan-Emmrich & Thimm 2022b(2021): 10)。ただし、私は、これは何度もハッジに行ける富裕層の一部の考え方

18, 54–55, 76–80, 2023: 237; Rahimi & Eshaghi 2019b: 1–3, 15)。

次に、ハッジを実行するに当たっての条件や資格について述べる。ハッジは可能な者が実行すればよい、という点は先述した。具体的には、ハッジに行く財力があり、自身の巡礼中に残留する家族の生活を維持することができ、借金がなく、加えて体力がある者が、この義務を実行する資格をもつ、とされる。ただし、体力がない者や老人は、資金を援助し他者に代参 (hajj badal) を依頼してハッジを実行することは可能である³⁰。また、女性は、夫または近親の男性の同伴がなければマッカ巡礼を行うことができないとされるが (大塚・小杉他 (編) 2002: 487; 野町 2002: 122; 水谷 2010a: 88–89)、現在、すくなくとも2018年以降、サウディアラビア政府は女性が単身で巡礼ツアー (パッケージ観光) に参加するかたちでの大小のマッカ巡礼を認め、巡礼ビザを発給している³¹。

ハッジを実行することを決めた者は、その意志ないし意図 (nīya/niat) を表明し、準備を整えて出発する。イスラームの信仰行為において、意志表明 (これもニーヤ／ニアットという) はきわめて重要である。信仰行為は、アッラーのために行うものであるため、声に出すかあるいは心の中で、それを行う意志表明をしなければならない。日々の礼拝、結婚、葬儀など、さまざまな宗教行為の機会に、ムスリムはその都度意志表明をする。巡礼の場合も同様である (大塚・小杉他 (編) 2002: 727; 谷口 (編) 1982: 503)。

次に、ハッジの場所についてである。巡礼者は、ヒジュラ暦第12月8日～12日を中心にマッカ中心部の聖マスジドおよびマッカ郊外の荒野で大巡礼の諸儀礼・諸行事を履行する。小巡礼は聖マスジドで完結する。では、なぜマッカおよびその郊外が巡礼地なのか。

マッカは、かつて預言者イブラーヒームによりハラーム／ハローム (harām) つまり禁域＝聖域にされ、戦闘・狩猟・流血・樹木伐採などが禁じられた場所であった。しかし、その後、多神教がこの地を覆った。預言者ムハンマドが誕生したころ、カアバ内には360体の偶像がおかれていたという。預言者ムハンマドは610年、40歳のころ、マッカ北東5キロメートルにあるヒラー (Hirā') 洞窟ではじめてアッラーの啓示を受け、イスラームの布教をはじめた。しかし、マッカの勢力に弾圧され、この地から脱出せざるをえなかった。そして預言者とその弟子たちはマディーナに西暦622年に移住した。このマディーナへの移住 (ヒジュラ) は、イスラーム共同体あるいはイスラームの社会＝政治体の出発点となった。統治者としてばかりでなく軍事指揮官としても才能を発揮した預言者ムハンマドは、対抗するマッカの勢力を630年に破ってこの地を征服し、カアバ内の偶像などを破壊・撤去して、当地をイスラームの聖都とした。これ以降、マッカの中心部である禁域は、アッラーに帰依する者だけが入れる場所となった。全世界のムスリムが礼拝の際に向き合うカアバを擁する聖マスジドは、この禁域の中心存在である。ヒラー洞窟はマッカ巡礼において訪れる

ではないかと推測する。日本在住インドネシア人ムスリムの話者たちは、預言者は1度ハッジに行った、自分たちも1度行けばまずはそれで十分であると考えたとともに、ハッジが成就した (mabrūr) か否かは帰ったあとにわかる、ハッジ後に禁止行為を犯すとすれば、それは当のハッジが不首尾に終わったからだ、というのが彼らの考え方である。

³⁰ ウムロの場合も代参 ('umra badal) は可能である。なお、ハッジもウムロも、巡礼の代役をする者は自身のハッジ／ウムロを実行済みの者にかざられる。たとえば、亡くなった父のハッジ／ウムロの代参をお願いしたいという場合、望ましいのは家族の誰かが代参することであるが、家族にハッジ経験者がいない場合は、家族以外の誰か、たとえば代参を扱う業者等に依頼することになる。ただし、これは、亡くなった当の父が生前代参を希望する意志を表明していた場合である (意思表明については本文で後述する)。父の意思表明 (と代参の費用に充てる遺産) がなかった場合は、代参の意思を表明し依頼する者は遺族になるので、その遺族がマッカに旅立つ体力 (と財力) があるのであれば、遺族がまず自身の巡礼を済ませ、そのあとに亡き父の代参を実行することになる。

³¹ かつてサウディアラビア政府は、国籍を問わず45歳未満の女性巡礼者は単独で大巡礼・小巡礼を行えないとしていた。該当する年齢の女性の巡礼には、夫またはマフラム (mahram) と呼ばれる自身が結婚できない範囲の近親男性の同伴が必要であった (大塚・小杉他 (編) 2002: 487; Buitelaar, Stephan-Emmrich & Thimm 2022b(2021): 12; Lücking 2022(2021): 107; Rahbari 2022(2021): 76, 87; Thimm 2022(2021): 19–20)。

べき場所とはされていないが、聖マスジドから5キロメートルほど東に行ったミナー（Minā）の谷とその先にあるムズダリファ（Muzdalifa）の谷は、イブラーヒームの故事にまつわる場所であり、イスラーム以前からの信仰と儀礼の地である。そのさらに東方、マッカから25キロメートルほど離れたアラファト（Arafat）の荒野は、その中央にあるラフマ山で地上に降りたアードムとハウワー（イヴ）が再会したと伝えられる場所である。このように、マッカとその東方の荒野はイスラーム以前にもさかのぼる信仰の核心地である。一方、マディーナは、イスラーム共同体が建設され、預言者の教えが世界に広まっていくそのいわば発信地であり、預言者亡きあとの正統カリフ時代の首都でもあって、イスラームの社会的政治的中心地である。ここには預言者の墓地や住居を含めた預言者マスジドも所在する（脚注4）。海外など遠方から来た巡礼者は、それゆえマッカ巡礼の機会に合わせて預言者ゆかりの聖都であるマディーナをも訪れ、預言者マスジドなどに参詣する（大塚・小杉他（編）2002: 79, 338, 808-809, 816-817, 914, 919-920, 947, 968, 980-982; 小杉 2002: 98-100, 108-109, 132-135; 佐藤次 2009: 8-18; 野町 2002: 106-115; 羽田 2016(1994): 49-52; 水谷 2010a: 74, 2016: 182-185; 森 2006: 14, 2014: 1, 2015(2007): 143-144; Bianchi 2004: 13-14; Buitelaar, Stephan-Emmrich & Thimm 2022b(2021): 2; Wheeler 2019: 56-58）。

次に、巡礼の由来について述べる。水谷によれば、イスラームに直結するものとして語られるはじめての巡礼は、預言者イブラーヒームとその子イスマーイールが、天使ジブリールに伴われて行ったものである。それは、カアバでの一連の儀礼行為、その後アラファトでの午後半日の逗留からなるものであった。その後、多神教の時代を経て、預言者ムハンマドは、自ら人々を率いて実行することで、巡礼のスタイルを確立した（大塚・小杉他（編）2002: 441; 水谷 2010a: 28-30）。この点で、現在の小巡礼と大巡礼の直接の起源は預言者ムハンマドの言行にある。ただし、預言者が実際に行った事柄が細部まではっきりわかっているわけではない。現在は、巡礼の「柱」が守られることが肝要であって、巡礼のあり方はたったひとつではなく、かならずしも預言者の実践の通りでなくてよい、というのがイスラーム法学諸派に共有される考え方である。あるインドネシア人ウスタットは、預言者も巡礼のあり方の偏差を許容する認識を示していた、と述べる。

そのことを踏まえた上で、以下、ハディースつまり預言者ムハンマドの伝承記録にもとづいた水谷の記述をおもに参照し（水谷 2010a: 53-54）、預言者の行った大小巡礼について、その知られているところを確認しておきたい。

預言者ムハンマドは、629年にマディーナからマッカに向かって、「課題の小巡礼」（ウムラ・アルカディーヤ／ウムラ・アルカダー）と呼ばれる3日間の巡行を、約2000人を引き連れて行った。「課題」といわれるのは、この小巡礼を628年に試みたが、不首尾に終わったことから残された課題となり、マッカの支配勢力と和議を結んだ翌629年によりやくこれを果たせたからである。そして630年、イスラーム軍によるマッカ征服が成り、これを契機に預言者ムハンマドは、マッカの北方十数キロメートルの地点にあるジウラーナでイフラム（ihrām）と呼ばれる巡礼禁忌状態に入り、ウムラ・アッジウラーナと呼ばれる小巡礼を行った。預言者は、後述する「別離の巡礼」（hijjat al-wadā'）の際の小巡礼や、628年の不首尾に終わった小巡礼を含め、小巡礼を4回実施したとされる³²（大塚・小杉他（編）2002: 981; 佐藤次 2009: 15; 水谷 2010a: 55-56; Rahimi & Eshaghi 2019b: 38）。

大巡礼は、預言者ムハンマドが632年、死の3カ月前に行った「別離の巡礼」と呼ばれる最後の巡礼を範とする。預言者が行った大巡礼に相当する巡行は、この1回だけである（小杉 2002: 137-

³² 預言者ムハンマドは、イスラーム以前にも2回ほど小巡礼を行っていたと伝えられる。しかし、詳細は知られていない（水谷 2010a: 55）。

140; 佐藤次 2009: 15; 水谷 2010a: 56; Berkey 2023 (2010): 27-28; cf. Ibn Hisham (eds.) 2016 (1982/1955): 649-652)。そのことから、一般にムスリムは生涯に1度でよいから大巡礼を行うべきであるとされる。以下、「別離の巡礼」について述べる。

ヒジュラ暦第11月25日ころ、預言者は、妻たちを含め何万人とされる多数の信徒を引き連れ、マディーナを出発しマッカに向かった。ズー・アル＝フライファという町に入ると、ここでひと夜を過ごし、すでに旅立っていたので、礼拝は2ラクアの短縮形で行い（本節第1項）、巡礼の意志表明し、イフラムに入った。ここは、いまもイフラムに入る境界地点ミーカート／ミーコート（mīqāt）のひとつである。さらに南に進んだところで、アッラーに帰依するタルビヤ（tarbiya）と呼ばれる祈りの成句を預言者が唱えはじめ、人々もこれにしたがった³³。マッカに到着すると、カアバのある聖マスジドに入り、はじめの3周は速足で、次の4周は並足で、カアバを周回した³⁴。これがタワーフ（tawāf; まわる）である。その際、預言者はカアバの黒石——預言者イブラーヒームがカアバを建立したときに天使が運んできたとされる（大塚・小杉他（編）2002: 236）——に接吻した（または触った）。次に、マカーム・イブラーヒーム（Maqām Ibrāhīm; イブラーヒームの立ち所）の近くで2ラクアの礼拝を行った。マカーム・イブラーヒームは、イブラーヒームがカアバを建立する際に踏み台にした石が納められた場所である。そして、預言者はふたたび黒石に接吻し、ザムザム（Zamzam）の泉の水を飲んだ。次に、近くにあるサファー（al-Safā）の丘で、次には400メートルほど移動してマルワ（al-Marwa）の丘で、それぞれ祈りの成句を唱え、この2つの丘の間を、祈りの成句を唱えながら7回行き来（3.5回往復）した。この行為がサアイ／シャイ（sa'y）である³⁵。2つの丘を行き来する道の途中にある緑の印の間は悪魔のささやきがあるとされ、古来の慣習にしたがい速足で駆け抜けた。そののち髪をすこし切ったとされるが、預言者は髪を切らなかったという説もある（大塚 1989: 41; 水谷 2010a: 56-62, 75; 森 2006: 14; cf. Bianchi 2004: 8-9）。

預言者たちは、巡礼月4日の昼過ぎに、マッカ郊外のアルアブダフに出て、しばらくそこで礼拝と祈願の日々を過ごした。また、預言者は、大巡礼用の供犠獣を連れてこなかった者たちは、ここに来るまでを小巡礼とみなし、いったんイフラムを解き、巡礼月8日までの4日間を利用して家畜を準備し、あらためてイフラムに入って、アラファトで行う大巡礼に参加すべきである、と教えた。現在、大巡礼には3つの方式があるが³⁶、預言者はこのとき大巡礼と小巡礼をひとつの過程

33 タルビヤは「あなたの御前に参りました、アッラー、あなたの御前に参りました…」ではじまる。巡礼では、ミーカート／ミーコートから聖マスジドに入るまで、これを繰り返し唱える。タルビヤの類はイスラーム以前から複数あったが、預言者はその最善のものを範として垂れた。預言者は、信徒が多少異なる文言を唱えても、内容に支障がないかぎり意に介さなかったという（大塚・小杉他（編）2002: 621-622; 水谷 2010a: 58-59）。

34 預言者がはじめの3周を速足（raml）で行ったのは、マッカの人々が、預言者たちが長旅で疲れていることを冷やかしたため、元気なところを見せようとしたからである。これははじめの3周の速足は、男性だけでよいとされる（水谷 2010a: 60-61, 2023: 239）。

35 ザムザムの泉とサアイ／シャイ儀礼に関連する故事に触れておく。イブラーヒームは、妻ハージャールと子イスマーイールを連れてアラビア半島に赴いたが、ここで神の命により、いったんふたりを置き去りにした。幼い子のために水をもとめ、ハージャールは蜃気楼を追って砂漠を往復した。するとイスマーイールの足元から水が湧き出した。これがザムザムの泉である。巡礼者は、水をもとめたこのハージャールの故事にしたがい、ザムザムの水を飲み、2つの丘の間を往復するサアイ／シャイを行う。ザムザムの泉のおかげでマッカは居住可能な地となり、母子はここに定住し、のちに戻ったイブラーヒームはイスマーイールとともにカアバを建設した。サファーの丘は、預言者ムハンマドがはじめてマッカの人々に公然とイスラームを説いた場所でもある（大塚・小杉他（編）2002: 415, 756）。

36 ハッジの3方式に触れる。(1)ハッジ・タマツトゥ（hajj tamattu'; 堪能型ハッジ）は、ヒジュラ暦10月～巡礼月はじめまでにマッカでまず小巡礼をし、イフラムをいったん解いたのち、巡礼月8日にあらためてイフラムに入り、大巡礼をする、という方式である。ただし、2度目のイフラムへの移行はミーカートの外ではなくマッカ内になる。(2)ハッジ・キラーン（hajj qirān; 結合型ハッジ）は、イフラムを解かず、小巡礼と大巡礼をつづけて行う方式である。ミーカートに入る際、巡礼の意志表明の際に、小巡礼と大巡礼をつづけて行う意志を表明する。そして巡礼月8日までにマッカに入り、小巡礼をし、巡礼服を着つづけたまま巡礼月8日の夜までにミナーに向かい、ハッジの行程を遂行する。キラーンは、ふ

で連続して行う方式 (hajj qirān) で、また、ここから供犠獣を用意するためにイフラムをいったん解いた者たちは小巡礼後にあらためてイフラムに入り大巡礼を行う方式で (hajj tamattu')、この「別離の巡礼」を行ったことになる。ただし、預言者の「別離の巡礼」は後者の方式であるとする説もある。また、預言者は後者の方式が一番よいといったとする伝承もある (水谷 2010a: 62–63, 86–87)。

巡礼月 8 日の午前、預言者たちはアルアブダフからミナーに移動し、ここで、昼過ぎ、午後、日没後、夜、そして日の出前の 5 つの礼拝をそれぞれ 2 ラクアの短縮形で行った。そして巡礼月 9 日にアラファトに向かった。この日 (西暦 632 年 3 月 7 日) は、アッラーの祝福がある金曜日であった。イスラーム以前のクライシュ族の巡礼はムズダリファまでの行程であったが、預言者ムハンマドはムズダリファの向こうにあるアラファトの荒野にまで到達し、悪しきこれまでの慣習をあらため、みな人は平等であることを示そうとした。そして、アラファトで「別離の説教」(khutba al-wadā') と呼ばれる説教を行った。これは、私の言葉を聞け、今年を最後に、この場所でまたあなた方と会うことはないかもしれない、人々よ、あなた方の血、財産は、今日のこの月、日が神聖なように、侵すべからざる神聖なものである、アッラーに会う日には、あなた方の行いについて問いただされる……といった内容であり、どのムスリムもみな兄弟であり同胞であると述べて、預言者は説教を終えた。そしてこの説教後、イスラームの完成に関する有名な「クルアーン」の聖句がアッラーから啓示された (水谷 2010a: 63–66)。

この説教後、昼過ぎと午後の礼拝を 2 ラクアの短縮形でつづけて行ったあとで、預言者たちは日没までカアバの方向に向かって祈りをつづけた。この、アラファトにとどまり日没まで礼拝と祈願に従事する行為をウクーフ (wuqūf; 逗留) という。森は、預言者は「巡礼はアラファである」と伝えており、このアラファトでのウクーフが巡礼のクライマックスであるとする。そして、日没後預言者たちはアラファトを去り、ムズダリファへと移動した。預言者はラクダに乗った。そしてゆっくり、静かに、と何度も同行者たちに述べた。イスラーム以前の巡礼では、走って戻るのが慣習であったが、敬虔な気持ちを保持しつつ、歩く速度で行くよう、あらためたのである。なお、往路と復路はおなじ道を通らないようにした。ムズダリファでは、日没後と夜の礼拝を 2 ラクアの短縮形でつづけて行った (大塚・小杉他 (編) 2002: 194; 水谷 2010a: 66–68; 森 2006: 14–15; cf. Bianchi 2004: 9)。

巡礼月 10 日、預言者たちは、日の出前の早い時間に礼拝をムズダリファで行ったあと、イスラーム以前にクライシュ族が巡礼の東端とし日の出後に供犠を行っていたアルマシュアル・アルハラームに向かったが、ここでは供犠を行わず、ミナーまで日の出前に戻った。そして石投げの儀礼ジャマラト (jamarat) を行った。通りに架かる陸橋を支える、シャイターン (shaytān; サタン) を象徴する 3 つの石柱ジャムラ (jamra) の中の最大の石柱に向かって 7 回石を投じた。この儀礼行為にもイブラーヒームの故事が関わる。イブラーヒームは、アッラーの命により、わが子イスマーイールを犠牲にささげようとしたが、シャイターンがささやき邪魔をしたので、この大石柱に石を投じてシャイターンを追い払った。ジャマラトは、この故事にある行為の反復である³⁷。なお、妻ハー

たつの結合を原義とする語である。(3)ハッジ・イフラード (hajj iflād; 単独型ハッジ) は、小巡礼を別の機会とし、大巡礼のみを行う方式である (大塚・小杉他 (編) 2002: 317, 488; 水谷 2010a: 41, 85–87, 226–232)。サヤン氏が参加した巡礼ツアーは①であった。1 度しか行けないかもしれないハッジにおいて、おおくの巡礼者が望むのはゆとりのある①である。ただ、大巡礼のあり方はひとつではない。小巡礼も含め、マッカ巡礼の具体的な内容には偏差がある (水谷 2010a: 85–87, 2023: 238–241)。

37 この投石儀礼行為は、イスラーム以前から行われていた慣習であったと考えられる。「クルアーン」にこの行為に関する

ジャーは中石柱に、子イスマーイールは小石柱の前で、やはりシャイターンを追い払った。預言者はムズダリファを出る前にこの投石儀礼のための石を集めていたとされるが、その場所とはっきりしない。このあと、預言者は、自身の年齢とおなじ数の63頭のラクダを、同行していたアリー（のちの第4代正統カリフ）に屠殺させ、この供犠獣の肉を食し、スープを飲んだ。この日は屠畜の日（Yaum al-Nahr）と呼ばれる。この供犠行為も、イブラーヒームがわが子イスマーイールを犠牲にささげようとしたとき、アッラーから供犠獣が与えられた、という故事にもとづく。そして、預言者たちは剃髪した。これをもって、女性との交わりをのぞき、イフラームの種々の禁忌は解かれることになった。そのあと預言者はミナーでも説教をした。その内容はアラファトでの説教の内容と大同小異である。アラファトとミナーの2つの説教は、ともに「別離の説教」と呼ばれる。なお、預言者が「これが別離の説教だ」と述べたのは、ミナーにおいてであったと伝えられる（大塚・小杉他（編）2002: 465, 488-489; 野町 2002: 130-164; 水谷 2010a: 66-71; Esposito et al. (eds.) 2003: 104）。

ミナーを出発した預言者たちはマッカに着き、カアバで昼過ぎの礼拝を行い、ザムザムの水を飲み、タワーフを行った。このタワーフはのちに「大挙のタワーフ」（*tawāf al-ifāda*）と呼ばれた。預言者たちが大挙して郊外からやってきたからである。また、預言者は、カアバの扉に手をやりながら、将来、裕福な者は遠足気分で、中流の者は商売のために、貧しい者は気取りや銜いのために、巡礼をするかもしれない、と述べ、巡礼の精神が失われないように警告をした、とも伝えられる（水谷 2010a: 52, 71-72）。

カアバを出た預言者たちは、巡礼月11日～13日はミナーにとどまり、石投げをつづけた。また、預言者の示唆にしたがい、体調不良などで巡礼月4日～8日の時点で大巡礼への参加を断念した者たちは、この間にマッカ近郊のアルタンイームに出て、ここでイフラームに入って小巡礼を行うことができた。急ぎの者は、12日までミナーにとどまればよいとされた。巡礼月14日、預言者たちはミナーを出発し、マッカに入り、カアバで「別離のタワーフ」（*tawāf al-wadā'*）を行い、マディーナに帰った。その際、預言者は、ザムザムの水を持ち帰り、途中で人々にこれを分け与えた（水谷 2010a: 72）。

預言者ムハンマドは、こうして自ら人々を率いて巡礼を実行し、指示を残し、預言者としての役割を果たしたのち、マディーナの自宅で没した（大塚・小杉他（編）2002: 156, 488, 981; Ibn Hisham (eds.) 2016(1982/1955): 649; Rankin 2013: 312）。大巡礼は、預言者が行った「別離の巡礼」を踏襲するものとされる（大塚 1989: 42）。現代のムスリムも、自らが行う大巡礼・小巡礼を、預言者が実際に行った営みの反復実践と認識している。

断片的なところしかわかっていないが、預言者ムハンマドの「別離の巡礼」は、クライシュ族がマッカで行っていたイスラーム以前の巡行の一部を引き継ぎ、一部を組み替えたものであったと考えられる。たとえば、カアバでのタワーフは、もとをたどれば天使たちの天上での行為に由来し、アッラーの命により地上でも行われるようになった儀礼行為であり（脚注6）、イスラーム以前の人々が行っていた儀礼行為でもあった。預言者ムハンマドは、しかし、巡礼の最後の段階に行われ、巡礼のクライマックスに当たるものとされていたタワーフを、巡礼の最初の段階に行うように変更した。そして、巡礼のクライマックスを、マッカから25キロメートルほど離れたアラファトのラフマ山周辺における、巡礼月9日午後のウクーフと位置づけた。ウクーフは、それぞれの信徒がアッラーに対峙するこの上ない機会であり、最後の審判においてアッラーの前に集められるその

言及がまったくないのは、当時これが自明の行為であったからであると考えられる（水谷 2010a: 51-52）。

ときを集団で具現化しつつ、ムスリム共同体意識を涵養し高揚し、ムスリムとしての新たな生を踏み出す契機とされた。預言者は、巡礼における他の儀礼行為も、何日にどこで何を行うといったかたちで、その過程を明確化し規範化した（水谷 2010a: 29–30, 44; Wheeler 2019）。

(3) 若干の補足と整理

以上の記述において、大巡礼・小巡礼のおおまかな次第を示すことはできたと判断する。最後に、これまでの記述で十分言及できなかった若干の点を補足しつつ、大巡礼・小巡礼の過程を整理しておく。

補足の第1点は、ミーカート／ミーコートについてである。本節第2項ではこれをイフラームに入る境界地点であると述べたが、正確には、ミーカートはイフラームに入る地点と時点の双方を意味する語である。時間的なミーカートはヒジュラ暦第10月～第12月10日の期間内であり、これはハッジ・タマツトゥにおける小巡礼の有効期間と重なる。また、空間的なミーカートは巡礼境界地点といいかえることができ、預言者ムハンマドが定めた5地点が具体的な境界点となる。そのひとつが先述したズー・アル＝フライファ（マッカから400キロメートル北）である。巡礼者はこの5地点のどれかを通してマッカに入る。その際、巡礼の意志を表明し、グスル（ghusl）と呼ばれる浄めをしてイフラーム（巡礼禁忌状態）に入る（大塚・小杉他（編）2002: 329, 943–944; 水谷 2010a: 92）。今日、国外からの巡礼者は、上空の機上でミーカートを通りイフラームに入る場合もある。

第2点は、そのイフラーム——インドネシア人話者はしばしばイフロムとも発音する——に関する補足である。意志表明をし、浄めをしてこの禁忌状態に入ることは既述した。ただ、イフラームという語は、男性がイフラーム状態にある間に身にまとう巡礼服——縫い目のない白い2枚の布を身に巻き付ける——をも意味する。この巡礼服は、死後に復活させられアッラーの前に呼び出される時のいで立ちであり、死装束でもある。みな平等であることをも意味するとされる。巡礼者の男性は、下着、帽子やターバン、靴や靴下などを身に着けることは認められず、頭と顔そして手や足先を隠してはいけない。ただ、傘はさしてよい。女性の場合、縫い目がある服でよい。頭髪を隠すヒジャブ等のほか、帽子、傘、下着、靴下、靴の着用は認められるが、顔と手先は出しておく。このように、女性の衣服に特段の規定はないが、サウディアラビアでは黒い服を着る女性がおおい——下着の線が見えない配慮とも聞く——こともあり、巡礼に参加する女性は黒の服を身に着ける傾向がある。イフラーム期間の禁忌としては、性交に加え、性的刺激を与える行為、結婚、狩猟、剃髪・剃鬚、爪切りがある。香りを放つこともいけない。芳香のある衣服もいけない（大塚・小杉他（編）2002: 152–153, 487; 水谷 2010a: 92–102; 森 2006: 14）。それゆえ、今日の巡礼者は、巡礼中に着用する下着や衣服を香りの成分なしの洗剤等で洗いスーツケースに入れておく。サヤン氏や同行の巡礼者もそうしていた。

第3点は、ハッジのあり方はたったひとつではなく、いくつかのあり方がある一方、その「柱」を遵守することが必要とされていることである。水谷によれば、細部に関する認識の差異を挙げれば、イスラーム法学のスナ派主要4学派において（第2節第3項）、ハッジには4つの柱があるとされている。すなわち、①イフラーム（禁忌遵守）、②タワーフ（カアバ周回）、③サアイ（サファーとマルワの間の早駆け）、④ウクーフ（巡礼月9日昼から日没にかけての礼拝と悔悟の行）、である。この柱のどれかが欠ければ、ハッジは成立しない。とくに、②③が不可欠であるという点は、すべての学派により支持されている（水谷 2010a: 222–225, 2023: 243）。

第4点は、ハッジに参加する一般信徒の知識欲についてである。私が接したムスリムたちのイスラームに関する知識の質量はさまざまであると感じられる。ただ、ハッジを実行したいと欲する

者、実際に実行する者たちは、本節第2項において記述した内容はむろん、それ以上の知識をもってハッジに臨んでいる。その例外は、結婚を機にムスリムに改宗しすぐにハッジに参加する者くらいであろう。生来のムスリムのハッジ参加者は、日々「クルアーン」を読み、その部分またはすべてを暗記し暗唱し、知識をさらに蓄積・向上・洗練させて、ハッジ実行のときを迎える。その一端は、第4節でも触れる。

巡礼の概要は以上である。では、あらためて大巡礼と小巡礼について整理しておこう。

現在、大巡礼は、ハッジ・タマツトゥの場合、①ミーカートでの意志表明と巡礼服着用によるイフラーム状態への移行、タルビヤの唱和、②カアバにおけるタワーフ（男性ははじめの3周を早足する）、③マカーム・イブラーヒーム近くでの2ラクア／ロカの礼拝、ザムザムの泉での飲水、サアイ／シャイ、若干の剃髪、といったカアバ周辺での一連の儀礼行為、イフラームの解除、④イフラームへの再移行、巡礼月8日のミナーへの移動とひと夜、⑤巡礼月9日のアラファトへの移動、アラファトのラフマ山周辺——具体的にはナミラ・マスジド（Mesjid Namirah）周辺——でのウクーフ、⑥日没後のムズダリファへの移動とひと夜の滞在、⑦巡礼月10日早朝のミナーへの移動、ジャムラ陸橋でのジャマラト、供犠（屠畜）、⑧マッカ中心部に戻っての2度目の②③、⑨剃髪とイフラームの解除、⑩ふたたびミナーに戻ってのジャマラト、⑪マッカを去る前の「別離のタワーフ」と呼ばれる3度目の②、という一連の過程から成り立っている（cf. 水谷 2023: 237-241）。一方、先述のように、預言者の「別離の巡礼」では、⑦巡礼月10日のミナーへの移動、ジャムラ陸橋でのジャマラト、供犠、⑨剃髪とイフラームの解除、⑧マッカ中心部に戻っての2度目の②③、⑩ふたたびミナーに戻ってのジャマラト、⑪マッカを去る前の「別離のタワーフ」、つまり⑦⑨⑩⑪という順番であった。現在の大巡礼は、⑦⑧⑨⑩⑪の順序で営まれており、預言者の実践とはやや違ったかたちが妥当なハッジの過程とされている。このことは、第4節でもあらためて確認したい。

小巡礼は、大巡礼の際に合わせて行う場合と、これとは別の機会に行う場合とがある。前者の場合、ハッジ・タマツトゥにおける①②③が小巡礼に相当する。大巡礼以外の機会に行う小巡礼の場合、ミナーの谷やアラファトには行かず、聖マスジドの中で儀礼行為が完結する。すなわち、(1)ミーカート地点で、ウムラ／ウムロを実行する意志を表明し、イフラームの状態に移行し、(2)聖マスジドにおいてタワーフを行い、マカーム・イブラーヒームの近くで2ラクア／ロカの礼拝を行い、ザムザムの泉の水を飲み、(3)サアイ／シャイ儀礼を行って、髪をすこし切る。以上である（大塚・小杉他（編）2002: 488）。なお、この場合も、(4)マッカを離れる前に「別離のタワーフ」は行う。

大巡礼・小巡礼ともに、一連の儀礼行為の過程は、預言者ムハンマドの言行に由来する。とくに大巡礼は、彼がおおくの人々とともに実行した「別離の巡礼」に由来する。ただし、現在のハッジの細部のすべてが預言者の言行を踏襲し反復したものなのではない。そもそもハッジにはたったひとつのやり方だけがあるのではなく、一定の偏差を内包する。また、現在の巡礼は預言者以後の法学者たちの膨大な研究の上にある。また、そうした研究にもとづく知識を、現代のムスリムたちは欲し、学ぼうとする。いまだ巡礼に参加する機会を得ない者も含めて、ムスリムたちは、多大な関心をもってハッジの一連の儀礼行為・その意味・背景を知ろうとし、いつか自分もハッジに行きたいと強く憧れるのである。

第4節 あるムスリマのマッカ大巡礼

本節では、サヤン氏というひとりの日本在住インドネシア人ムスリマが2023年に行ったハッジ

のあらましを記述する。

(1) サヤン氏のプロフィール

まず、サヤン氏のプロフィールを、一部私の解釈を交えながら、簡単に紹介しておく。

サヤン氏は、2023年のマッカ巡礼時40代後半（2026年6月時点で50代）の既婚女性であり、ジャカルタ生まれのスダ系インドネシア人である。ジャカルタ市の警察官であった父は、サヤン氏が3歳のときに病没した。その後、サヤン氏とその兄・姉2人・弟の計5人の子を、母は食堂を切り盛りしながら懸命に育てた。ジャワ西部の農村で生まれ育ち、結婚を機にジャカルタで暮らすようになった母には職業労働の経験がなかったが、幼い子ども5人を抱えて寡婦となった母の境遇を見かねた父の友人が、生活費を稼ぐ手段として、ジャカルタ中心部のオフィスビル内にあった借り主の空いた食堂を紹介してくれた。

インドネシアは多民族国家である。バリ人やスマトラ北部のバタック人は父系、スマトラ南部のミナンカバウ人は母系の社会であるが、スダ人はジャワ人と同様、親族組織におけるリニアリティが強い双性／無系（cognatic）の社会に当たる（cf. 長嶋 1974; 西川 2024b, 2024c）。また、スダ人の場合、明確な規範というわけではないが、末娘が婚出せず親と生活するというパターンが比較的好ましい。サヤン氏の場合も、幼いころから、漠然とではあるが、自分が老後の母と暮らすことを考えていた。また、母も、家で食堂の調理の仕込みをする際に簡単な作業を手伝うなど、自身に寄り添ってくれるサヤン氏と暮らすことに、一定の期待をもっていたようである。サヤン氏は、はじめてもらった月給を、母の借金の返済と「クルアーン」の購入に充てた。家事を片づけた夜にぼろぼろの「クルアーン」を読むのが日課であった母に、サヤン氏は新しい「クルアーン」をプレゼントしたのである。しかし、その後、サヤン氏は、20歳前後のときに知り合った日本人男性——当時仕事の関係でジャカルタにいた——と結婚し、日本で生活することを選んだ。

サヤン氏は1996年に来日し、名古屋市に比較的近い地方都市で、夫およびその父母らと同居する新生活をはじめた。その翌年、インドネシア通貨危機が発生した。ジャカルタでは暴動も起き、スハルト政権が倒れ、民主化へと向かう社会の激変があった。サヤン氏の夫は、インタビューの中で、仮に結婚が1年遅れていたら、政情不安の中で果たして結婚できていただろうか、と語ったことがある。サヤン氏は、来日前は日本語ができなかったが、仕事上の必要からある程度インドネシア語をつかえる夫からすこしずつ日本語を学んだ。夫は、日本語や日本語の婉曲な言い回し——ジャワ人・スダ人・バリ人らの言語・文化にもそうした要素はある——、男女の言葉つかいの差異などをサヤン氏に献身的に教えた。家では舅・姑そして子との会話、外では日本人のいわゆるママ友たちとの会話を通して、サヤン氏は、数年をかけて徐々に日本語を話し読み書きできるようになった。

ところで、この1990年代、ジャカルタは現在ほどイスラーム化が顕在的ではなかった。野中は、1990年代末のスハルト政権崩壊・民主化以降、インドネシアでイスラーム化が顕著になり、礼拝や断食をまじめにする人々が増加し、日常的な会話やあいさつの中でアラビア語が口にされるようになり、敬虔なイスラーム教徒が主人公となる映画やドラマが人気を博し、マッカ巡礼がブームになり、イスラーム金融が浸透し、食品業界でハラール認証がさかんになった、と述べる（野中 2015: iv–xii, 22–24）。1990年代前半に留学して以降、ジャカルタやバリを毎年のように訪れていた私自身も、1990年代の女性の学生や就労者らのおおくが、ヒジャーブや丈の長いムスリム女性服（gamis, abaya）を身に着けておらず、若い女性たちにおいては西欧や日本と同様の服装が一般的であったこと、しかし2000年代以降に野中のいう「ヴェール化」つまり女性の衣服規範のイスラーム

ム化が次第に浸透したことを、観察していた (cf. 小林 2007, 2014b; Feillard & van Doorn-Haeder 2013: 154–156; Hefner 2024; Ichwan 2013; Smith-Hefner 2007; van Bruinessen (eds.) 2013a)。サヤン氏は、そうしたインドネシアにおけるヴェール化の社会的浸透の前に生活の拠点を日本に移したのであり、日本でも当然日本人とおなじ衣服を着用して生活していた。

来日して10年以上の間、自宅や地域周辺にインドネシア人がいないサヤン氏は、知り合いになった名古屋市とその近辺にいる数名のインドネシア人既婚女性たちとごくたまに会ったり、彼女たちのプガジアンにまれに参加したりしていたが、日々交流する友人は日本人のママ友であった。また、当時、名古屋方面に居住するインドネシア人既婚女性たちのほとんどは、サヤン氏やそのママ友たちと同様の服装であった。サヤン氏は、舅・姑と同居し子育てに忙しい日々を送る中、イスラームについて勉強したい気持ちはあっても、それを具体的に実行する機会には恵まれなかった。しかし、子育てが一段落した2010年代半ばころから、サヤン氏はあらためてムスリムとしてより規範に沿った生活を送るべきであるという思いを強くもつようになった。そして、日々の生活での規範遵守により努め、インドネシア在住のウスタットやウスタジャたちの公開講演や講話のYouTube 動画などを視聴するようになった。これは、自宅のWi-Fi 環境が整い、タブレット端末やスマートフォンをサヤン氏がつかうようになったという点にもよる。インドネシア人との交流から疎遠であったサヤン氏においては、インドネシア都市部の趨勢よりも遅れて、かつ個人化したかたちで、イスラーム化の機会が訪れたのである。

サヤン氏は、2010年代後半に、年齢の近い数名の名古屋市在住インドネシア人既婚女性——後述するネマン氏、コクト氏を含む——と懇意になった。そしてそのひとりカデ氏に依頼し、毎週SNS や会議アプリをつかった1時間ほどのマンツーマンのイスラーム学習レッスン（友人なので無料であった）を受けるようになった。さらに、この友人の紹介を受けて、数十人程度の生徒がSNS や会議アプリでインドネシア人のウスタット／ウスタジャ——インドネシア在住者、アラブ在住者、日本在住者などさまざまである——からレッスンと質疑応答を受けるプガジアンにも参加するようになった（こちらは有料であった）。また、上記の名古屋在住者中心のプガジアンとは別に、2020年前後から、サヤン氏は自身の在住都市周辺地域に居住するインドネシア人が催行する月1回のプガジアンにも参加するようになった。サヤン氏が知らぬ間に、周辺地域にはおおくのインドネシア人が社員や実習生として働いていた (cf. 明石 2020; 乾 2021: 161–170; 万城目 2020)。プガジアンを通して、サヤン氏は彼らやその配偶者女性らと懇意になった。

私は、サヤン氏がイスラームの勉強に励むようになった後の2010年代末、彼女からとても印象に残る話を聞いた。これが、のちに彼女にインタビューし、本章の議論を書くことを思い立つひとつのきっかけになったといつてよい。その印象深い話とは、「日本人はムスリムのようだ」というひとことであった。日本人は、もちろんそうでない人もいるけれども、おおくの人たちは嘘をつかないし、約束をきちんと守る、そしていい加減であることをよしとしない、また相手をよく気遣う、そうした点はムスリムの本来あるべき生き方そのものである、日本人は宗教 (agama) (第V章第1節参照) をもっていないが、社会のルールをよく遵守する、この宗教をもっていないというとても残念な点をのぞけば、日本人はムスリムのような生き方をしている、というのである (cf. 岡内 2023: 109; 水谷 2016: 102–109)。こうした見解は、自身の親しいインドネシア人の友人ももっているという。たとえば、ムスリムはしばしば「イン・シャー・アッラー／インシュアウロー」(in shā'a Allāh; アッラーの思し召しがあれば[何事も成就する]) というアラビア語の慣用句を口にしておき、交わした約束をあとになって守れなくてもそれは仕方がない、というニュアンスを漂わせることがある。しかし、そうした反古の可能性を込めて約束を交わすことは、ムスリムの本来あるべき

態度ではない。サヤン氏の理解は、たとえばそうしたものであった。実際、あるウスタットは、人間ができることを努力することは大切である、「インシュアウロー」を言い訳のように口にすることはよろしくない、という趣旨の話をしていたという³⁸。こうして、私は、サヤン氏、彼女の友人、彼女たちの夫らから、インドネシア人ムスリムがどのような理解や価値観をもって日本で暮らしているのかについて、私の妻の仲介・助けを借りつつ、すこしずつ話を聞くようになった。

サヤン氏は、やはり2010年代後半から、パート労働や買い物などで外出する際にヒジャブを着用するようになり、普段の衣服も、ムスリムの袖や丈が長いスカート状のものを着用するようになった。また、名古屋周辺に在住するインドネシア人ムスリムの既婚女性たちが月に1度対面で行う定期的なプガジアンにより積極的かつ定期的に加わるようになった。このプガジアンは、20人弱の固定したメンバーからなり、順番で自宅を会場とし、平日の昼前に集合し、勉強会を主目的とし、各自が持ち寄った料理を共食し、しばし談笑し、前後にサラートをし、子どもが下校する前にそれぞれ帰宅する、というのが基本パターンである。コロナ禍中、感染拡大期には対面での会合を控えオンラインに切り替えたが、比較的小規模なグループであることもあって、三密を回避するなどの努力をしつつ、月1回程度のこの勉強会をできるかぎり継続した。コロナ感染が落ち着きはじめた2022年途中からは、コロナ禍以前のような月1回の定期的対面会合のかたちに戻った。

以上をまとめよう。サヤン氏は、子育てが一段落した2010年代後半になって、ムスリムらしい生活を送りたい、イスラームについてよく知りたいという、かねてから抱いていた望みにかなう生活へと、人生のスイッチを切り替えた。そしてその後、2023年に、マッカ大巡礼に行くことを決意し実行したのである。

(2) 巡礼ツアーの申込から出発まで

まずは、サヤン氏が2023年にハッジ実行に至った背景や経緯について述べる。そこにあるのは、おもに2つの要因の、意図せざる交差であった³⁹。

サヤン氏は、2020年に友人となった関西在住のインドネシア人既婚女性から、2022年に、来年大巡礼に行く予定なのだがいっしょに行かないか、と軽く誘われた。この時点で、サヤン氏は自身がマッカに行くことをまだ現実的なこととして考えてはいなかった。ハッジに行くにはまだまだ勉強不足であるという認識を強くもっていたからである。ただ、もし彼女と行けるのなら、それはすばらしいことである、と思った。この友人からの誘いは、ハッジ実行の直接の引き金とはいえないが、あとから思い起こせば、サヤン氏にとってひとつの導線といえるものであった。

さて、要因の第1は、ジャカルタ在住の母と兄夫婦の3名が2023年に大巡礼に行くことと決まったことである。3名は、数年前から兄が全額を出してともにハッジに行く計画を立て、一部の支払い

³⁸ このころサヤン氏が視聴していた別のインドネシア在住ウスタットの講話では、自分がよくない行為をした場合、それをシャイターン（サタン）のせいにする人はおおいが、何でもサタンのせいにするのではサタンがかわいそうだという話があったという。このウスタットは、聴衆を笑わせながらイスラームの教えを伝えるので、その講話は対面でもYouTubeでも人気である。

³⁹ ムスリム女性の巡礼実行は、宗教的および非宗教的な意味や動機の複合的全体を背景に理解すべきである。たとえば、ブイテラールらは、イスラーム共同体の源郷ともいえるマッカやその中心にあるカアバへの強い思いと、彼女たちの日々の生活を取り巻くさまざまな言説や実践に照らして、ムスリム女性の巡礼を捉えようとする（Buitelaar, Stephan-Emmrich & Thimm 2022b (2021): 11; Kadrouch-Outmany & Buitelaar 2022 (2021): 37）。ただ、彼女らの考察は社会的な要因や背景を中心にしており、巡礼者個人による動機づけや要因の組み合わせの差異とそこにある偶有性を重視しない。サヤン氏の場合、時間をかけた計画や物心の準備ではなく、諸般の事情がタイミングよく揃い、友人や夫が後押ししたことが巡礼決行の引き金になっている。当事者の意図しない要因の連結——それを当事者はアウローの導きとを感じる——がおおきな位置を占めるケースもまたあるのである。

をしていたが、実際にいつ行けるのかの見通しは立っていなかった。2022年には、サヤン氏の母のみが抽選でハッジに行けることになったという電話連絡を受けたが、兄夫婦は選ばれなかったことから、母はキャンセルをした。そしてあらためて3人で行けるよう申し込んだ。2023年の年明け前後に3人分の残金全額を兄が支払ったところ、3人で2023年に大巡礼に行ける旨の連絡が来た。サヤン氏が母らの大巡礼確定を彼らからSNSで聞いたのは、2023年3月であった。母は10年ほど前から2度ほど軽度の脳梗塞を患っていた。これは、2022年の単独のハッジ決行を断念した理由のひとつでもあった。母はゆっくりと歩くことはでき、巡礼においては車椅子も使用可能である。ただ、70代と高齢であることに加え、糖尿病もある。サヤン氏は、2022年のジャカルタ帰省の際に、母が以前より痩せていたこともあって、6月～7月の暑い盛りに巡礼に行く母のことがおおいに気がかりであった。サヤン氏は、もしも可能であれば、自分も日本から大巡礼に参加し、アウローの導きと祝福があれば、マッカで母と会って、母の手をとってマッカの街を歩きたい、親しい友人から聞いていたザムザムタワー——以前はこの通称で呼ばれていたが、最近クロックタワーという通称がよくつかわれる——にいっしょに入りたい、そして聖マスジドでともに祈りしたい、と思うようになった。

ただ、一方で、サヤン氏は、日本人の夫とともにいつか大巡礼を果たしたいとも考えていた。また、預言者ムハンマドが家族（この場合は夫）をおいてハッジを優先する考え方に否定的であったという伝承も知っていた。夫は、インドネシアから帰国後、日本でずっと勤めており、長い休暇を取ることは難しい。夫が職場に理解をもとめて8月の夏休み前後につづけて休暇を取得するという方法であればまだしも、2023年の大巡礼がある6月～7月——この年のハッジツアーの旅程は6月～7月の3週間かそれ以上となる——に長期休暇を取ることはまず不可能であった。また、衰えを見せる80代後半の夫の父（夫の母はすでに他界）をおいて長く家を空けることもできない。夫の定年退職まで待つとすると数年かもうすこし先になる。それゆえ、マッカ大巡礼をいつ夫婦で実行できるかの見通しや計画を、彼ら夫婦はまだもっていなかった。しかし、2023年の6月～7月は、たまたま夫の担当する仕事が繁忙期から外れる——しかもそれはおそらくこの年だけである——ことがわかっており、この間は夫が家事を引き受けられる見通しはあった。夫は、もし数年以内にハッジに行きたいのであれば、自分と行くことは不可能であるが、ひとりでもよいのであれば、ジャカルタの母にもマッカで会えるかもしれないし、今年行ってはどうか、とサヤン氏に2度ほど話をしていた。この夫の理解と仕事のゆとりが第2の要因である。

サヤン氏は、兄と母が2023年に大巡礼に行けるというニュースを聞いたあとの4月下旬に、マッカ行きを現実的な選択肢として考えはじめ、友人を通して若干の情報を収集しはじめた。インドネシアから出発する母たちの巡礼ツアーは、旅程は約40日間、フライトはガルーダインドネシア航空のハッジ臨時便、ホテル・チケット・ビザ代込み、ひとり100万円強であった。一方、日本から出発する場合、旅程は21日間、フライトは中東の航空会社の乗り継ぎ便、ホテル・チケット・ビザ代込み、ひとり100万円強であり⁴⁰、家族旅行でつかった日本の大手旅行会社もハッジツアーを扱っていることを⁴¹、友人から聞いた。サヤン氏は、Zoomによるマンツーマン学習の先生であり、

⁴⁰ 日本発ハッジツアー料金は、コロナ禍前の70万円前後から2023年に100万円強へ値上がりした。しかし、ハッジ実行後、サヤン氏は、友人やツアーガイドから、国際情勢や諸物価高騰などを受け、2023年ツアーの収支が赤字であったこと、それゆえ翌2024年は2023年の倍に近い値上がりになる可能性もあること、を聞いた（第5節参照）。

⁴¹ この旅行会社は、2016年にまず日本発の小巡礼ツアー（9日間、26万円～）の販売をはじめた。これは、インドネシアの現地法人が2014年に販売をはじめた小巡礼ツアーのノウハウや経験を生かしたものであったと考えられる。日本在住インドネシア人ムスリムにおけるこの旅行会社の巡礼ツアーの口コミ評価は高かった。

何でも相談できる親友でもあるカデ氏（2023年当時40代後半、既婚）に、電話で自身の単独ハッジ行きを相談した。これが5月1日の午前であった。カデ氏は、いくらお金があっても行けない人は行けないし、逆に驚くほど簡単に行けてしまう人もいるのがハッジである、行けるかどうかはアッロー次第である、もしあなたのハッジ行きの扉が開いているのなら行けるはずであり、行ってはどうか、ただ、その場合、もう一度だけ夫に行ってもよいかの許可をもとめるとよい、それでOKが出れば行くと思う、私もあなたがハッジに行くことをうれしく思う、といった助言をした。電話を終えた直後、サヤン氏はこの日たまたま在宅で仕事をしていた夫にカデ氏とのやりとりを伝え、再度許可をもとめた。即座に夫が「いいよ、もちろん」といったので、サヤン氏はすぐに旅行会社の名古屋支店に電話した。

ハッジツアー（本章写真参照）は、この旅行会社の東京のある支店のみで扱う商品であった。その支店にサヤン氏と手の空いた夫が電話したところ、ハッジツアーはすでにキャンセル待ちの状況であった。しかし、旅行会社の担当者はおそらくキャンセルが出るであろうと述べた。予約はしたが支払いをしていない申込者が十人以上おり、そのキャンセルが確定するのがちょうど本日の午後である、その点で「本当にベストなタイミングで」ご連絡をいただいた、キャンセル者が確定した段階で、早ければ本日午後にも折り返し連絡することができると思う、という。サヤン氏と夫は、とりあえずその電話で仮の申し込みをし、午後以降の受け付け可の連絡を受けて、あらためて正式に申込手続きをしたい、と述べた。サヤン氏は午後パートの仕事があったので、サヤン氏の帰宅までは夫がリモートワークをしながら可能な範囲で電話の待機を引き受けることにした。サヤン氏が帰宅する前に旅行会社から電話があり、夫が申し込みをした。その後送られた電子メールにある手順で正規の申込書を記入・送信し、ふたりは手付金の支払いを翌2日に行った。5月3日からGW連休に入るため、たいへん申し訳ないが、5月2日（平日）中に代金の半額分（約50万円）の支払いをお願いしたい、という話であったので、対応した。その日のうちに旅行会社から申込書と入金を確認した旨の電子メールが届いた。サヤン氏と夫は、キャンセル待ちであったにもかかわらず、即日で正式な申込手続きに進んだことをあらためて喜んだ。結婚を機にイスラームに改宗した夫は、キャンセル確定の日に申し込みの電話をした——しかも、たまたまりモートワークの日であったため、サヤン氏に代わり午後速やかに正式の申込手続きまで進めた——「偶然」や「幸運」を口にしたが、サヤン氏はアッローがすべてを導いていると述べ、夫もそれはもちろんそうだと述べたという。

旅行会社からは、5月中旬までにビザ申請に必要な書類等を、書留などの追跡可能な配送方法で送るよう、指示があった。パスポート原本、(外国人の場合)在留カードのコピー、写真、申込書に加え、髄膜炎ワクチンとインフルエンザワクチンの予防接種証明書、簡易な健康診断書、新型コロナワクチン接種証明書、が用意すべき書類であった。サヤン氏は、夫の協力も得て居住地周辺で予約し、2つの予防接種を一度に済ませることができた。一方、健康診断書については、ワクチン接種を受けた病院では、血液検査などを行う必要があると考えられるがその検査結果が出るまでに1週間は要するという回答で、提出期限に間に合わせる事が難しいことがわかった。そこで、行きつけの医院に尋ねたところ、おそらく即日で出せるであろうという回答であったので、予約を取ってその医院で尿検査や問診などを受け、健康診断書を作成してもらった。予防接種証明書も健康診断書も、英語で記載する必要があり、書式は旅行会社からPDFで送られていた。5月中旬の締め切り日までに、サヤン氏はビザ申請に必要な書類一式を旅行会社へ送付した。

サヤン氏は、旅行会社から電子メール添付で送られた雛型のおかげで、予防接種証明書や健康診断書の作成作業をスムーズに行うことができた。何か疑問があれば、旅行会社に問い合わせること

もでき、その点で安心でもあった。私が2023年にサウディアラビア領事館のウェブサイトで確認したかぎり、そうした雛型は示されておらず、この雛型にはアラビア語や英語の枠内記載に加え日本語の枠外注記もあったので、旅行会社作成のものと考えられる。サヤン氏の場合、居住する地方都市に髄膜炎ワクチンを扱う病院があり、曜日や時間は指定されていたものの、ワクチン接種を数日以内に行うことができた。サヤン氏は、比較的短い時間の中でビザに必要な書類を準備できる生活環境に暮らしていたといえる。現代のマッカ巡礼は、一定の資力に加え、電子メールなどのデジタル情報リテラシーと情報インフラ、渡航条件に即応できる医療インフラに恵まれた人々にとってはアクセスしやすいものとなったが、ここには地域による情報格差・医療格差も見え隠れする。

このビザ申請書類送付のころから、サヤン氏は、カデ氏以外のごく少数の親しい友人にも大巡礼行きの予約を行ったことを打ち明け、助言を仰いだ。そのひとりが、2022年に巡礼行きを決めてサヤン氏を誘っていた関西在住の友人である。サヤン氏が申込手続き後に連絡を入れたところ、この友人もおなじ旅行会社の巡礼ツアーに参加すること、しかもおなじグループである——2023年のこの会社のハッジツアーは各40名程度の4グループからなり、2グループまとまりで出発日が1日ずれる——ことがわかった。いっしょにハッジに行こうという前年の誘いは現実のものとなったのである。巡礼ツアーでは、夫婦相部屋もできるが、基本は男女別、数人単位の相部屋（他の旅行会社のツアー客とは別部屋）である。サヤン氏とこの友人はSNSや電話で話し合い、旅行会社に、親しい友人同士でおなじグループに入っているのでできれば同部屋にしてほしい、とお願いした。結果的に、ふたりは別のインドネシア人2名とともにマッカのホテルでは同部屋となった。

ほかに、サヤン氏は、東京在住の友人ネマン氏（2023年当時40代前半、既婚）——夫の仕事の関係で引っ越したが、以前は名古屋在住であった——にもハッジ行きを打ち明けた。彼女からは、おなじ大巡礼ツアーに参加する東京在住インドネシア人夫婦を紹介された。ひとりで参加するサヤン氏に知り合いがいた方が心強いであろうという配慮からであった。サヤン氏がこの夫婦に連絡したところ、彼らもまた同グループであった。

さらに、サヤン氏のグループの中にもうひとり知り合いがいることが後日わかった。グループの引率者兼先生である。彼は、アラビア語と日本語ができるインドネシア人ウスタットであり、ツアー参加者のおおくがインドネシア人であることから、引率者として白羽の矢が立ったようである。サヤン氏は、引率者兼先生がインドネシア人であればよいと思っていた。いろいろ詳しくていねいに教えてくれるという期待からであった。また、南アジア系の先生はあまり熱心に教えてくれなかったという話を、過去に日本発巡礼ツアーに参加した友人たちから聞いていたという点もある。こればかりは旅行会社に任せるほかなかったが、旅行会社の担当者と電話でやり取りする中で、自身のグループの引率者兼先生がインドネシア人になると聞き、名前を聞いたところ、自身のよく知るウスタットであることを知った。サヤン氏は、自身がイスラームの学びをはじめたこの数年間に蓄積してきた人間関係が今回の巡礼につながっていることに、アウローの導きを感じた⁴²。

42 サヤン氏がそう感じた背景にあるエピソードに触れておく。大巡礼に行く3年ほど前、サヤン氏と夫は、死後自分たちが埋葬される墓地の候補として和歌山県のムスリム墓地があること、名古屋周辺のムスリムの遺体は一般にこの墓地に埋葬されることを知り、一度見に行こうと相談していた。晩秋のある日曜日、朝起きてから、夫が今日行こうかといったので、異論はないサヤン氏も同意し、車で出かけた。正午近くになり、昼食をどうしようかとふたりで話したが、夫がコンビニでおにぎりを買って車中で食べることにしよう、混んでいて何時に着けるかもわからないから、といった。山道に入ってからカーナビゲーションでルートが明確に示されず、木漏れ陽で見にくい中、道も細くなり曲がりくねっていたので、果たしてたどり着けるか不安に思っていると、すれ違った対向車がムスリムであることにサヤン氏が気づき、この方向で大丈夫であると考えそのまま進んだ。しばらく行くと三叉路に出た。登りの脇道と直進方向の本道のどちらか戸惑っていると、脇道から1台の車が下りてきた。乗っていたのはムスリムであった。サヤン氏が英語で尋ねると、この

サヤン氏は、巡礼行きの報告を兼ねたシュ克蘭／シュクロン (shukuran; 感謝) あるいはスラマタン (selamatan) と呼ばれる行事の開催に向けた準備に入った。スラマタンは、スンダ人やジャワ人の社会において広く見られる共食儀礼である。大巡礼でも小巡礼でも、出発前に親族や近隣など周囲の人々に巡礼行きを伝え、自らの過ちを許してもらうとともに、アウローに感謝する機会を設けるべきであり、その機会に親族・友人と共食し集団で礼拝を行うというのが、インドネシア人ムスリムの慣習である。日本在住インドネシア人ムスリムにおいては、スラマタンだけでなく、シュ克蘭／シュクロンというアラビア語の表現もつかわれる。サヤン氏も、この両方の表現をもちいていた。

この出発前のシュ克蘭は、5月28日(日)と6月3日(土)に催行された。サヤン氏の場合、親族はみなインドネシアにおり、子どもたちも自宅を離れて暮らしているので、(夫と)友人のみの集まりとなる。親しいインドネシア人ムスリムは、在住地域周辺の男女含めた友人グループと、名古屋周辺の既婚女性の勉強会グループの2つから成るが、両者のメンバーはほとんど重ならない。サヤン氏はそれぞれの主要メンバーの都合を事前に打診した結果、それぞれを分けてシュ克蘭を行うことにした。5月末に行われた前者のグループのシュ克蘭は、在住地域のインドネシア人ムスリムの定期的なプガジアンと重ねた。その中心メンバーであるウスタットが説教をする際に、サヤン氏のハッジ行きをウスタットから集まった数十人に伝えてもらい、サヤン氏が感謝を述べ、過ちへの許しを請う機会とした。このプガジアンでは、いつものように公共施設の部屋を借り、女性たちが分担し調理して持ち寄る昼食を食べ——実習生など独身の男性にとっては、インドネシアの家庭料理を味わう機会になる——、それに前後して集団礼拝を行った。もうひとつの主婦グループのシュ克蘭は、月例のプガジアンとは別に、サヤン氏の自宅で行った。どちらの会合においても、サヤン氏は、普段よりもおおくの種類のおかずをつくった。友人たちからは祝福や励ましの言葉を、経験者からは細やかな助言などをもらった。サヤン氏にとって、このシュ克蘭の無事の催行は出発前にクリアすべき重要事であった。

ビザ申請書類の送付締め切りのころから、旅行会社は、週末の夜に参加者向けの Zoom ミーティングを3回催行した。これはマナシク (manasik) と呼ばれた。マナシクは、マッカ巡礼における儀礼行為全体を意味するアラビア語であるが (水谷 2010a: 2; Esposito et al. (eds.) 2003: 190)、サヤン氏らインドネシア人ムスリムはこれをハッジに向けた「練習」の意味で受け取り、旅行会社の担当者はこれを「勉強会」といいかえていた。なお、ハッジの前の勉強会はアラビア語でタウイヤと呼ばれる (水谷 2023: 237)。このマナシクは、巡礼のルールや儀礼的手順に加え、旅程全般について学ぶ重要な機会となった。ミーティングへの参加は義務ではなかったが、ルール・禁忌・

脇道を登ったところに墓地がある、われわれはそこから帰るところだ、という。ふたりは、道に迷っていると行くべき方向が2度も示されたことに導かれている感覚を覚えた。さらに進むと、遺体の湯灌や礼拝のため墓地に付設された建物の前に出た。そこに数人のインドネシア人が現れた。この日遣族らとともにその墓地に来ていた人々であった。その中に、サヤン氏が名古屋で会った大阪在住のウスタットがいた。夫は、はじめて会うウスタットに、ふたりいっしょにこの墓地のおなじひとつの穴に埋めてもらうことを考えている、と述べた。ウスタットは墓地を案内し、建物の中も見せ、ていねいに説明してくれた。サヤン氏と夫は礼を述べ、帰途についた。その帰途、ふたりは、普段はこの墓地に人がいないこと、たまたま埋葬があったために道に迷わずたどり着けたこと、到着が埋葬直後であったためウスタット——以前会ったときサヤン氏がカリスマを感じていた人であった——に話を聞いたこと、そもそもこの日の訪問は計画的でなく、夫が(何故か)今日行こうといい、普段ゆっくり休日の昼食をとりたがる夫がコンビニおにぎりによいといったから、絶妙のタイミングになったこと、を確認し合った。その後、サヤン氏は、このウスタットが主催する行事にボランティアで参加したりウスタットの家に泊めてもらったりする中で、関西在住のムスリム女性とも親交を深めた。大巡礼で同部屋になることを相談した友人は、そのひとりであった。サヤン氏に新たな人間関係を拓いたこのウスタットが、サヤン氏の大巡礼グループの引率者兼先生であった。後日、サヤン氏は、この旅行会社のハッジツアーの引率者兼先生のひとりが参加できなくなったため、この年だけこのウスタットが代役となったことを知った。

規範を守って一連の儀礼行為をやり遂げなければハッジを完了したことにはならないので、ツアー参加者はマナシクに真剣な思いで参加した。この旅行会社主催の3回のマナシクは、英語中心の回、インドネシア語中心の回、日本語中心の回の順で行われ、いずれも2時間以上かけて、心構え、準備すべきもの、旅程の概要、マッカおよびマディーナでの行動、注意点や禁止事項などを、ツアーガイドや引率者兼先生が説明し、質疑応答をした。参加者の大半はインドネシア人であるが、日本人や南アジア系外国籍者などにもいることから、それぞれの機会の説明者がおもな使用言語を変え、適宜他言語で補足説明を加えた。とくに最後にあった日本語中心の勉強会では、この巡礼ツアーのリーダー格引率者であるアラブ人の旅行ガイドが、写真を多数入れたパワーポイント資料を駆使し、詳細な説明を提供した。サヤン氏は、夫とともに、インドネシア語中心と日本語中心の2度のマナシクに参加し、スクリーンショットでパワーポイント等の資料を保存した。

この最後のマナシクで説明された要点の一部を紹介する。①2023年は、世界中から300万人が大巡礼に参加する。コロナ前の人数に戻ったのである。これだけおおくの人々がおなじときにひとつの場所に結集するので、移動の際には待ち時間が数時間となることもありうる。②ハッジでもっとも重要なのは辛抱である。決して怒ってはいけない。つねにアッラーに任せ、助けを乞う気持ちをもつことである。③学ぶ気持ちを持ち、祈りの言葉をしっかり覚えておくことが重要である。④まずマッカでウムラを行う。マッカに1週間ほど滞在するが、この期間を無駄にしてはいけない。暑いのでホテルでゆっくりしたくなるかもしれないが、それは悪しき誘惑である。聖マスジドでの1度のサラートは他のマスジドでの10万回分に相当し、マディーナの預言者マスジドでの1度のサラートは他のマスジドでの1000回分に相当する。これらのマスジドでの礼拝に勤しむべきである。⑤巡礼期間、とくにイフラームの期間はいくつかの禁忌がある。また、巡礼においてはさまざまな規範やルールがある。ルールをしっかり守ることが大事である。

サヤン氏は、この旅行会社によるマナシクとは別に、東京渋谷のマスジドで大巡礼予定者一般のために実施されたマナシクにも別途参加した。東京在住のネマン氏から情報を得て、スマートフォンで申し込みをし、前日に出発して彼女の自宅に泊めてもらい、ともに渋谷のマスジドに行き——ネマン氏は、大巡礼1回、小巡礼3回の経験者であり、2023年春に3回目の小巡礼に行ったばかりであったが、自分もこの機会に勉強したいということであった——、実践的な説明を受け、タワーフとサアイ／シャイの練習をした。

サヤン氏は、こうした準備を進めつつ、友人たちからさらに情報や助言を得た。一部の友人からは、持っていくとよいものを教えてもらったり、直接送ってもらったりした。たとえば、ハッジ経験者から自身がつかわなくなった巡礼の際の衣服を譲ってもらったり、裁縫の得意な友人から手縫いの巡礼服を送ってもらったりした。手縫いのヒジャブを送ろうとしたが、出発に間に合わなかったもので、サヤン氏がハッジ後にみやげ物をもって家を訪れた際に、ヒジャブを渡した友人もいた。

パスポート、ビザ、旅程表、ワクチン接種証明（提出してあったもの）などは、出発の3日前に旅行会社から自宅に返却された。ビザは電子ビザであり、送られてきたのはそのハードコピーであった。また、ハッジビザにはハッジ保険（Haji Insurance）がついていた。旅行会社の説明では、脱水症状や熱中症などの際に支払いなしで点滴などが受けられる簡易保険であり、加えて一定金額まで死亡・高度障害・飛行機遅延・送還費用をもカバーする、トータルなサウディアラビアの公的保険であった。旅行会社からの小包には、祈りの成句をまとめた冊子、旅行会社のロゴ入りの袖なしジャケット——羽田空港での集合の際や巡礼中にはこれを着用するよう指示された——もあった。男性参加者には白い巡礼服（イフラーム）も入っていた。

サヤン氏は、巡礼ビザの番号、生年月日、電子メールアドレスなどのデータを、スマートフォン対応のアプリケーションである Nusuk に登録した。このアプリケーションへの登録がないと、マディーナの預言者マスジドなどでの礼拝ができないと、巡礼に先発した兄から聞いていた⁴³。Nusuk は、サウディアラビア巡礼省が観光局と協力しつつ、海外から来るハッジ・ウムロ巡礼者および同国訪問者向けに2022年10月から提供をはじめた、巡礼や旅行のトータルサポートを目指したウェブサイトである。

いよいよ巡礼出発の日である。巡礼ツアー参加者は、6月17日夜集合組と6月18日夜集合組のふた手に分かれ、日付が変わった深夜に羽田空港から飛び立った。全体の参加者の過半数——サヤン氏の印象では約8割——はインドネシア人であった。ほかにマレーシア人、パキスタン人、日本人らがいた。2023年日本発ハッジ巡礼者の大半は、この旅行会社のツアー参加者であった。以下では、このツアーの団を「一行」と記すことにする。

ここで、インドネシアから出発したサヤン氏の母と兄夫婦に触れておく。彼らもまた旅行会社が主催するフルパッケージタイプの巡礼ツアーの参加者であった。兄たちは、5月30日の深夜にジャカルタからジェッダに向けて飛び立った。当初のスケジュールでは、出発予定日はその数日前に設定されていたが、おなじグループの中に支払いが完了していない者が何名かおり、支払い済みの者は別のグループに合体して、出発日が数日あとへと変更になった。また、兄と妻のビザは問題なく下りたが、母のビザは書類に一部欠如がある——本人がサインしてない箇所があった——という連絡があり、修正手続きをしたものの、出発日である30日になってもビザが下りなかった。当日午後に彼らのグループの集合場所に行った時点で、母は自身が行けないかもしれないと泣いていたという。しかし、夜になり、グループの人々が順次バスに乗って空港への移動をはじめたころ、ようやく母のビザが担当者によってこの集合場所にパスポートとともに手渡しで運ばれ、母はぎりぎりのタイミングで兄らとともに出発できた。母と同様の問題で、ビザが出発当日になっても下りなかった若干名は、出発日をさらに2日遅らせて出発した。この2日遅れの者も含めて、帰国はみないっしょであった。巡礼においては何かあるかわからない、巡礼に行けるかどうかはアウローが決めることである、というのが、彼らの受け止め方である。

(3) マッカ到着と小巡礼

サヤン氏らの巡礼グループ約36名——男性は15名、女性21名、20代のインドネシア人女性数名を含む⁴⁴——は、もうひとつのグループとともに、6月19日午前2時ころ日本を出発し、カタールのドーハ (Doha) 空港経由でサウディアラビアのジェッダ (Jeddah) 空港に同日夕方7時ころ (日本との時差は-6時間) に到着した。若干の出発遅延とドーハ空港での約6時間の待ち時間を含め、約23時間の長旅であった。ハッジの期間は、最短10日間のパッケージ観光でしか入国できない。世界

43 兄たちの巡礼ツアーを手配したインドネシアの旅行会社は、マディーナの預言者マスジドでの礼拝の時間予約をグループ一括で行っていた。また、兄たちは、個人で Nusuk を通して予約もできたので、2度預言者マスジドで礼拝の機会を得た (ただし、母は、夜の時間帯であったため、結局行かなかった)。一方、サヤン氏の場合、旅行会社による一括予約はなく、おそらく多数のアクセスが集中したために、個人で Nusuk を通して予約をすることはできず、サヤン氏は預言者マスジド内部の「楽園の庭園」で礼拝する機会を得られなかった。

44 この20代のインドネシア人女性たちは、日本で介護士などとして働き、100万円強の資金を貯め、今回のハッジにそれぞれ単独で参加した。サヤン氏は、彼女たちを「よく考えている」と評価する。無駄遣いをせず、計画的に蓄財してハッジを実行しており、将来子育てなどが終わってからまたハッジに行くチャンスがあることを見越しているからである。サヤン氏は、やや意外なほどおおくの若いインドネシア人女性が今回の巡礼ツアーに参加している——他のグループを含めれば20人ほどいた——という印象をもったという。



写真4-1 巡礼者リストバンド
(認識番号は目隠し)

各地からジェッダ空港にきた巡礼者集団は、半数がマッカに、残る半数がマディーナに向かい、巡礼者全体がマッカに結集するハッジのピーク時（巡礼月 8 日～12 日）を挟んで入れ替わる体制を取っている。このピーク時、マッカのホテル代は 2 倍～4 倍に跳ね上がる⁴⁵（野町 2002: 119-122, 164）。

サヤン氏ら一行は、引率者兼先生の指示により、ドーハ空港でのトランジット中に——つまりは地点としてのミーカートに入る前に——沐浴し、巡礼服に着替え、タルビヤの唱和を開始した。そして、ジェッダに向かうフライト中に、

ミーカートに入った旨の機長の機内放送と引率者兼先生の指示を受け、あらためてタルビヤの唱和を再開した。しばらくして一行はジェッダ空港に到着した。サヤン氏によれば、イフラームに入った後は、感情をあらわにすることや、虫 1 匹であっても殺生することなどが、禁じられる。

サヤン氏ら一行は、空港で入国審査等を通過し荷物を受け取ったあと、日傘、礼拝用の簡易絨毯 (sajadah)、数珠 (tasbih)、それらを入れる布袋などがセットになった、巡礼者向けプレゼントをもらった。すでに日没後の礼拝時刻に入っていた。一行は、空港ロビーでスペースを確保し、日没後の礼拝を通常の 3 ラクア／ロカで行い、つづけて夜の礼拝を 2 ラクア／ロカの短縮形で行った。そして空港のターミナルビルを出た。

一行は、空港からバスに乗る際、制服を着た係官から、二次元コードと 10 桁の認識番号が記載されたリストバンド（写真4-1）と、表に名前と認識番号、裏に旅行会社名などが記された ID カードを渡された。リストバンドは入浴の際も外さないようにと指示された。そしてパスポートをこの係官に預けた。野町によれば、政府によるパスポート管理は、不法滞在・不法就労対策の一環である。巡礼者の訪問先がマッカ・マディーナに限定されているのも、そのためである。しかし、不法滞在者は後を絶たない（野町 2002: 128）。

空港はおおくの巡礼者で混雑していた。サヤン氏はバス出発までに相当な待ち時間がかかると覚悟していたが、一行はある程度スムーズにバスに乗車することができた。当初、割り当てられたバスの中央通路にスーツケースなどの荷物を置いたが、係官からそこに荷物を置いてはいけないと注意され、引率者兼先生が 400US ドルを支払って 1 台荷物用の車をその場で確保し、出発した。紅海に面したジェッダと内陸のマッカとの距離は約 70 キロメートルである。一行は、マッカの滞在先となるホテルに 6 月 20 日の午前 2 時ごろに到着した。ここで前日出発組も含めた 4 グループが揃った。156 名のツアー参加者と、リーダー格の引率者 1 名、引率者兼先生 3 名の計 160 名である。

空港やマッカの禁域、ミナーのテント村など、巡礼者を迎える場所には、ムタウウィフ／ムタ

⁴⁵ 野町は、マッカとマディーナでは「ハッジとラマダーンに依存した巡礼ビジネスが、最大の産業なのだ」と述べる（野町 2002: 122）。ただし、巡礼者を受け入れる国や社会が多大な出費を負担し便宜を提供している点は確認しておくべきであろう。サウディアラビア政府は、1 年のうち数日のみ使用するミナーのテント村に、冷房設備やスプリンクラーによる水の噴霧など、熱中症対策を施している。1997 年にテントで大火事が発生し、多数の死者が出たため、その後不燃材をもちいたテントに張り替えてもいる。この 2 キロメートル四方のテント村には 500 台の監視カメラを設置し、コントロールルームで監視している（野町 2002: 159-160）。巡礼期間以外は人が訪れないアラファトの近くに病院を建設し、巡礼期間中は救急車を待機させている。また、現地の人々も、巡礼者に飲食物を配るなど、任意の喜捨を行っている。もっとも、それがオイルマネーによる潤沢な資金に結局のところ支えられていることは間違いないが。

ウィフ (mutawwif, mutawif) という巡礼者の移送や世話を政府から委託された機関に所属する者がいる。ムタウウィフ／ムタウィフは、この機関と従事者の双方を意味する。彼らは、巡礼地案内、儀礼指導、バスやホテル、買い物ツアーの手配など、幅広く巡礼者をサポートする(大塚・小杉他(編) 2002: 488; 水谷 2010a: 214; 森 2006: 16)。また、聖地の秩序維持のためにおおくの警察官や軍人も動員され、礼拝や儀礼の時間に合わせてマスジドや聖地の入り口の門が開閉される。

ここで、サヤン氏のマッカでの宿泊施設について触れる。サヤン氏は、巡礼ツアーを申し込んだ際、旅行会社から、聖マスジドからすこし

距離があるホテルでの宿泊か、徒歩15分ほどの距離にあるマンションタイプでの宿泊か、どちらを選ぶかを訊かれた。サウディアラビア側が調整するため特定のホテル／宿泊施設を決めることはできない、といわれた。前者のホテルの方が設備はよく、掃除・ベッドメイキング・リネン交換のサービスもあり、聖マスジドにはバスに数分乗れば到着する、一方、後者の場合、Wi-Fi も掃除・ベッドメイキング・リネン交換のサービスもなく、タオル等を自分で洗濯をしなくてはいけない、ただ食事はホテルとおなじく朝夜2食付く、ということであった。ツアー金額は、この宿泊施設の違いにより4万円の差額(前者の方が高い)があった。サヤン氏が大巡礼経験のある友人たちにSNS等で相談したところ、バス移動の場合、聖マスジド近くにあるターミナルで降りて歩くことになるので、乗車時間は短くても聖マスジドに入るまで一定の時間がかかる、バスは渋滞・混雑も覚悟すべきである、一方、歩く方がそうした時間ロスや不確実性はすくない、何より聖マスジドの近くにいられるのだから、設備が多少悪くても後者の宿泊施設がよいと思う、とみなが助言した。旅行会社からはマッカ中心部の道路工事が完了してバスは以前よりも早く到着すると聞いたが、サヤン氏は後者を選択する旨旅行会社に伝えた。そもそもいいホテルに泊まることは目的でない、観光に行くのではない、巡礼と聖地での礼拝が目的である、という強い自覚がサヤン氏にはあった。関西在住の同部屋希望の友人も、おなじ考えであった。おそらくそうした希望者がおおかったのであろう、またサウディアラビア側のホテル割り当て調整もあって、結局、サヤン氏ら一行は、バス移動なし、聖マスジドに徒歩10分の場所にある、マンションタイプではなくホテルでの宿泊になった。建物は古く、エアコンも壊れかけていたが、食事はおいしく、聖マスジドからのアザーンも聞こえ、それなりに快適であった、またグループの中にはとてもいい人たちがいた、とサヤン氏はいう。サヤン氏は、巡礼出発前から、自身が怒らないよう、健康であるよう、きれいなトイレに恵まれるよう、いい友達に恵まれるよう、祈願していた。おおむねその願いのようになった、という。

なお、サヤン氏の母と兄夫婦は、聖マスジドにバスで移動する30階建てのインドネシア系資本の新しいホテルに宿泊した。マッカ滞在中、そのホテルの全宿泊者がインドネシア人巡礼者であったという。

サヤン氏ら一行は、ホテルで荷を解き、ウドゥーを取って、日の出前の礼拝を聖マスジドにて行おうとホテルを出た(写真4-2)。しかし、聖マスジド周辺はすでに人でいっぱいであり、中に入れなかった。そこで、聖マスジドの手前の道で日の出前の礼拝をした。そしてサヤン氏は友人と



写真4-2 未明のカアバとザムザムタワー

通称ザムザムタワーないしクロックタワーと呼ばれるホテルは、聖マスジドにもっとも近く、ホテルから聖マスジドに直通の通路もある。

もに朝 6 時半から開店する聖マスジド近辺のフードコートで朝食をとり、ホテルに戻った。そして SNS で連絡を受け、朝 8 時にホテル前に集合し、引率者兼先生に先導され、あらためて聖マスジドに入り、この日の午前中にウムロを実行した。旅行会社から受け取った詳細版スケジュール表では、この日にマッカ市内観光が予定されていたが、これは翌日にもちこされた。6 月 20 日の小巡礼実行は当初の予定通りであった。

サヤン氏にとって、はじめて入る聖マスジドである。その門前に立ったとき、感激で涙が止まらなかったという。そして「アウロー・アクバル！」（アウローは偉大なり）と思わず口にしたという（cf. 大塚・小杉他（編）2002: 26, 600）。

サヤン氏は、マナシックであらかじめ説明を受け、一部の儀礼行為の練習もしていたので、聖マスジド内での儀礼行為の段取りは頭に入っていた。まず、（タルビヤとはまた別の）特定の祈りの成句を唱えながら、聖マスジドに右足から入った。そして、カアバの東角にある黒石を出発点として 7 回、反時計回りにカアバの周りをまわった（タワーフ）。車椅子利用者は、カアバからは遠くなるが、カアバを囲む建造物の二階にある専用通路を周回する。一般の巡礼者は、地上階で、カアバを間近に見ながら、可能であれば黒石に右手で触るか接吻をしてカアバをまわる。サヤン氏は大混雑の中で、外から入っていきなりカアバに近づき触りに行くことはあきらめ、友人や先生役の指南どおり、はじめは外周をまわり、途中で内側の人波の中に徐々に入っていき、また外側に徐々に移動するという方法を使った。タワーフの際、男性は右肩を出す（idhibā）。サヤン氏は、本来 3 周までは男性も女性も速足（raml）でまわるものと聞いていたが、大巡礼の時期でのタワーフは大混雑するので、速足でまわることは難しかった（cf. 水谷 2010a: 60-61）。むしろ、周りの人々から押されたり、巻き込まれて離れていったりしないよう、グループの女性同士たがいに手を握り合ってタワーフを行った。サヤン氏は、タワーフの間、家族の幸福や世界の幸福を祈願した。7 回まわる中で、サヤン氏は毎回、黒石のところで遠くから掌に接吻をしてこれを黒石に向けて放った。また、黒石からカアバの扉の前までの間でとくに心を込めて祈願をした。これは、あるウスタットのオンライン講話から学んだ点である。そして、私のタワーフを受け取ってくださいとアウローに祈願した。

次に、北東方向に移動し、マカーム・イブラーヒームの近くで 2 ラクア／ロカの礼拝を行うところであるが、混雑しているのでこの場所をあきらめ、ザムザムの泉の場所とサアイの廊（図 4-1）の間にすこし空いている場所を見つけ、ここで 2 ラクア／ロカの礼拝をした。次に、ザムザムの泉から湧き出る水を飲んだ⁴⁶。

次に、サアイ／シャイ（sa'y）儀礼を行った。マルワ（al-Marwa）の丘でサアイ／シャイを行う意志表明をし、マルワからサファー（al-Safā）の丘へとサアイの廊を通って行く（図 4-1・写真 4-3）。現在この通路は、マルワ方向・サファー方向それぞれ 1 階・2 階・屋上の 3 層あり、多数の巡礼者の行き来を可能にしている（cf. 野町 2002: 92）。冷房も完備し、車椅子利用者専用の通路もある。マルワからサファーに着くと、カアバの方を向いて祈願をする。そして、サファーとマルワ間を、祈りの成句を唱えながら 7 回行き来（3.5 回往復）する。特定の祈りの成句はあるが、覚えていない者は通常の祈りの成句でよい。2 つの丘は、実態としては大岩であり、周囲を柵で囲われてい

46 巡礼者は、聖なるザムザムの水を水筒などに入れて持ち帰り、マッカ滞在期間はおっぱらこれを主たる飲み物とする。マッカにいてミネラルウォーターやジュースを飲むのは「もったいない」のである。ザムザムの水は、販売目的で国外に持ち出すことはできないが、巡礼者が個人的に持ち帰ることは問題ない。サヤン氏らは、帰途のジェッダ空港でひとり 5 リットルのザムザムの水を政府からプレゼントされ持ち帰った。サヤン氏の母たちも帰途のジェッダ空港で同様にザムザムの水を受け取り、インドネシアに持ち帰った。

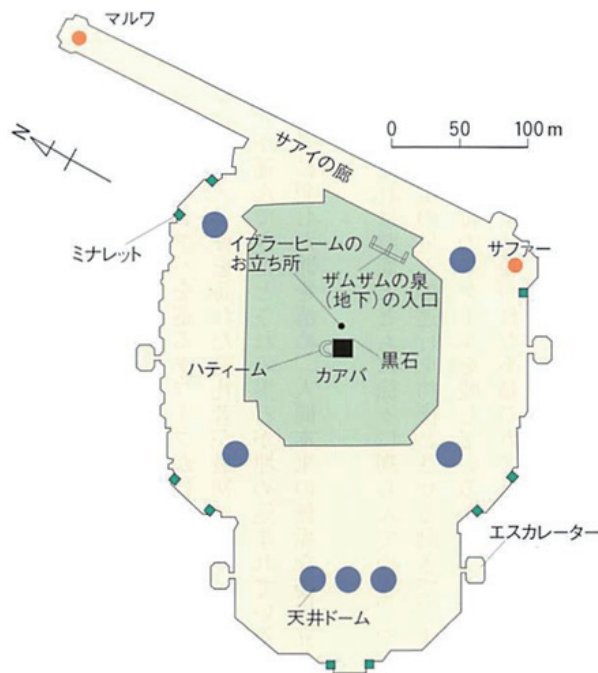


図4-1 聖マスジド略図（町野 2002: 83）

聖マスジドはカアバを取り囲む構造になっており、礼拝スペースにミフラーブ（mihrāb; 礼拝方向を示す壁の窪み）はない。一般信徒には開かれていないが、カアバの内部で礼拝する場合、どの方向を向いてもかまわない。大巡礼中、カアバの下部は白布で覆われる（野町 2002: 96, 106–110; 大塚・小杉他（編）2002: 307, 948）。



写真4-3 サアイ廊内を移動する巡礼者たち

る。なお、サアイ／シャイを行っている間に仮に放屁しても、新たにウドゥーを取り直してサアイ／シャイをやり直す必要はない。一方、タワーフの場合、放屁すればウドゥーを取り直す必要があるが、途中でウドゥーを取ってやり直してもその回から再開すればよい。サヤン氏は、これらのことをオンラインのプガジアン等により知っていた。このタワーフやサアイ／シャイ、つまりウムロは、巡礼中何度も行ってよい（cf. 大塚・小杉他（編）2002: 236–237, 384, 411, 415, 487–488, 624, 905, 936）。サヤン氏の兄は、ミナーから帰った後に、マッカに来ずして亡くなった父・祖父・祖母の分のウムロを代参として行った（脚注30参照）。

これら聖マスジドにおける一連の儀礼行為を終えるのに、サヤン氏らは1時間半ほどかかった。このあと、男性は髭と髪を剃り落とし、女性は髪の毛をすこし切る（*tahlu*）。サヤン氏らは聖マスジド内のベランダに移動し髪を切ることにした。すでに散髪／剃鬚を済ませた者に切ってもらわなければならないが、サヤン氏らはみないっしょに行動していたので一行の中に誰も髪を切れる者がいない。サヤン氏らは近くにいたマレーシア人女性にお願いし、彼女にまずサヤン氏が髪を切ってもらい、そのあと髪を切った者が順次仲間の髪を切っていった。このあとミナーでも剃髪があるので、一行の男性は剃髪を後日にとっておき、聖マスジドでは髪をすこし切るにとどめた。

以上が、ウムロの概要である。ここでイフラームの状態からいったん外れる。男性はホテルに戻って巡礼服から通常の服装に戻った。

サヤン氏らは6月25日（巡礼月7日）の夜までマッカに滞在した⁴⁷。この間、それぞれは聖マス

47 大巡礼と小巡礼をセットにした巡礼ツアーでは、マッカに行って小巡礼と大巡礼をし、そのあとにマディーナに行く旅程と、先にマディーナに行ったあとにマッカで小巡礼・大巡礼をする旅程の2パターンがある。サヤン氏の巡礼ツアーのマナシクでは、巡礼としてはどちらもありうるが、小巡礼そして最大の目的である大巡礼を済ませたあとに「ストレスのない」状態でマディーナに行く方が、リラックスした旅を楽しむことができるのでいいと思う、という話であった。また、サヤン氏ら一行は巡礼月2日にウムロを行ったが、これ以降はマディーナからマッカに来た人々がウムロを行うために聖マスジドの混雑がさらに激しくなったことを、日々礼拝に通っていたサヤン氏は実感しており、この点でも先にマッカでウムロができたことはよかった、と夫に語っていた。

ジドで礼拝したり、空き時間に散歩・買い物・市内観光をしたりして過ごした。

6月21日には、朝食後にグループ一行でバスによるマッカ観光を行った。まず、6月25日から数日を過ごすことになるミナーの谷に行き、降車してテント村の状況を見た。テント村はまだ準備中であり、自分たちが宿泊するテントの位置は確認できなかったが、テントの一群の後方にジャマラト陸橋を確認することはできた。このミナーの谷のテント村は、大巡礼期間以外は稼働することなく、人もおらず閑散としている。

次に、ジャバル・アル=ヌール／ジャバヌール——預言者ムハンマドがアッラーから最初の啓示を受けた場所——に比較的近いところにある博物館（Museum Al Wahyu）に行った。2022年に稼働をはじめたこの博物館では多数のみやげ物店があった。館内は飲食物の持ち込みが禁じられているので、サヤン氏はまずカフェに入って休息してから、預言者たちに関する展示やイスラームの歴史に関する展示を見た。中でも印象に残るのは、布に糸と針で女性が縫い書きした初期の「クルアーン」であった。そしてジャカルタにいる弟や近親そして日本の家族と友人のためのみやげ物（アクセサリー、礼拝用絨毯、数珠など）を買った。また、6冊が1セットになっている寄付用の「クルアーン」を、1セット400リヤル（当時1リヤル＝約40円）で買った⁴⁸。そして一行は昼前にホテルに戻った。あとは自由行動であり、それぞれ分かれて昼食をとった。

事前に行われた旅行会社のマナシクでは、マッカ滞在中は時間を浪費しないで聖マスジドでの礼拝に勤しむように、と教えられていた。サヤン氏は、その助言を守って、朝や夜は聖マスジドで日々の礼拝を行い、午後の礼拝はホテルで行う、という日々を過ごした。昼食用の飲食物を市場などで購入することをのぞき、買い物や散歩をしたいといった気持ちは、不思議と湧いてこなかった。ただ、ツアー参加者の中には、散歩や買い物、聖マスジドを取り囲む一帯に展開する多数のフードコートやカフェを頻繁に利用する者もいた。

また、サヤン氏は、短い時間であったが、母や兄夫婦と会うことができた。事前にたがいの宿泊先の名前は教え合っていたが、夫や近親男性の同伴者がいないサヤン氏がひとりで自由に兄や母のいるホテルを訪れることは難しい。兄の妻からは、私たちがあなたのホテルに行く、という SNS の事前連絡があった。母たち3名は、ジェッダ空港から先にマディーナに行く旅程であった。マッカには6月21日に到着し、翌22日の日の出前に聖マスジドでウムロを行ったあと、昼前にサヤン氏のホテルを訪れた。サヤン氏は、日本を発つ前、先発してマディーナに滞在中の母と SNS のビデオ通話で何度か話をしていて、その中で、サヤン氏は、母がインドネシアから履いてきた靴が合わず、痛みがあり、サンダルを履いて出かけていること、暑さと砂風対策用に持ってきた帽子が壊れてしまったことを、聞いていた。そこで、日本出発前日と当日に、母のために歩きやすい靴とつばの広い帽子を買い、マッカにもって来ていた。母は、これらとおおきめの水筒をサヤン氏から受け取った。履き慣れるためということで、さっそく靴を履いて帰ったという。

(4) 大巡礼（マッカ郊外へ）

サヤン氏らのグループ一行は、6月25日夜の礼拝後、ふたたびイフラームに入った。そして、

⁴⁸ サダカ (sadaqa) はこうした任意の寄付や広く慈善行為一般を指す (大塚・小杉他 (編) 2002: 398-399)。マッカとマディーナの両聖地におけるサダカはパハラが増えることとされ、奨励される。サヤン氏は、マッカでは5リヤル紙幣をいつもポケットに用意し、道を教えてくれるなど、助けてくれた相手、痩せた子どもを背負った母親、町の物乞いらに、意識してサダカを行った。もっとも、サヤン氏はサダカをこれ見よがしに行うことはよくないという認識をもっている。たとえば、夫の目の前で夫の親に親切にふるまうべきではなく、夫が見ていないところで親切にすることが本来あるべきサダカの考え方である、という。

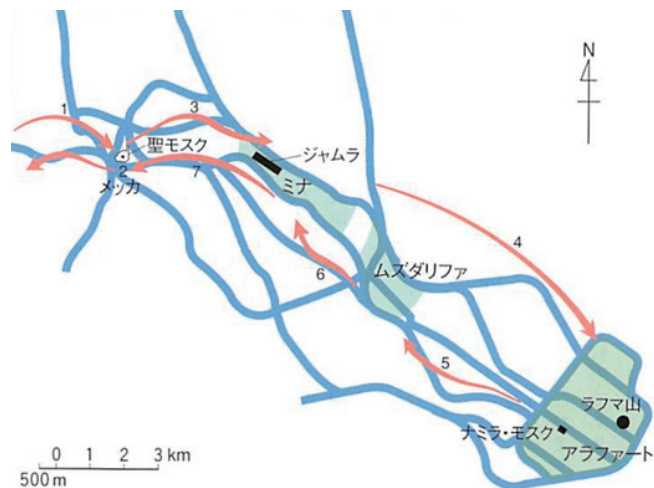


図4-2 大巡礼の行程
(野町 2002: 131)



写真4-4 ミナーでの食事メニュー（朝・昼）

ミナーでの食事は日替わりメニューのバイキング形式である。写真は、ある日の朝・昼のメニューがインドネシア語で書かれたチラシであり、裏面には夕食メニューがある。チラシは食事を取るトレイにおかれる。食事提供場所はテント脇にあるが、椅子とテーブルはなく、巡礼者は外に出たりテントに持ち帰ったりして食べる。なお、白飯（NASI PUTIH）と書かれているが、実際はビリヤニである。一部の料理名のスペルには誤りがあり、業者がインドネシア語にあまり詳しくないと推察される。

日付が変わった深夜1時に手荷物だけをもってホテルを出発し⁴⁹、タルビヤを唱えながらバスでミナーの谷に向かった。6月26日（巡礼月8日）～6月30日（巡礼月12日）は、ミナーとアラファト周辺が巡礼行為の舞台となる。この期間、マッカ、ミナー、アラファト、ムズダリファ間はバスで移動できる。ただし、予約の手配をしっかりとっていない旅行会社もある。また、巡礼者の中には自らの意思で徒歩を選ぶ者もいる。サヤン氏ら一行の場合、現地の助手の協力もあり、ツアー全体を通して移動手配に漏れはなかった。

巡礼月8日は「水調達の日」（Yaum Tarwiya）と呼ばれる。この日は水分を補給し、翌日のアラファトでの苦行に備える（水谷 2010a: 63）。2キロメートル四方にわたるミナーの谷は、政府が用意したテントで埋め尽くされている。テントには出発国の国旗——サヤン氏らの場合は日の丸——と番号が示されており、日本発グループのテントはまとまっていた。サヤン氏ら一行は、男女に分かれて各自の指定テントに荷物を置いた。テント内は冷房がかかっているが、雑魚寝である。旅行会社はシュラフの携行を勧めていたが、サヤン氏は大巡礼経験者の友人たちからシュラフは不要と聞いていたため、インドネシアの腰布（サルン）と薄いダウンジャケットで代用した。ミナーとアラファトでは飲み物・食事が政府から提供される（cf. 野町 2002: 141, 159）。サヤン氏は、ミナーではおもにインドネシア料理を食べた（写真4-4）。ミナーとアラファトの徒歩道中では人々から

49 事前のマナシクでは、ミナーとアラファトではかなり歩くので、荷物はキャリーケースではなくリュックにし、礼拝時の小絨毯（sajadah）も不要である等の助言があった。

水をもたらした。一行は、昼過ぎの礼拝から夜の礼拝までと翌9日早朝の日の出前の礼拝の計5礼拝を、それぞれの適切な時間帯の中で、短縮形（2ラクア／ロカ）で行った。

この8日の夜、サヤン氏と友人たちは、テントの外でそれぞれひとり分のクッションを下に敷いて寝ているインドネシア人女性の集団を見た。訊くと、彼女たちはインドネシアから出発した巡礼ツアー参加者であったが、手違いでテントが割り振られなかったため、外で寝ているという。しかし、彼女たちは怒ったり不満をもったりはしていなかった。ここまで来られただけでも幸せである、と述べていたという。サヤン氏の友人たちは、飲食物が足りないインドネシア人巡礼グループがいると聞き、飲食物を届けにもいった。

サヤン氏の母のテントはジャマラト陸橋から近いが古く、クーラーが壊れており、トイレも汚かった。サヤン氏のテントは陸橋からは遠いが比較的新しく、クーラーもよく効きトイレもきれいであった。サヤン氏らは列をつくってトイレを利用したが、他国からの女性グループの中には並ばずにトイレに押しかけ、清掃担当者から注意を受ける者もいた。

巡礼月9日（6月27日）はアラファの日（Yaum Arafah）と呼ばれる。全巡礼者たちは朝食後に、約5キロメートル離れたアラファトに昼までに到着すべく移動する。サヤン氏らはバスであったが、母たちはバスが手配できずに歩いた。ミナーとアラファトの間には2000年の時点で8車線の自動車道路と2本の歩行者専用道路があり、巡礼者の移動方向に合わせた一方通行となるが、道中は相当な混雑となる。そのため通れる車は10席以上のものに制限される。マッカの大半の車が動員される（野町 2002: 132, 144-146, 187）。

アラファトには聖マスジドに次ぐおおきさで40万人の礼拝者を収容できるナミラ・マスジド（Mesjid Namirah）がある。ただ、大巡礼の際には大半がマスジドの中に入れない。「別離の巡礼」の際、預言者ムハンマドは巡礼月9日にこの地で正午と午後の礼拝を短縮形で行った。現代の巡礼者たちもここに集まり、ナミラ・マスジドからの説教を聞いたあと礼拝を行う。サヤン氏たち一行はマスジドの近くに場所を取れず、説教も聞けない場所になった。引率者兼先生は、ラジオでインドネシア語の説教を聞くこともできるが⁵⁰、周囲に音漏れしないよう、イヤフォンをつかうよう注意した。また、引率者兼先生のひとりが、サヤン氏ら一行のために英語と日本語で説教をした。この説教後、これまで犯した罪を悔いあらため、アウローに許しをもとめ、祈願し、正午過ぎと午後の礼拝を短縮形でつづけて行った。ナミラ・マスジド周辺一帯を埋め尽くす人々は一斉にカアバの方を向き礼拝した。そのあと、サヤン氏は、誰とも話さず——中には話をする者もいたが——、スマートフォンに入れておいた「クルアーン」の「イブラーヒームの手紙」の箇所を読んだり、家族の幸せを祈願したりした。この時間、おしゃべりなど信仰とは別の行為をしてはいけない。食べても寝てもいけない。この礼拝・祈願と沈黙の中でひたすらアッラー／アウローと向かい合うのがウクーフである。ウクーフはハッジの肝と理解されている（cf. 大塚・小杉他（編）2002: 79, 194, 487-488; 野町 2002: 133）。

巡礼者たちは日没後にアラファトを出発してムズダリファの谷に向かった。サヤン氏らはバス移動である。アラファトを日没前に離れてはいけないとされる。この移動の際、飲食は許される。このときもタルビヤを唱える。ムズダリファ到着後、速やかに日没後と夜の礼拝を短縮形でつづけて行う。この2度の礼拝は、ムズダリファに未到着でも真夜中までに行うべきものである。サヤン氏らは夜11時ころ到着し、礼拝後によりやく休息をとった。飲食も睡眠も可である。巡礼者たちは、

50 ナミラ・マスジドにおける主要な説教はラジオで流される。そのあとに各国語の説教が20分程度行われる（水谷 2010a: 214-215）。



写真4-5 アラファートの昼食（巡礼月9日）

調理設備がないアラファートでは弁当が提供された。 Grillチキン、ピリヤニ、せんべい、チリソース、パイ、果物、水であり、おかわりも可能であった。



写真4-6 ムズダリファ

政府が用意した絨毯の上に持参のシュラフや敷物を敷いて寝そべった。サヤン氏は、キャンプ用のアルミニウムの敷物を敷いて横になったが、熱をもつ地面の上であまり寝られなかった。飲み物・食事・菓子等が提供され、サヤン氏もこれらを口にした（写真4-5, 4-6）。サヤン氏らは日本からおおきなごみ袋を持ち込んで、自分たちのごみをまとめた。こうした配慮をする人々は日本出発組だけであった。数時間の休息後、日の出前の礼拝を行った。この礼拝は午前4時前のアザーンに合わせ、礼拝時刻が来たらすぐ行うべきものとされる。遠くに聖マスジド脇に立つザムザムタワーの時計台が見えた。このとき祈願をする者もいる。なお、子どもや女性、体調に不安がある者らは、夜半を過ぎた段階でミナーに戻ってテントで休息できる。サヤン氏の母は早朝の礼拝後にバスでミナーのテントに帰った。

巡礼月10日（供犠の日）、日の出前の礼拝をしたのち、巡礼者たちはタルビヤを唱えながらムズダリファからミナーに戻った。サヤン氏らはバス移動である。日の出前に出発すべきとされる。サヤン氏らはミナーのテントに朝7時前に到着し、朝食をとった。なお、本来は投石儀礼でつかう石を各自が前日にムズダリファで拾っておくのであるが、ムズダリファ到着時に指先大の石80個を入れた袋を渡された。ただし、巡礼者の中には、ムズダリファで自ら石を拾う者もいた。

サヤン氏ら一行は、朝9時に集合し、1時間ほど歩いてジャマラト陸橋に移動した。そしてシャイターン（サタン）を象徴する3つの石柱ジャムラ（jamra）のひとつに向かって7回石を投じた。預言者ムハンマドにならい、この日はイブラーヒームが投石した一番西にある石柱だけへの投石である。巡礼月11日～13日は3つの石柱すべてにそれぞれ7回投石をする。現在、石柱は3つとも50メートル近い幅広の石壁状になっており、それぞれ200メートルほどの間隔をあけて聳え立っている。陸橋自体が2007年に大型化・多層化され、多数の巡礼者が4階建ての陸橋の計5層にそれぞれ分かれて巨大な的に投石できるようになった。サヤン氏らは、引率者兼先生の巧みな先導により、石壁に近い人があまりいない前方スペースに入った。サヤン氏はすべての投石の日に前方で石を壁にぶつけることができた。ただし、前方は後方から投げられた石が人に当たることもあって危険である。またこの陸橋に向かう道路も危険である。多数が同時に押し寄せるので、2015年には717名、2005年には345名の死者を出す圧死事故が起きている（大塚・小杉他（編）2002: 465; 野町 2002: 151-155; 水谷 2010a: 211-212）。

この巡礼月10日は犠牲祭（ʿīd al-adhā）の日である。世界中のムスリムが供犠（クルバン; Qurban）をする。大巡礼者はミナーで動物を供犠するが、現在は各自が行うものではない。サウディアラビア政府がミナーに建設した大屠場で屠られるヒツジ・ヤギ・ラクダなど50万頭以上の

供犠獣を、ミナーに集う巡礼者、政府、企業などが喜捨により集団で購入する体制になっている。サヤン氏ら一行は、ウムロ 2 日後の 6 月 22 日に、引率者兼先生に各自 2 万円または 500 リヤルの支払いを済ませていた。供犠獣の肉の一部は巡礼者の食事にも供されるが、大半は冷凍倉庫にいったんストックされ、パックにされて聖なる肉としてイスラーム圏の貧者に送られる（野町 2002: 158-162）。2023 年もこれまでと同様に、イエメン、ソマリア、スーダンなどに肉が送られた。

犠牲祭の日は、ムスリムにとって有数の祝日である。野町は、ミナーに世界各地から集まったムスリムたちがそれぞれの一張羅や民族衣装をまとい、大巡礼の主要行事を終えた解放感を味わうことに触れている（大塚・小杉他（編）2002: 146, 488, 916; 野町 2002: 156-161; 水谷 2010a: 213; Esposito et al. (ed.) 2003: 104）。サヤン氏ら一行はそうした祝いの光景を目撃することはなかったが、この日陸橋に向かう道中、いつもであればタルビヤを唱えるところ、人々がアッラーへの感謝を口にしていたことに、祝いの日を実感した。

さて、クルバンのあと、剃髪ないし散髪し、イフラームを解いたのち、いったんマッカに戻って聖マスジドで「大挙のタワーフ」と呼ばれる 2 度目のタワーフを行い、ふたたびミナーに戻るというのが、預言者ムハンマドの「別離の巡礼」を踏襲することになる。しかし、第 3 節第 3 項で触れたように、現在、巡礼はこれと異なる順序で行うべきとされている。すなわち、クルバンのあと、マッカに戻って聖マスジドで 2 度目のタワーフを行い、聖マスジドあるいはミナーで剃髪・散髪し、イフラームを解くのであり、このあとふたたび陸橋で投石儀礼を行うのである。ともあれ、剃髪・散髪してイフラームを解けば、巡礼者は、香水をつけたり香りのある石鹸をつかったりするなど、イフラームの期間禁じられていた行為を許される。ただし、夫婦間の性交やキスはまだその禁を解かれない。これを含むすべての禁が解かれるのは、巡礼期間が終わった巡礼月 13 日（前日の日没後）からである。ただし、聖マスジドでの 2 度目のタワーフが 13 日になる場合はその終了後である。

巡礼月 10 日に「大挙のタワーフ」を実行する巡礼者は一定数いる。ただ、翌日以降でも問題はない。現在、どの巡礼集団がいつミナーからマッカに戻ってこのタワーフを実行するかはサウディアラビア側（ムタウウィフ）に委ねられている。サヤン氏らの場合、マッカへの移動日は当初の予定日より 1 日早い 12 日になった。いずれにせよ、10 日の投石儀礼後はミナーのテントに戻る予定であった。しかし、ある引率者兼先生は、4 グループ一行全体に、もし本日聖マスジドに戻ってタワーフを行いたいのであればいっしょに行こう、と提案した。ただし、この日帰りタワーフは予定にない行動となるため、バスはなく徒歩となる。これに参加したメンバーは 4 グループ全体の 1/4 程度であった。その中にサヤン氏もいた。彼らは、陸橋での投石後、そのまま 2 時間ほど歩いて聖マスジドに向かった。当の引率者兼先生 1 名が先導し、地元出身の助手 1 名が近道を案内した。

聖マスジドには、正午過ぎの礼拝の時間に入ったころ到着した。女性用の礼拝スペースはがら空きであった。大半の巡礼者はまだミナーにいたからである。このときサヤン氏は、普段にも増して礼拝スペースの清掃の際に建築物に付与される芳香を感じながら礼拝をした。また、普段は厳しく硬い表情の聖マスジド内の警備・守衛者らが、このときはマッカ郊外でのウクーフなどをやり遂げてふたたび聖マスジドに戻ってきた巡礼者に優しいまなざしを向けていることを感じた。そして、彼らの「ハッジ・マブルール」（hajji mabrūr; ハッジを成し遂げましたね [おめでとう!]) というひとことに、サヤン氏らは「シュクロン」（ありがとう!）とお礼を返した。そしてカアバを 7 回まわった。多くの人々がタワーフを行っていたことや参加者に多数の女性がいたことから、引率者兼先生は速足でと指示せず、7 回とも歩くペースであった。そしてマカーム・イブラーヒームの周辺で 2 ラクア／ロカの礼拝を行い、ザムザムの泉の水を飲み、サアイ／シャイをした。サヤン氏は

そのあと聖マシドの外で髪を切ったが、この日タワーフに参加したメンバーの中にはミナーに戻ってから剃髪・散髪をした者もいた。なお、一行の中でこの日のタワーフに参加しなかった者は、巡礼月12日にミナーからマッカに戻った夜に「大挙のタワーフ」を行った。サヤン氏の母らも、12日にマッカに戻って、その夜にタワーフを行った⁵¹。

サヤン氏らは、ふたたびミナーに戻り、巡礼月12日もしくは13日まで石投げの儀礼を行うことになる。ただ、この10日夕方以降はマッカからミナーに向かうバスやタクシーはなくなる。そのため、サヤン氏らは夕方6時にマッカの宿泊ホテルで待ち合わせ、バスでミナーに戻ることを申し合わせていた。ところが、この集合を守らない者がいた。何名かは夕方車がなくなることを恐れ、引率者兼先生ら誰にも告げず、先にタクシーでミナーに戻ってしまった。中には、旅行会社から巡礼中着用するよう指示されていたロゴ入りジャケットを脱いで——つまりは日本発の巡礼者であることを隠して——、インドネシア政府がインドネシア人巡礼者用に用意した無料バスに乗る者もいたようである。また、写真撮影などに時間を費やし、約束の時間に遅刻する者もいた。集合場所に来ないメンバーを待ち、すでに夕方6時を過ぎて、バスやタクシーの手配は難しくなった。ミナーにいるリーダー格のガイドからは、マッカに戻った参加者に同伴した引率者兼先生に、この日の夜12時までにミナーに戻らなければハッジをやり遂げたことにならず、翌年以降またやり直す必要がある、何とか帰ってくるように、という電話もあった。この電話を受け、マッカに取り残され、巡礼の完遂に暗雲が垂れ込めたと思ったメンバーのおおくは若干パニックに陥った。サヤン氏は、ハッジが完遂できないかもしれないと聞き、100万円強を支払い送り出してくれた夫の顔が思い浮かび、申し訳ない気持ちでいっぱいになったという⁵²。結局、同行した引率者兼先生が自身のネットワークをつかって知人に連絡し、夜になって何とかバス1台をチャーターすることができた。メンバーはマッカを出発し、夜11時半過ぎにミナー近くのトンネル前まで来たが、あとは車が入ることができないエリアであったので、全員が走るようにして、何とか12時前にテント村の門内に入った。早く入っておいでと、門内から旗を振るインドネシア人巡礼者もいたという。サヤン氏らは、テント村に入ったところで、温かい食事と飲み物をもらった。

巡礼月11日（6月29日）と12日（6月30日）、サヤン氏らは投石儀礼を行った。そしてテントで食事を取り、毎日の礼拝を行った。巡礼月11日には、引率者兼先生がテントで男女別に日本語・英語・インドネシア語で説教を行い、ツアー参加者からの質問を受けた。12日は、ミナーでの昼食後、午後の2度の礼拝をつづけて短縮形で行い、投石儀礼後にテントで食事の提供に尽力してくれた人々へのチップをグループで集めて渡したあと、マッカのホテルに戻った。テントの荷物は、陸橋に行く前にあらかじめまとめておくよう指示があったので、テントからマッカへの帰途はス

51 サヤン氏の母は、おなじ巡礼グループの高齢者メンバーと計4人で、兄夫婦やグループの他メンバーとは別に、巡礼月10日の早朝にムズダリファからミナーのテント村にバスで帰った。ムズダリファで眠れなかったこともあり、この日の投石儀礼には参加しなかった。兄は、11日以降の投石も、無理をしなくてよい、自分が母の代役になって投石できると助言したが、母は11日・12日の投石儀礼に参加し、テント村と陸橋の間を歩いて往復した。

52 夜12時までにミナーに戻らなければハッジが不首尾に終わるという電話の内容は、参加者にできるだけ完全なかたちでの巡礼を成し遂げてほしいという配慮に由来する、リーダー格のガイドによる厳しい指示であった。2023年11月に、サヤン氏に依頼して当のリーダー格引率者に確認していただいたところ、夜12時を過ぎても夜のうちにミナーに戻れば問題はない、夜12時というのは自分の付け加えであった、と述べた。移動手段がかぎられるのでできるだけ早く帰ってきなさい、という趣旨を、彼は夜12時という表現に込めたと考えられる。この日のタワーフとミナーへの帰還を提案した引率者兼先生は、電話を受けた際、あまり動揺の色を見せず、むしろ困惑していたようにサヤン氏は受け取っていたが、それは、夜12時までにミナーに帰れなければハッジが失敗におわりと認識していなかったからのようである（ただし、彼はそのことをタワーフ参加者にはいわなかった）。巡礼からひと月後、サヤン氏があるウェブ上ブガジアンでウスタットに念のため再確認したところ、ウスタットは、ミナーに戻ることはむしろ大切であるが、この日中にミナーに戻らなければならないわけではなく、夜12時がデッドランとなることもない、と回答した。



写真4-7 ザムザムタワーの礼拝所から
聖マスジドを見下ろす

ムースであった。

ハッジに関する行事は終わり、巡礼者たちもマッカから去りはじめ、町も落ち着きを取り戻しはじめた、とサヤン氏は感じた。これまでサヤン氏は、散策などを一切せず、買い物もほとんどせず、礼拝と祈願に専念してきた。こうした日々を過ごすのは、7月2日（巡礼月14日）が最後であり、その翌日にはマディーナに出発する。サヤン氏は、7月1日（巡礼月13日）の早朝、いつものように聖マスジドに歩いて入り、日の出前の礼拝を行った。このとき、サヤン氏は、アウローに、もう一度母にマッカで会いたい、と祈願した。

スマートフォンを部屋に置き忘れていたサヤン氏がホテルに戻ると、サヤン氏を待っていたかのように、兄の妻からのSNS メッセージが入ってきた。聖マスジドの第〇番のゲート近くにあなたのホテルがあると聞いていたが、その近くに

いま3人である、という連絡であった。サヤン氏は、すぐにホテルを出て近くの店舗（ケンタッキー）前で落ち合い、母と兄夫婦にふたたび会った。母にもう一度マッカで会いたいと思って早朝の礼拝でアウローをお願いしたところだ、という、母は私も会いたいと祈願していたと述べた。

サヤン氏ら4人は、すこし遅めの朝食をともにし、ひとときを過ごした。それから4人はザムザムタワーを訪れた。サヤン氏は、この超高級ホテルの中に入りたいと思っていた。母も同感であった。中に入ると、ショッピング街である低層階よりも上は宿泊者でなければ行けないことがわかった。そこにたまたま通りかかった宿泊客であるインドネシア人夫婦が⁵³、サヤン氏の母を気にかけてか、よかったらいっしょに上がっていきましょうといってくれた。そしてサヤン氏らを自分の家族であるとホテル従業員に告げ、エレベーターに乗せてくれた。サヤン氏ら4名とこの宿泊客夫婦の計6名は、タワー上層にある宿泊客用の礼拝所に入った。礼拝所は男女別であり、兄らと分かれ、この宿泊客女性とともに入室したサヤン氏・母・兄嫁は、聖マスジド内のカアバを眼下に見下ろす極上の眺望を礼拝所で体験した（写真4-7）。10分ほどして男女それぞれの礼拝所から出て合流し、宿泊客夫婦の部屋でトイレを借りたあと、サヤン氏ら4名は彼ら夫婦に礼を述べてホテルをあとにし、聖マスジドでウドゥーをとって正午過ぎの礼拝をともにした。そして4人でサヤン氏のホテルに戻った。こうして、ザムザムタワーの内部見学と母と手を取り合っの聖マスジドでの礼拝という、巡礼出発前にサヤン氏が望んでいた願いは、ハッジとともに達成された。後日のインタビューで、サヤン氏は、これもルズキ（rizki, rezeki; アウローからの贈り物）であり、アウローのおかげである、と涙ながらに述べていた。

ところが、このとき母は熱中症気味であった。サヤン氏は、自身のホテルに戻ったときにそのこ

53 このインドネシア人夫婦は、ハッジ・フロダ（Hajj Furoda）と呼ばれる高価なインドネシア発巡礼ツアーの参加者であった。このタイプの巡礼ツアーは、インドネシア発としては短めの21日間が標準日程で、ひとり分の価格は約450万円程度である。高額であるが、ビザ制限枠の外にあって待機なしですぐ行けるため、信仰心の篤い富裕層の需要に合致する（cf. Utomo, Scott & Jin 2019: 58）。また、彼ら夫婦は今回が5または8回目——この点はサヤン氏の記憶があいまいであった——のハッジであり、ミナーには行かずザムザムタワーに宿泊していた。何度もハッジを経験した富裕層においては、こうしたハッジ期間の小巡礼的旅行もありうるであろう。ただし、サヤン氏は、後日あるウスタットがウェブ上ブガジャンで、そのような贅沢なお金のつかい方をするなら、戦争中のパレスティナにお金をまわした方が得られるパハラはおおいであろうと述べていたのを視聴した。インドネシアからハッジに行きたくとも行けずに待機する多数の人々のことを考えれば、まだ行けない人々にフライトを譲る考え方もあるだろうと、サヤン氏の夫も語っていた。

とに気づいた。ホテルのロビーのソファを借り、サヤン氏は、自分をもってきていた冷感湿布を張ったり、首・脇・鼠径部などに冷たいペットボトルを当てたり、軽いマッサージをしたりして、しばらく母を見守った。昼食は兄にピザを買いに行ってもらい、ホテルのロビーで食べた。サヤン氏は、すこしのピザと自身が日本から持ってきたビスケットを母の口に入れた。相部屋なので、部屋に連れていって休ませることは控えた。幸い、しばらく眠ったあと母は回復した。母の希望もあり、サヤン氏は、自分のホテルの部屋に空きがあれば、ツインの別の部屋をとって母と1泊または2泊できないかとフロントに訊いたが、あいにく満室であった。母と兄夫婦は、夜の祈りのあと、夕食用のインドネシア料理を近くで買って——兄らが宿泊したホテルでは、巡礼月12～14日の3日間は食事が出なかった——、タクシーで自分たちのホテルに戻った。サヤン氏は、ホテルで車椅子を借り、タクシー乗り場まで母と兄夫婦を送っていき、空の車椅子とともにホテルに戻った。

翌7月2日（巡礼月14日）、サヤン氏は日の出前の礼拝を聖マスジドで行い、ホテルで朝食をとった後に荷物整理をし、近くの郵便局から325リヤル（約13000円）の送料で今後不要になる荷物を入れたスーツケースを日本の自宅に送った。夫への手紙も送ろうとしたが、スーツケースとほぼ同額の料金になると郵便局員に聞いて、これは出すのをあきらめた。そして近くの市場で安価な大型スーツケースを買った。

100リヤルといわれたのを90リヤルに値切った。そしてホテルに戻り、残り数日分の荷物をここに入れた。

この日の昼食はクルバンの肉パーティーとなった。サヤン氏らのツアーは2食付きのプランであり、昼食は含まれていなかったが、ホテル側の協力を得て特別にレストランで一行が羊を中心とした肉を食べた。引率者兼先生からは、さあみなさんいっしょに肉を食べましょう、というSNSのメッセージも届いた。もっとも、羊肉の臭いが苦手なツアー参加者もあり、彼らはパーティー出席を見送った。

サヤン氏らは、夜の礼拝を聖マスジドで行ったあと、つづけて大巡礼最後の儀礼行為である「別離のタワーフ」を行った。このときは、男性が白い巡礼服を着る必要はない。サヤン氏らのグループ以外にも、平服でタワーフを行っている男性はいた（写真4-8）。ただし、彼らが「別離のタワーフ」を行っていたのか、巡礼中何度行ってもよいタワーフを行っていたのかは不明である。別離のタワーフでは、マカーム・イブラーヒーム近くでの2ラクア／ロカの礼拝やサアイ／シャイ儀礼もしない⁵⁴。ザムザムの泉の水を飲む必要もないが、のどの渇きもあったので、サヤン氏は飲んだ。



写真4-8 タワーフする人々
イフラムを脱いだ平服の
男性もタワーフをしている。

⁵⁴ ブイテラールらは、（別離のタワーフではなく）「別離のウムロ」においてはサアイ儀礼を行うとしている（Buitelaar, Stephan-Emmrich & Thimm 2022b(2021): 2）。しかし、私は話者から「別離のウムロ」という表現を聞いたことはない。サヤン氏も、それは聞いたことがない、また別離のタワーフにサアイ儀礼が伴うと聞いたこともない、という。

カアバを7回まわり、サヤン氏はカアバとマッカにさよならを告げ、再度この地に来られるようにと祈願した。

7月3日の朝、サヤン氏ら一行はマッカを出て、バスで6時間のマディーナに向かった。

サヤン氏の母と兄夫婦は、サヤン氏が出発したあともしばらくマッカに滞在し、7月8日にインドネシアに帰った。帰国後の母らが体調を崩すことはなかった。母は、子や孫らへのみやげ物をマッカで買ったものの、近所の人々に配るための大量のみやげ物を買う時間もスーツケースの余裕もなかった。そのため、ジャカルタに帰ってから、母と同居しているサヤン氏の弟が市場に行き、礼拝の際の敷物などのみやげ物を200人分近く買って、これを近隣の人々に配った。インドネシアでは、ハッジに行くのは一定の金銭的余裕があるからとみなされることもあり、帰国後にみやげ物を渡す慣例がある。事前のスラマタン——サヤン氏の母は、自宅で出発の1週間前にスラマタンを催行し、サヤン氏も短い時間 SNS のビデオ通話でこれに参加していた——に来て祈願をしてくれた方々へのお礼の意味もある。これにたいして、日本からハッジに行く場合、友人たちへのみやげ物は買うにしても、近所の人々への配慮はまず不要である。これも、日本発とインドネシア発のハッジの違いである。リュッキングによれば、たとえばイエルサレムに巡礼あるいは観光に赴くキリスト教徒も含めて、インドネシア人女性巡礼／観光者の購買意欲は高い。女性たちのもつ近隣関係・友人関係・同窓関係そしてプガジアンを通した宗教関係等のネットワークが、大量のみやげ物を買う背景にある (Lücking 2022 (2021): 93, 97-98)。

(5) マディーナでの楽園訪問そして帰国

サヤン氏は、マディーナに到着したところから体調悪化をはっきり自覚した。4人相部屋での睡眠不足、疲れの蓄積、ハッジの諸行事が何とか無事終わった安堵感などが重なったためと考えられる。マディーナのホテルは部屋が広く豪華で快適であったが、やはり4人部屋であった。ホテルに着いた7月3日は、荷物を整理し、洗濯物をランドリーに預け、ホテルで休息をとり、部屋で礼拝をした。疲れと安堵感から休息をとる者はおおかった。

7月4日、サヤン氏は、ホテルから徒歩5分のところにある預言者マスジド（ナバウィ・マスジド）で日の出前の礼拝をした。前日の夕食をホテルで食べていたとき、預言者マスジドでの夜の礼拝を終えて帰ってきたグループの友人たちから道順を聞いておいた。そして、午前中は友人へのみやげ物——壁掛けタペストリー、ムスリムもつかえるマニキュア、アイライナー、伝統的な歯磨き粉 (siwak) など——を買った。100円ショップならぬ1リヤルショップがあると聞き、グループの友人たちとそこにも行った。この日は午後の礼拝だけを部屋でし、あとは預言者マスジドで礼拝を行った。この日、グループのある友人が、Nusuk での予約がなくても預言者マスジドの中に入って「楽園の庭園」を訪れることはできる、とサヤン氏に教えてくれた。そこで、サヤン氏は、彼女と翌日いっしょに「楽園の庭園」に行くことを申し合わせた。サヤン氏は、このマスジドの女性用礼拝スペースでは何度も礼拝をしていたが、Nusuk での予約がないと内部には入れないと兄から聞いていたので、この友人からの情報は朗報であった。

マディーナにきた巡礼者はほぼみな預言者マスジドに参詣する。そしてマスジド内の預言者たちの墓に面する場所にある「楽園の庭園」(al-Rawdah/Raudhoh, Taman Surga) で礼拝し祈願することを望む。預言者ムハンマドは、自身がそこで説教をした説教壇 (mimbar) と、自身の住居までの空間を「楽園の庭園」であるとし、ここで行った礼拝と祈願は、神の思し召しがあれば (インシュアウロー) アッラーに直接届くと述べた、とされる。また、ここで礼拝と祈願をすれば、自身が来世で天国に行きやすいともいわれる。ここは、旧約聖書にあるエデンの園に対応する、ムスリムに



写真4-9, 4-10「楽園の庭園」の目印となる柱の花の彫刻

としての地上の楽園である（大塚・小杉他（編）2002: 216, 1035; 佐藤次 2009: 36-38; 野町 2002: 32; Esposito et al. (ed.) 2003: 262; cf. Bianchi 2004: 17-18; Irwin 2023 (2010): 1-3）。現在、この「楽園の庭園」には屋根が設けられ、扇風機もつけられている。

サヤン氏は、3～4年前にあるウスタットのプガジアンではじめて「楽園の庭園」について聞いた。もしマディーナに行く機会があれば、地上の楽園たるこの場所をぜひ訪れるとよい、という話であった。ウスタットは説教の協道的エピソードとして「楽園の庭園」に触れただけであったが、サヤン氏はそれを聞いたときからここをぜひ訪れたいという強い思いをもっていた。そのウスタットは、「楽園の庭園」をその周囲の場所から区別する指標として絨毯の色——そこは緑で、まわりは赤である——を挙げていた。しかし、サヤン氏は、その後友人のネマン氏から、いまは絨毯の色は周囲も緑色であり、「楽園の庭園」の指標は花のかたちの金の彫刻が施された複数の柱であると聞いていた。

7月5日午前2時半ころ、サヤン氏は、友人とふたりでホテルを出て、まず預言者マシジドの女性用礼拝スペースで礼拝をし、子や夫の健康を祈願した。そしてマシジド内に入り、友人から教えられた柱の花を見つけた（写真4-9, 4-10）。ここが「楽園の庭園」であると知り、ああ、私はここに来ることができた、という歓喜の思いが湧いてきた。サヤン氏がここを訪れた時間帯は日の出前であったが、すでにおおくの人で混雑していた。サヤン氏はここで礼拝と祈願をしたかったが、そのためのスペースを探すことは難しく、また予約なしに礼拝をした場合に警備の者から注意を受ける恐れもあったので、楽園の庭園での礼拝・祈願はあきらめた。もし事前に Nusuk で予約を取っていたならば、15分ほどの時間が割り当てられ、ここで礼拝をすることもできたであろうが、と後日のインタビューの際にサヤン氏は語った。ともあれ、サヤン氏は、マディーナでもっとも訪れたいと思っていた場所に、予約はできなかったが、訪れることができたことに深い感慨を覚えた。

「楽園の庭園」の前には預言者ムハンマドたちの墓があるが、ここに入れるのは男性にかぎられる。サヤン氏は、その墓を楽園の庭園内の女性に解放されているスペースから眺めることしかできなかったが、それでも十分うれしかった。早朝4時半ころになり、おおくの人の波に押されるように、サヤン氏と友人は外に出た。そしてホテルで朝食をとった。その後、サヤン氏らは8時にホテルを出発し、3台のバスに分かれてマディーナ観光に出かけた。この旅程は巡礼ツアーにあらかじめ組み込まれていた。サヤン氏は体調がすぐれなかったが、クバー・マシジド（Mesjid Qubā'）に行きたかったので同行した。次回いつ行けるかわからない、という思いもあった。

一行は、まずマディーナの北5キロメートルにあるウフド（Uhud）山に向かった。625年に預言者ムハンマドの軍がマッカからやってきたクライシュ族と交戦し、預言者の叔父ハムザを含む70名の殉教者を出した場所である。前年のバドルの戦いで大敗を喫したマッカ軍は、復讐を誓ってマディーナに進軍し、この地でイスラーム軍を破った。預言者は、この敗戦をアッラーが与えた試練

と受け止めた。この古戦場跡には殉教者たちの墓があり、ここを訪れた者たちは死者たちに哀悼の祈りをささげる（野町 2002: 53-56; 大塚・小杉他（編）2002: 199-200; 佐藤次 2009: 12）。不調のサヤン氏は山頂に上らず祈りもせず、墓を見るだけにとどめた。次に、デーツ（ナツメヤシの実）・ファームに向かった。デーツが主要なみやげ物であることは、マナシックでも触れられていた。みやげ物店や柑橘系のジュースを売る売店などもあった。サヤン氏は、夫がデーツを好きなこともあり、ここでデーツを買ったが、引率者兼先生からはここは高いよと教えられた。農園を見学し、1時間弱で一行はふたたびバスに乗った。最後に、マディーナの南約6キロメートルにあるクバー・マスジドに向かった。マッカからのヒジュラの際、預言者が啓示を受け、マディーナで最初にマスジド建設の礎をつくったところとされる。預言者は、後日も時折ここを訪れ、クバーの人々と礼拝をした。何度も増改築を繰り返し、いまではマディーナを代表するおおきなマスジドとなっている（野町 2002: 58; 大塚・小杉他（編）2002: 332）。

クバー・マスジドは、全体が白を基調とした美しいマスジドであり、郊外にあることもあって、のんびりした風情を漂わせている。このときは訪れる人々もすくなかった。サヤン氏は内部を見学し、女性用礼拝スペースで2ラクア／ロカの礼拝をした。まだ礼拝の時間ではなく、サラートとは別の任意の礼拝である。このときともに行動していた友人が、気持ちがいいのですこしこの礼拝場所で寝ころんでいたいといい、ふたりでしばらく休んだが、集合時間を勘違いしたため、バスの乗車時刻に若干遅れてしまった。そして一行はホテルに戻った。このあと希望者はロビーに12時10分に集合し、歩いて預言者マスジド近くの店に行ってデーツを買い、このマスジドで礼拝した。サヤン氏もこれに参加した。

このように、ふたたびイフラーム状態に入ることのない巡礼者たちは、マディーナにおいてマスジド参詣をし、若干の観光も行った。それは、ある種の聖地巡礼観光とみなしてよい。この日の半日バス観光には、みやげ物屋を多数そろえた施設の見学も組み込まれていた。マッカでも半日のバス観光があったことは先述した。ハッジツアーは、巡礼が最大かつ主たる目的ではあるが、部分的にはレジャー観光の要素も含んでいる。

7月6日、サヤン氏はホテルのチェックアウトまで休息をとった。ホテルでの夕食後、夜半にサヤン氏らはバスでマディーナ空港に向かった。このバス内でパスポートを引率者兼先生から受け取った。そして7月7日午前5時発のフライトでマディーナを飛び立ち、朝7時ころドーハ空港に到着した。ここが経由地である。

ドーハでは、バスで伝統的な市場（スーク）、国立博物館、2022年のワールドカップサッカーカタル大会の開幕ゲームが実施された競技場などを訪れた。これも旅程に組み込まれていたバス周遊観光であった。午前中にこのドーハ観光をし、昼にドーハのホテルにチェックインし休憩した。サヤン氏はホテルで休んだ。そして一行は7日午後11時にホテルからドーハ空港に移動し、午前2時すぎのフライトで成田空港に向かった。成田到着は予定よりも1時間半ほど遅れ、8日午後8時過ぎとなった。ここでツアーは解散した。サヤン氏は成田空港近くのビジネスホテルで1泊し、翌7月9日の午後に帰宅した。

サヤン氏の体調はさらに悪化した。帰宅した翌日に行きつけの医院に行くとインフルエンザと診断された。日本ではいま流行っているが、サウディアラビアの方では流行ってないはずなので日本に帰って感染したのであろう、と医師にいわれた。サヤン氏の友人のおおくも大巡礼や小巡礼の間や帰国後に体調を崩した経験をもつ。とくに、乾燥した砂漠地方ゆえと思われるが、咳と痰は大巡礼から帰った者のほとんどが経験する症状である。

(6) 若干の補遺

以上、サヤン氏が経験した2023年のマッカ大巡礼について記述した。本項では、これまでの記述に盛り込めなかったエピソードについて補足的に触れる。

帰国後のインタビューで、サヤン氏は、マッカでの印象深いこととして、さまざまな国からさまざまなムスリムがここに集っていると実感したことを挙げた。それは、巡礼の儀礼行為を聖マスジドやミナー・アラファトなどで行った際にも、また儀礼行為を離れてマッカの町で行き交う人々と簡単なあいさつを交わした際にも、感じたことである。

たとえば、聖マスジドでのサラートのとき、ふと見ると、サヤン氏がインドネシアで教えられた所作のルールとは異なる動きをする者がいた。サヤン氏の場合、サラートでは、直立したまま両手を（右手を上にして）胸の下部ないし腹の上で重ねる所作をしたり、座ったまま右手の人差し指をカアバの方向に向けてまっすぐ立てる所作をしたりする（cf. 大塚・小杉他（編）2002: 417）。立って両手を重ねる場合はこうする、座って指を立てる場合はこうする、といったように、それらの所作はかならずこうすべきもの、その際に唱える祈りの一節が終わるまでそのままにすべきもの、などと子どものころから教わっていた。しかし、聖マスジドでは、立って両手を胸の上部つまり乳房のところで重ねる所作をする女性もあり、座って右手の指を立てたり曲げたりを繰り返す者もいた。こうした所作もあることをサヤン氏はまったく知らなかった。インドネシアで教えられたシャーフイー派（第2節第3項）の規範の中には絶対そうすべきものとはいえないものもあることを、あらためて体験的に知ったのである。

カアバをまわるタワーフの際には、危険を顧みずにカアバにすこしでも近づこうと押したり割り込んできたりする者が男女ともいた。そうしたことは巡礼前に友人たちからもマナシクでも聞いていたが、実際にまわりの人々への危害となる可能性のある行動をする者が巡礼者の中におり、ウムロの際のタワーフでは手をつないでいた友人が他の巡礼者の波に巻き込まれそうになったこともあって、サヤン氏はいささか衝撃を受けた。また、ミナーでは、サヤン氏らのツアー参加者の女性のテントの中に中東の国から来たと思われる男性数名がいきなり入ってきたことがあった。恐怖を感じたツアー参加者のひとりが引率者にすぐにSNSで連絡し、2名に来てもらったところ、この男性引率者を見た当該の男性集団は一転してごみ拾いをはじめのふりをした。男性引率者が彼らを速やかに外に出し、事なきを得たが、引率者男性の助けが遅れば物品を物色されて奪われた可能性はあったと考えられる。インドネシアや日本などから遠路はるばる来る巡礼者にとって、巡礼の機会と場所は神聖であって、悪事を働くことなど思いもよらないが、サウディアラビア近隣から来る者にとっては、禁域や巡礼期間の聖性はそれほど特別なものではない——そして悪事の好機となりうる——からなのかもしれない、とサヤン氏は語っていた。

マッカでもミナーのテントでもおおくの外国人労働者が働いていることを、サヤン氏は当地を訪れてはじめて知った。とくにフィリピン系の労働者がおおいと感じたが、インドネシア人もすくなくなかった。たとえば、サヤン氏がマディーナで乗ったバスの運転手はインドネシア人であった。マッカでもマディーナでも、サヤン氏はインドネシア料理店を訪れた。大規模集団を受け入れる今日の大巡礼において、非ムスリムも含む外国人労働者のマンパワーは不可欠である（cf. Lücking 2020）。

それは聖マスジドについても指摘できる。聖マスジドに足繁く通って礼拝をしたサヤン氏は、何度かマスジド内を掃除する人々を見た。彼らはアジア系の外国人労働者であった。言葉を交わすことはなかったので国は不明であるが、体格や服装などから彼らが中東系でないことは明確であった。彼らは巡礼者が集中する時間帯を避けながら、一定範囲を太いロープで囲んで床を掃除してい

た。聖マスジドの維持管理もまた外国人労働者によって支えられている。2010年代の時点で、サウディアラビアには、不法滞在も含め外国人労働者とその家族が1000万人いるとされる（武藤2015a(2007): 303）。

サヤン氏は、マッカではほぼつねに旅行会社から配布されたジャケット——背中におおきな日の丸と旅行会社のロゴが記されている——を身に着けて外出していたので、町の人々から「日本から来たの？」あるいはシンプルに「ジャパン？」とよく訊かれた。サヤン氏は、日本から来たがインドネシア人であると説明をするのが若干面倒であったこともあり、おおくの場合そうだと答えていた。すると「マーシャーアッラー／マーシャアウロー」（*mā shā'a Allāh*; アッラーが望み給うたことは成るの意。すごい／素晴らしい！と感嘆・驚嘆するときの常套句）とよくいわれた（cf. 大塚・小杉他（編）2002: 909）。日本ではムスリムがマイノリティであるということをサウディアラビアの人々は知っており、そうした遠い日本からはるばるやって来たことに感激し感心していたのであろう、とサヤン氏はいう。

日本から来たことで「得した」こともあった。ミナーからマッカに戻った巡礼月12日のことである。日没後の礼拝を聖マスジドで行おうとひとりホテルから向かったところ、すでに中は人でいっぱいであり、入り口のフェンスも閉じられ、サヤン氏は中に入れなかった。周囲に集まった多数の巡礼者が門番役の警官らに入れてくれるよう交渉し懇願したが、かなわなかった。やがて日没後の礼拝時刻を告げるアザーンが響きわたり、フェンスの前にいたサヤン氏らは、仕方なくここで日没後の礼拝をはじめたところ、門番の警官はこれを阻止することはできず放置した。そののち、この門番の警官たちも礼拝をはじめた。この隙に、サヤン氏らフェンスの外にいた巡礼者たちはフェンスをどけてマスジドの中に入った。そこにも門番役がおり、それ以上中に入るのは制止されたが、ひとりの門番役がサヤン氏の着用しているジャケットを見て、日本から来たのかと訊いた。サヤン氏がそうだと答えると、すこし待てといわれた。マスジドから出入りする巡礼者たちの波がすこし収まったころ、この門番役はサヤン氏を中に入れてくれた。サヤン氏の前にはアフリカ系の女性巡礼者数名がおり、彼女たちも若干の交渉をして中に入れてもらったので、日本人だけが特別に優遇されたというわけでもないが、このときサヤン氏は日本から来た（ことが明確なジャケットを着ている）巡礼者にたいするサウディの人々の親切心を感じたという。こうして、サヤン氏は、このときの夜の礼拝を聖マスジド内で行うことができた。

サヤン氏は、ザムザムタワーに母たちで行った日、母をエスコートしながらゆっくりとマッカの街を歩いていた。それ以前、日本からかという質問にそうだと答え「マーシャーアッラー／マーシャアウロー」といわれたことは何度かあったが、それとは別に、このときは、年老いた母をエスコートしているサヤン氏を優しい目で見える人々から「マーシャーアッラー／マーシャアウロー」とやさしいトーンで何度もいわれた。アラブの人々は年老いた人を大切にする。サヤン氏と同グループの友人たちも、サヤン氏がジャカルタから来た母とマッカで会っていることを知り、母とサヤン氏にあらためてあいさつをしたという。

インドネシア人関連では、次のようなエピソードもあった。サヤン氏がひとりで聖マスジド近くのフードコートに入り、昼食を買って座席を探していたところ、アラブ系の夫婦がそれに気づいた。彼らとサヤン氏とは初対面であったが、夫の方がまだ食事が終わっていないにもかかわらず立って椅子を譲ってくれた。ところが、その空いた椅子を、すぐ隣に座っていたインドネシア人の男性が食事を取りに行っている妻のために横取りした。アラブ人の夫は、このインドネシア人男性に、この椅子はまだつかうので取らないでほしいと英語で話し、取り返した。しばらくしてアラブ人男性は妻と目で合図し、あらためて席を立て、今度は確実にサヤン氏が座れるように椅子を

譲ってくれた。妻もどうぞ座りなさいというウインクをサヤン氏にした。サヤン氏は、この夫婦のやさしさや思いやりに感謝の念を示すとともに、エチケットを知らない、あるいは端的に言えば図々しい、インドネシア人のふるまいに、自身もインドネシア人でありながら違和感を覚えた。

大巡礼は、ここに結集するすべてのムスリムが、貧富や地位の差とは無関係に、おなじムスリムとしてひとつの場所で信仰に根差したおなじ行為を重ねる無二の機会である。それゆえ、巡礼者たちは、とりわけムズダリファやミナーにおいて、グローバルなムスリム共同体の一体感やたがいの絆を感じ取り、感極まる。先行研究もこうした一体感とその至福感・満足感に言及しており、たとえば水谷はウクーフの際に「ムスリムとしての連帯を実体験する」と述べている（水谷 2010a: 141; Clingingsmith, Khwaja & Kremer 2009; Utomo, Scott & Jin 2019: 56, 64）。しかし、きれいな心で臨むべき巡礼の現場・機会において、違和感を覚えることは若干あった。サヤン氏は、ひるがえって自身もそうした過ちをしていたのではないかという自戒を自身に向けて考えていた、という。

第5節 アンチノミーか弁証法か

本節では、以上の各節の議論を計6つの論点に整理したのち、2点を加えて本章を総括する。その2点とは、第4節の記述以後の日本発ハッジツアーに関する民族誌的補足と、本章の題目に「弁証法」を付した所以についてである。

*

本章では、コロナ禍明けの2023年に日本発のハッジ・タマツトゥ型大巡礼に参加したひとりのインドネシア人ムスリマの巡礼準備段階からの実践と認識・理解を、ミクロかつボトムアップの視点から記述した。その際、理念型としてのハッジについて論じるイスラーム学の視点からは注目されない、宗教行為の外部にある諸相をも含む社会的行為現象としてのハッジの実態を、つまりは小文字で複数のイスラームとムスリムの具体的なあり方を、その実践主体たる当のムスリマや彼女を取り囲む諸主体の相互主観的な相互作用を背景に描こうとした。こうした本章の基本的な議論枠組みが第1点である。

教義上変わらぬかたちで営まれているとみなされるマッカ巡礼とくに大巡礼は、社会現象としてみればその相貌を更新しつづけている。先行研究に照らしつつ具体的に確認しえたのは20世紀後半以降とくに21世紀の諸変化にすぎないが、巡礼ビザ発給数の国別割り当て枠の調整、交通インフラの整備、マッカ中心部の巡礼者受け入れ体制強化、マスジドやミナーのテント村の拡張、聖マスジドをはじめとする聖地やそこでの諸施設の安全対策強化——冷房設備更新も健康面の安全対策である——、コロナ禍中における巡礼者受け入れの大幅制限、Nusukの導入など、現代のマッカ巡礼は、サウディアラビア政府による諸制度体制の度重なる更新に支えられている。その背景にあるもっとも重要な変化は、世界のムスリム人口の増加率を上まわる巡礼者数の増加、中でもアラブ世界外からの巡礼者数の増加である。ヒジュラ暦第12月の数日に限定される大巡礼の実行希望者は、すでに受け入れ可能なキャパシティをこえており、ゆえに国別の割り当て枠は不可避となっている。しかし、この絞り込みによっても、大巡礼における事件・事故の発生リスクは依然高く、実際におおきな事件・事故もしばしば起きている。そのため、食・住・医療・衛生を含めたリスク管理は重要度を増している。軍・警察・ムタウウィフによる巡礼者の移動管理、マスジドや聖地・聖都における入域管理、ビザ発給とセットになった公的保険、入国者ひとりひとりへの認識番号付与、パスポートの一時預かりなど、これらの措置はすべて、フーコーのいう生権力の具体的なあらわれ

にほかならない。サウディアラビア政府は、この数十年間にさまざまな局面でリスク対策兼巡礼者管理対策たる多面にわたる措置を講じてきた (Bianchi 2004: 10–12)。第2節第1項で述べたように、マッカ巡礼が宗教儀礼活動としての連続性・不変性を今日まで保持しえたその背景には、時代の変化とりわけ巡礼者数の激増に即応した諸対策の導入があった。それは今日ますます重みを増している。とはいえ、酷暑の環境の中でキャパシティを超えた巡礼者が一堂に会することが事故や死者を生む根本的な要因であるため、抜本的な解決は困難である。また、対策の導入は潜在的な次元にあるリスクの増大を惹起するとも考えるべきである。ともあれ、この不変性と可変性の総体の把握も本章の主題のひとつであった。これが第2点である。

とりわけそうした変化の一端として注目されるのは、現代——すくなくとも20世紀末以降2023年まで——のマッカ巡礼が旅行会社の企画・販売するパッケージ型観光の形態で実施されるようになった点である。大巡礼であれ小巡礼であれ、海外からの一般の巡礼者は、フルパッケージかどうかはさておき、パッケージ・ツアーに参加しなければ事実上マッカ巡礼を果たしえない。本章ではこの点に着目し、マッカ巡礼を拡張された意味での観光とみなす観点から捉えようとした。それゆえ、第4節の記述では儀礼的行為以外の局面にも目配りした。私が知るインドネシア人にとって、巡礼はまずもってイバダ (ibadah; 礼拝、信仰行為) であるが、その実態はかならずしも宗教的意義だけに完結してはおらず、またそれに還元して理解することもできないと思われる。これが第3点である。

この点に関連して、サヤン氏の親しい友人であるコクット氏 (2023年当時40代前半、既婚) と夫が実行した大巡礼に補足的に触れておきたい。彼らは、インドネシアでお見合いをし、結婚した。すでに日本で仕事に就いていた夫は、知り合いを通してお見合い相手を探し、短期の本国帰還の際に会い、ビザ等の手続きもして、妻コクット氏を連れて日本に帰った。彼女は間もなく妊娠し、子どもが生まれた。その後、まだ幼い子どもたちを親しい友人に預かってもらい、夫婦は日本から大巡礼に行くことにした。結婚は2010年代前半、大巡礼は2010年代後半である。この間、夫は仕事、妻は子育てに忙しく、新婚旅行に行くチャンスもなかった。大巡礼は、夫婦にとってはじめてのまた夫婦水入らずの旅行となった。とくにコクット氏は、この巡礼ツアーを、新婚旅行に代わるものないしそれに近いものと捉えていた。旅行のためにいろいろな物品を買い10万円ほどつかったが、それも彼女にとっては楽しいことであった。もちろん、夫婦とも目的はイバダであることは十分承知していた。しかし、一方で、大巡礼ツアー参加は宗教だけにとどまらない楽しみの要素や消費もまた内包するものであった (cf. 橋本 1999; 吉田 2023a)。むしろ、コクット氏にとっては、大巡礼が目的だからこそ、最大の楽しみとなる旅行になったのであった。私は、当事者の相互主観的な理解に照らした場合、マッカ巡礼のこうした特徴を看過してはならないと考える。むしろ、巡礼者を観光者に還元することは妥当ではない。ただ、巡礼だからこそ心も高揚し、楽しみの要素も消費の要素も高くなるという相乗効果には着目してよい。また、現代のマッカ巡礼者は巡礼において観光的な行為を多少なりとも行っている事実もある。このことは、日本発の巡礼者のみならず、インドネシア発の巡礼者にも、またおそらく他国からの巡礼者にも、当てはまると考えられる。

ところで、本章は2020年代のインドネシア人ムスリムの日本発大巡礼に照準を合わせたが、荒木は2010年代のインドネシア人ムスリムのインドネシア発小巡礼に照準を合わせた研究を提示している。この荒木の研究にすこし触れておきたい。荒木は、ジャワ島西部の都市バンドゥンでの聞き取り調査にもとづき、小巡礼を「宗教的商品」とみなす解釈を提示する。荒木の着眼点は「宗教」と「世俗的商品」との「表裏一体」である。高額な費用を支払って赴く小巡礼は、ムスリムの

敬虔さという宗教的一面と、自身の威信や社会的地位の担保や発揚という世俗的・商品的な一面という、一見すれば裏腹な目的を同時に果たす媒介物となっており、この点で大塚のいう「宗教化」と「世俗化」が表裏一体をなして展開するイスラーム復興の一側面を如実に示すものである、と荒木はいう（荒木 2018: 91-93, 2022: 98-100; 大塚 2002）。この解釈の細部についてはさて置き⁵⁵、この荒木や、前節第4項末のリュッキングの議論からは、インドネシア発の巡礼にも宗教以外の楽しみや消費などの観光的側面を看取することはできる。2010年代以降のインドネシア発小巡礼の爆発的増加も、宗教的動機の上に還元して理解することはできない現象であろう。インドネシア発の大小巡礼（写真4-11）、日本発の大小巡礼、他地域発の大小巡礼の形態・特徴に関するデータを蓄積し、本章が着目した、宗教が主目的であるがゆえの楽しみや巡礼観光のパッケージ化といった論点、また荒木が着目した世俗的側面等について、社会変化・個人間の差異・当事者が意図しない諸要因の連結（脚注39）等を踏まえた検討を重ねていく必要がある⁵⁶。これが第4点である。



写真4-11 巡礼者専用の空港出口

ジャカルタのスカルノハッタ国際空港には巡礼者専用の出口がある（2023年8月筆者撮影）。この空港は、ほぼ1年を通して大小巡礼者で賑わっている。

そうした検討の端緒として、本章は、イスラームの中心地たるマッカやアラブから遠く離れているだけでなく、世界最大のムスリム人口を抱える本国インドネシアのホームからも遠く離れ、本国とは異なる逆境と順境の交差する日本の地で、デジタルツールを駆使しながら生きる日本在住インドネシア人ムスリムが、ムスリムらしいまっとうな生活を営もうとするその一環として、本国に比べればより手の届くところにある大巡礼を実行しようとするその具体的あり方を描こうとした。これが第5点である。イスラームは、狭い意味での「宗教」ではなく、日々の生活から社会や政治などをも規定する思想や規範の総体であり、通常いう「規範」という範疇をこえてさまざまなかたち

55 私は、荒木の議論におおむね首肯するが、荒木の解釈の細部については違和感を覚えるところもある。ここでは3点を指摘する。①ピアンチがインドネシアの巡礼者は「地域的偏差に富む」（Bianchi 2004: 194）というように、インドネシア人の巡礼がもつ地域的な差異に、そして本研究が着目した個人差にも、十分目配りする必要がある（ex. Bianchi 2004: 184-198）。荒木は「都市部の中間層」に関する議論として一般化し理念型化するが、その議論が地域的偏差そして個人差をこえてどの程度当てはまるのかについては、検討の余地があるように思われる。②荒木は、インドネシア都市部の中間層の小巡礼に、威信や社会的地位の獲得といった自己顕示欲にかられた消費行動としての一面を見出す。ただ、私が知る日本在住インドネシア人に関するかぎり、その種の自己顕示欲の開陳に自制心や自戒の念がある。③荒木のように巡礼を宗教化と世俗化とが表裏一体をなす「混成現象」（荒木 2018: 93, 2022: 100）であると捉えることに、私は躊躇を覚える。そうした宗教化と世俗化、威信と敬虔との区別は、人々の認識というよりも研究者側の認識枠組みに由来するところがおおきいのではないかと考える。当事者にそうした区別があるとしても、その区別の比重や強度はそれぞれのムスリムや巡礼者で相当異なると考えられる。また、荒木は「威信」を世俗の側に位置づけるが、インドネシア人ムスリムの認識に即せば、宗教の側に位置づけうる「威信」もあると考えられる。たとえば、大巡礼経験者にたいする敬意の念とその表明は（第3節第2項）、宗教的な威信・地位への評価に由来する。ウスタットへの敬意も同様である。荒木と私の間には「威信」概念の含意をめぐって認識の差異があるのかもしれないが、インドネシア人ムスリムの認識や価値観における「宗教」と「世俗」の境界設定可能性やその交差の複雑性に留意する必要があると思われる。そもそもイスラームは世俗と宗教を内包しまた超越したものである（第3節第1項）。

56 マッカへの大小巡礼の実態を記したデータは決して十分ではない。そのひとつの背景は、マッカ巡礼を直接参与観察しうる者がムスリムに限定される点にある。このことは、たとえば日本における御遍路などの巡礼の参与観察が、観察者の信仰心と関係なく成立しうることと対照的である。一般に、ムスリムはマッカ巡礼を信仰心にもとづく人生最大の宗教行為として行うため、学術的な観察や記述の対象になりにくい。ましてや、自身の経験したマッカ巡礼を信仰以外の点を含めて幅広く記述しようとする記述は生まれにくい。そのひとつの例外は、1990年代後半のマッカ大巡礼を客観的に捉えようとした野町の写真集とエッセイである（野町 2002; 野町 & Nasr 1997）。

で人々の生を規定する⁵⁷（第3節第1項）。巡礼は、紛れもなくこうしたイスラームの焦点に位置する営みであり、ムスリムの現世での生のクライマックスに当たるものである（cf. Bianchi 2004: 3）。

預言者ムハンマドは、「別離の巡礼」の際、裕福な者が遠足気分で、貧しい者が気取りや銜いのために、巡礼をするかもしれない将来に思いをはせていた（第3節第2項）。本章の議論は「遠足気分」、荒木は「気取りや銜いのため」の巡礼を、それぞれ主題化したともいえる。預言者が述べた事態はまさに現実のものとなった。ただし、現代のイスラーム化の動向を見るかぎり、巡礼の精神は失われていないと考えてよい。これが第6点である。たとえば、ピアンチは大巡礼をムスリムにとっての「精神的な生における頂点」とであるとし（Bianchi 2004: 3）、竹沢は「二百万人もの信者がおこなうこの道行 [= ミナー・アラファトへの巡行] と神殿の周回 [= タワーフ] は、たいへんな熱気と集団的な高揚を生み出す。それは世界各地から集まった信者に興奮と感動を与え、一生涯のあいだ消えることのない至福の記憶を刻印するのだ」とする（竹沢 2023: 8）。この「生における頂点」で刻印される「至福の記憶」の希求と保持は、世界規模で進むイスラーム化の中に生きる現代のムスリムにいっそう浸透し、彼らを鼓舞するものとなっている。本章の議論は、こうしたイスラーム化のただ中にある、コロナ禍直後の大巡礼の具体を主題化したものであった。

＊

以上、ここまでの本章の記述ポイントを6つの点にまとめた。以下、残る2点について述べる。第7点は、第4節で縷々論じた2023年の後の日本発大巡礼についてである。

2024年の大巡礼は、インドネシアでは、前年やコロナ禍前と同様にフルパッケージ・ツアーのかたちで運営された。しかし、日本発の大巡礼はおおきく変わった。サウディアラビア政府の方針により、旅行会社がビザの代行を含めツアー催行をハンドリングするフルパッケージ型から、先述したアプリケーション Nusuk（Nusuk Hajj Platform）によるビザ申請、つまり巡礼者自身によるビザ申請に、一元化されたのである。そして、サヤン氏が利用した旅行会社がこの年に販売したハッジツアーは、ラグジュアリー、プレミアム、スタンダードの3タイプに分かれ、それぞれの金額は220万円、130万円、90万円となった。すくなくともプレミアム以下は、フライトとホテルは自分で選択し、場合によっては追加料金を支払う方式となったようであり、ガイド兼先生は現地到着後空港からの同行となった。旅行会社は、ビザ申請サービスをのぞくホテルやフライトの販売はできたが、フルパッケージタイプといいうる大巡礼観光商品は販売できなくなったのである。さらに2025年と2026年は、旅行会社がハッジツアーの販売そのものをできなくなった。ただし、日本発小巡礼に関しては、旅行会社がフルパッケージ型商品を2024年以降も販売している。

第2節第2項では、大巡礼発給ビザ制限とパッケージ観光化の組み合わせは合理的な方法であると述べた。しかし、各国の領事館と旅行会社に一定程度ビザや移動・宿泊等の予約管理を委ねることがプロセスの綻びや遅延リスクを招くこともある。第4節第2項で触れたように、サヤン氏のビザとパスポートの自宅への到着は出発3日前であった。旅行会社の担当者からは、ハッジのビザ発

57 アンダーソンは、『想像の共同体』で、マッカ巡礼を例に挙げ、出版時代以前では想像の宗教共同体の現実性がこうした巡礼の旅に深く依存していたと指摘する一方、近代では国民国家という想像の共同体の現実性が、より狭い範囲での、首都への求心力をもった世俗的な「新しい」巡礼の旅に支えられてきた、と論じた（アンダーソン 1987(1983): 97-111）。しかし、彼のいう新しい巡礼は狭い範囲を超えグローバルに拡大し、多中心的かつ複雑な交差の中において展開している。移民や移住者は、そのことを端的に教えてくれる存在である。そして、現代では世俗的な想像の共同体と宗教的な想像の共同体とはかならずしも明確に区別できず、たがいに複雑に折れ重なっている。マッカ巡礼は、そうした折れ重なりの中にあって、新たな特徴や形態をまといつつ、アンダーソンの議論とはまた別の意味での「新しい」巡礼へとその姿を更新してきている。

給は例年遅れ気味になるが、2023年は領事館の担当者がかかったこともあってとくに遅れている、あまりに遅ければ、地方出発の方には出発当日に空港で直接手渡しとする可能性もある、という連絡を受けていた。幸い、ビザはぎりぎりのタイミングで自宅に届いたが、とくに夫は到着まで心配していた。サヤン氏の母も、インドネシアでのビザ取得プロセスにトラブルがあった。母のビザは、グループが空港に移動をはじめたときに届けられたが、巡礼グループのメンバーの中には後日のフライトに変更せざるをえなかった者もいた。ホテル・テント・車の予約ミス等も含め、パッケージ観光化はリスク管理上決して万全ではない。むしろ、システム障害の可能性等に鑑みれば、情報社会においてゼロリスクの体制など存在しない。そもそも、ある合理化を進めることは別の観点からみた場合の非合理化をおそらく必然的に伴うのであって（第I章第3節参照）、そこに完全無欠な解はありえない。もっとも、巡礼者たちは、利便性や金額には関心を払うものの、最終的にはハッジに行けるかどうかはアウロー次第であると達観しており、こうした管理体制の合理化にはほとんど無関心なのであるが。

日本発のマッカ大巡礼、あるいはむしろマッカ巡礼一般が、今後どのような運営上の変化を受けるのかは十分見通せない。現状、グローバルに見渡せば、旅行会社がコミットするかたちでの相当程度パッケージ化された観光形態は、なお支配的である。ただ、私は、今後、各国の旅行会社が管理運営するフルパッケージタイプから、サウディアラビア政府がパスポート・ビザ・認識番号・IDカードといった相互に紐づけられた情報とその媒体によって巡礼者を一括管理する、今日の情報社会化により適合的な管理体制へと転換していくのではないかと予想している。サウディアラビア政府は、近年のAI等の飛躍的向上を背景に（第III章第2節）、まずは日本や欧米など、安定的・包摂的な情報社会体制を構築し、巡礼希望者がそこに組織的に取り込まれ、かつ比較的少人数である送り出し国から、Nusukを介したマッカ巡礼者の一元管理体制へと舵を切りつつあるのであろう⁵⁸。サヤン氏は、そうした次代の新体制への移行前の最後の年に日本から出発したと考えられる。

*

では、あらためて2023年におけるマッカ大巡礼に話を戻し、最後に第8点として、本章のタイトルに「弁証法」という語をもちいた所以について述べることにしたい。

マッカ大巡礼は、普遍的な大文字のイスラームの探究を目指す視点に立つならば、およそ世俗的な大衆観光からもっとも隔たったところにある、またはあるべき、神聖なる行為現象として捉えられるかもしれない。しかし、序章そして本章第1節・第2節で述べた本研究・本章の視点に立つならば、現代の大小マッカ巡礼は大衆観光型のパッケージ・ツアーとぎわめて親和的であり、宗教的なものにとどまらない観光的な要素や様相をそこに内包したものとして捉えられる。ルーマンの表現をもちいるならば、今日のマッカ巡礼はパッケージ型観光と構造的にカップリングし、またマディーナにある地上の楽園を訪れる参詣観光ともカップリングしている（吉田 2023a: 69–71; cf. ルーマン 2020(1984)）。

一般的に言えば、弁証法は、相容れず矛盾するものの止揚である（第I章脚注7）。ただし、大河内と斎藤によれば、本来弁証法は、何かをあらかじめ固定的な原理としておかずに、対立するも

⁵⁸ ただし、①ビザやパスポートなしで国境や砂漠を越えてやってくる非正規巡礼者への対処、②安定的・包摂的な情報社会体制に巡礼希望者がまだ十分組織的に取り込まれていない大人数送り出し国から来る巡礼者への対処は、おおきな課題として残されている。

の間を行き来しその対立関係を解消するように調整していく運動の中に存する（斎藤（編）2024: 222-225）。ヘーゲルの『精神現象学』も、またさかのぼればプラトンやアリストテレスの「弁証術」も、そうした過程の中での調整によって本来相容れないもの同士を媒介し結びつける営みを肯定的に評価する考え方である。歴史の中でさまざまな変化を経てパッケージ観光化した現代のマッカ巡礼も、あらかじめ何らかの固定的な原理を設定せず、対立関係を調整し媒介する時間をかけた弁証法的な運動の過程における産物として、見ることはできるように思われる。

もっとも、これには異論もあるかもしれない。ヘーゲルやマルクスは、理性と信仰、科学と宗教の弁証法を論じつつ近代に生きる人々の自由について考察したのであって、こうした西欧近代哲学の弁証法の背景にある構え自体はイスラームのあり方とは相容れない、という点があるからである。こうした観点からすれば、パッケージ観光化されたマッカ巡礼のあり方は、相容れないもののよき統合ではなく悪しき結合である、あるいはカント的な意味でのオルタナティブな弁証法つまりは「アンチノミー」——対立を「止揚」できない状態にとどまりつづける——であり矛盾である、とみなされよう。こうした理解の可能性はたしかにある。

ただ、私が知る、巡礼をすでに実行したり将来の巡礼実行を心待ちにしたりしているムスリムたちは、現行のパッケージ観光化されたマッカ巡礼のあり方に批判的・否定的ではない。巨額の出費を要すること——そして本国インドネシアからの出発にはあまりにも長い待機時間がかかること——や、多発する事故とその報道に接し複雑な思いを抱くことはあっても（cf. Acar 2019）、ジェット機に乗って1日以内程度で現地に到達でき、宿泊施設も飲食も用意され、病気や怪我の際には一定の範囲で保険適用も受けられる現行のマッカ巡礼の制度体制は、多少の不満はあっても、またときに現地での対応に遺漏はあっても、否定的に捉えられるものではない。マッカ巡礼に憧れこれを実践するサヤン氏に代表されるムスリムの価値観に照らすならば、またすべてを神の導きとして捉えるムスリムたちの思考様式に照らしても、現行のマッカ巡礼における宗教と世俗あるいは巡礼と観光の結合は、アンチノミーというよりも、矛盾し対立するものの間を行き来しその対立を解消するよう調整していく運動としての弁証法であるとみなされよう。義務的行為たるハッジと預言者マスジドの参詣とをひとつの機会に実行することが、イスラームの教義に反するわけでもない。こうしたことを踏まえると、マッカ巡礼に弁証法の過程を見出す理解は、当事者の相互主観的な理解の把握を重視する立場に立てば、やはり有力なものであるように思われる。私は、こうした点から、後者の解釈をさしあたり前面に置かたちで本章を総括したいと考え、表題に弁証法の語を採用した次第である。

＊

以上、本章では2023年にひとりの日本在住ムスリマが実行した日本発マッカ大巡礼＋楽園観光についての民族誌的検討を行った。ところで、現代の周縁的な楽園観光の中には、アンチノミーつまりカント的な意味でのオルタナティブな弁証法であると理解しうる事例が、ほかにあるように思われる。最後に、そうした事例について検討してみたい。これが、本研究の最後の民族誌的トピックとなる。